

21-457



1200701632725

21

457

21-457



始



8.10.6

21-457

中學百科寶典

大正
5. 7. 19
內交

序言

學問の要は實際に役立つにあり。實際に役立てんには先づ堅く把持するを要す。是れ確實なる記憶を意味するものなり。然して記憶は反覆練習によつて得らる。反覆練習は寔に學問の基礎なればなり。

抑も反覆練習は時間の短きを憂へず、度数の屢々ならざるを憂ふ。五分、十分、吾人の生活の間隙に於て斯かる零碎の時間も克く之れが利用を忘れずんば至大の効果ある可し。本書は此の利用に供せんが爲めに編纂したるもの也。掌大の一小冊子悉く中學百科の知識を網羅して餘す處なし。樹

下の小憩、野徑の逍遙。常に熱心なる諸子が手より必ず本書の離れざらんことを望む。

凡例

- 一、本書は文部省中學校令に準據せる文部省檢定中等教科書并に大日本國民中學會中學科講義錄中より其梗概を摘みたるものなるを以て該會員の自學に便なるは勿論一般中等教育學習者に對しても亦頗る必須なる寶典たりと信ず。
- 一、叙述簡潔にして半言隻語の冗句を避けたるも凡そ中等教科の全般に亘り悉く其要點を網羅し盡したるものと信ず。
- 一、國語漢文は辭典の形式に據れり就中漢文には特に同訓異字の解釋をも附したり。
- 一、算術代數幾何の三科にありては主として定理法則及び公式のみを記載するに止めたり。

一、要するに本書編纂の形式は一面辭典として又一面表解とし學習者
をして理解記憶に便ならしめんことに努めたり。

編者識

目次

修身

第一編 總論

第二編 日常心得

- 第一章 衛生に關する心得……………一
- 第二章 修學上の心得……………二
- 第三章 朋友に對する心得……………二
- 第四章 起居動作に關する心得……………三
- 第五章 家族に對する心得……………四
- 第六章 國家に對する心得……………五
- 第七章 社會に對する心得……………六
- 第八章 修徳に關する心得……………七

第三編 國家及社會

目次

第四編 道徳

- 第一章 皇位及び皇室……………一〇
 - 第二章 國……………一〇
 - 第三章 家……………三
 - 第四章 社會合同生活……………三
- 第一編 國民道徳……………一四
- 第二章 武士道……………一四
 - 第三章 個人道徳……………一五
 - 第四章 國際道徳……………一六
 - 第五章 倫理學要領……………一七

國語

第一編

一

水村、土筆、自然の音楽、故郷……………一九
 知慧の使用につきて、文盲の者、植物
 問答、微雨、彼岸……………二〇
 江の島、鎌倉、硝子、ピスマルクの幼
 時……………二二
 旅順戦中奇話、霧の都……………二三
 功臣の末路、東京……………二四
 動物の保護、山家……………二五

第二編

獨逸留學中の所感……………二六
 赤道直下の一日、カナダ鐵道、ベルナ
 ルドパリツシー、長篠、唐崎の松……………二七
 婦人のまこと、少年作曲家、含蓄ある
 詞づかひ、修業論、加藤清正……………二八
 船室の記、書籍につきての金言、トラ
 フアルガルノ海戦……………二九

シオルツ、スチアンソン、寧月、殊勝
 なる武者振……………三〇
 國民の理想、多望なる我國の工業界、
 吾家の富、日本海的大海戦……………三一
 山紫水明、沈蘭懷古、石狩の昔話、春
 の巴里、わが幼時……………三二
 高山彦九郎、伊良湖畔、同情、ナイア
 ガラの瀑布の記、徳川光圀……………三三
 著譯、文貞公、わが小園、年中行事、
 螢……………三四
 舟路、國語譯文の變遷、甲冑堂、山嶺
 の題名、伊能忠敬……………三五
 スエズ開鑿始末、騎馬旅行、アレクサ
 ンドル大王、或る人に與ふる書……………三六
 余の十餘年前、登仙法師、岩倉公の逸
 事……………三七

第三編

桃山時代の工業、野路の夕暮、運命、
 相模灘の落日、植物の景觀と氣象の關
 係……………三八
 頼山陽及其の著作……………三九
 笠置山、熊王發心、忠度と俊成、源頼
 朝論、徒然草より、那須與一……………四〇
 金吾秀秋、ベスピオ、文章の妙所、和
 歌……………四一
 大安寺に遊ぶ、舊都の月……………四二
 福原の都……………四三

第四編

丹波少將……………四四
 氣候風、開國の機運……………四五
 豊公征明論、漁村、鉢の木……………四六

日本文典

不二の高嶺、萬里の長城、戦争と文學
 讀書の選擇、國家國體政體及び憲法……………四七
 秋の月夜、水蓼……………四八
 ある山里、海と日本文學……………四九
 雪の朝友のもとに、人のもとより氷を
 おくれるに、桐壺の卷……………五〇

作文

第一章 品詞の種類……………五一
 第二章 品詞相互の關係……………五二
 第三章 文の構造……………五三
 第四章 係り結び……………五四
 第五章 點記法……………五五

第一章 總説……………五六

第二章 作文修養……………六
第三章 作文上の注意……………六

習字

第一章 總說……………三
第二章 執筆法……………三
第三章 運筆法……………七
第四章 永字八法……………六

漢文

第一編

語及び語の位置……………九
國語と漢文との句法の比較、助動詞と副詞との連結、兩性を存する語……………八
反語、附說漢字の構成と轉借……………八

第二編

鶴……………八
牛薰性度、加藤清正、鰐魚、菅公忠愛光、空屋怪物、空中巨人……………三
遺金、服部中佐、太陽、東海道鐵道……………三
蠻民、上杉景勝……………六
沈黙會、虧、塚原卜傳、植物大小、護良親王……………七
蟬丸授祕曲、宮城、海水浴、格言、吾孀國……………七
義猴、東京……………八

第三編

重盛忠孝、記標工……………九
細川藤孝歌學、望瑤琵琶湖、廣瀬中佐傳高徳題櫻樹、湊川之戰……………九

嵐山、自警十條、重矩寛厚、山内一豊妻、記那須野與一事……………九
宇治川先登、下岐蘇川記、乳雀……………九
幼烈女阿富傳、日本刀說、蒙古來、皇國史略序……………九
月瀬記勝、長政直言、士規七則……………九

第三編

保元の亂、沼津十六景記……………五
菊池容齋傳、下筑後河……………六
刀工表忠碑、武田上杉論……………七
送島村某序、林子平畫像記……………九
長嶺子記事、雛鶯說示熟生、貓狗記、述懷、白石新井先生傳……………九
題蘭相如奉壁圖、蘭相如論……………一〇

第四編

送學生之東京、書二松學會生徒寫真圖背、犀川之戰、題不識庵繫機山圖、米田某……………一〇
竹虛記、伯牙絕法、下和泣玉、信陵君救邯鄲、論信陵君、送末廣子儉之歐洲序……………一〇
景春、鴻門之會、吳越之爭……………一〇
孟嘗君、讀孟嘗君傳、張良、赤穂遺臣復讐……………一〇
雜說、烈士喜劍碑、習說、勸學……………一〇

第五編

留侯論、踰碓氷嶺過淺間山記、政宗偵羅馬……………一〇
游鞍馬山記、峨眉山月歌……………一〇
航海朱印船、富川攬勝、國黨論、孔子陪永川、崔使君遊譙南池序……………一〇

日本地理

- 第一章 領土……………二二
- 第二章 海岸……………二三
- 第三章 地勢……………二五
- 第四章 河川及湖沼……………三三
- 第五章 氣候……………三四
- 第六章 植物及動物分布……………三六
- 第七章 人種及人口……………三〇
- 第八章 交通……………三七
- 第九章 産業……………三九
- 第十章 政治外交……………四七
- 附說
- 第一章 滿洲……………四六
- 第二章 關東州……………四九

外國地理

- 第一編 總論……………
- 第二編 亞細亞洲……………
- 第一章 支那……………一五四
- 第二章 露領亞細亞……………一九九
- 第三章 支那及印度……………一六〇
- 第四章 西南亞細亞……………一六三
- 第五章 馬來諸島……………一六四
- 第三編 大洋洲……………
- 第一章 濠洲諸島……………一六五
- 第四編 阿弗利加洲……………
- 第五編 歐羅巴洲……………

- 第一章 露西亞……………一七三
- 第二章 瑞典那威……………一七三
- 第三章 丁抹……………一七三
- 第四章 獨逸……………一七四
- 第五章 和蘭……………一七五
- 第六章 白耳義……………一七五
- 第七章 佛蘭西……………一七六
- 第八章 英吉利……………一七七
- 第九章 西班牙……………一七八
- 第十章 葡萄牙……………一七八
- 第十一章 瑞西……………一七九
- 第十二章 伊太利……………一八〇
- 第十三章 埃地利何牙利……………一八〇
- 第十四章 パルカン諸邦……………一八一
- 第十五章 土耳其……………一八一
- 第十六章 希臘……………一八二

地文學

- 第五編 北亞米利加洲……………
- 第一章 クリーンランド……………一八四
- 第二章 英領北亞米利加……………一八四
- 第三章 亞米利加合衆國……………一八五
- 第四章 墨西哥……………一八六
- 第五章 中央亞米利加……………一八六
- 第六章 西印度……………一八七
- 第六編 南亞米利加洲……………
- 第一章 地球星學……………一九二
- 第二章 地球の現狀……………一九九
- 第三章 氣象學……………二〇五
- 第四章 水圈學……………二〇九
- 第五章 生物地理……………二一一

日本歴史

- 第一章 上古史……………二二三
- 第二章 大化新政及奈良朝……………二二六
- 第三章 平安朝……………二二九
- 第四章 院政時代……………二三三
- 第五章 鎌倉幕府時代……………二三五
- 第六章 建武中興及南北朝……………二三元
- 第七章 室町幕府時代……………二三二
- 第八章 群雄割據時代……………二三三
- 第九章 徳川氏時代……………二三七
- 第十章 明治時代……………二四六
- 第十一章 大正時代……………二五〇

東洋史

- 第一章 上古史(漢人種膨脹時代)……………二五一

西洋史

- 第二章 中古史(漢人種優勢時代)……………二五三
- 第三章 近古史(蒙古人種最盛時代)……………二五三
- 第四章 近世史(歐人東漸時代)……………二七一
- 第一章 古世史……………二五九
- 第二章 中世史……………二六七
- 第三章 近世史……………二九三
- 第四章 最近世史……………二九八

植物學

- 第一章 總說……………二七〇
- 第二章 根……………二七八
- 第三章 葉……………二八八
- 第四章 莖……………二九〇
- 第五章 營養機官の保護……………二九三

動物學

- 第六章 植物の生殖……………二五三
- 第七章 花の保護器官……………二五四
- 第八章 生殖器緊要器官……………二五六
- 第九章 受精及受粉……………二五八
- 第十章 果實及種子……………二五九
- 第十一章 植物分類(上)……………二六一
- 第十二章 植物分類(下)……………二六二
- 第十三章 植物と外界との關係……………二六六

第一編 總論

第二編 脊椎動物

- 第一章 脊椎動物の特性……………二六九
- 第二章 哺乳類……………二七〇
- 第三章 鳥類……………二七三

第三編 節足動物

- 第四章 爬蟲類……………二七四
- 第五章 兩棲類……………二七五
- 第六章 魚類……………二七五
- 第一章 總說……………二七七
- 第二章 昆蟲類……………二七八

第四編 軟體動物

第五編 棘皮動物

第六編 蠕形動物

第七編 腔腸動物

第八編 海綿動物

第九編 原生動物

礦物學

| | |
|-----------|-----|
| 第一編 礦物總論 | |
| 第一章 原始礦物 | 三九三 |
| 第二章 沈溶性礦物 | 三九六 |
| 第三章 有機性礦物 | 四〇〇 |
| 第四章 火山性礦物 | 四〇二 |
| 第五章 金屬礦物 | 四〇三 |
| 第二編 礦物通論 | |
| 第三編 地質一斑 | |
| 第一章 岩石各論 | 四二一 |
| 第四編 結晶 | |

生理衛生學

| | |
|-------------|-----|
| 第一章 總論 | 四一五 |
| 第二章 骨骼 | 四一五 |
| 第三章 筋肉 | 四一七 |
| 第四章 運動 | 四一八 |
| 第五章 食物消化 | 四一九 |
| 第六章 飲食物 | 四二三 |
| 第七章 循環と呼吸 | 四二七 |
| 第八章 呼吸と發聲器官 | 四三三 |
| 第九章 皮膚 | 四三四 |
| 第十章 沁尿 | 四三五 |
| 第十一章 生殖 | 四三五 |
| 第十二章 神經系統 | 四三六 |
| 第十三章 五官感覺 | 四三七 |
| 第十四章 衛生上の注意 | 四三九 |

物理化學

第一編 物理

| | |
|----------|-----|
| 第一章 物性 | 三〇九 |
| 第二章 力 | 三二二 |
| 第三章 磁電氣 | 三三七 |
| 第四章 音 | 三三三 |
| 第五章 光 | 三三三 |
| 第二編 無機化學 | |
| 第一章 元素 | 三三七 |
| 第二章 余屬元素 | 三三五 |
| 第三編 有機化學 | |
| 第一章 有機化學 | 三四〇 |
| 第一章 自在畫法 | 四四一 |

法制經濟

| | |
|-----------|-----|
| 第二章 用器畫法 | 四四五 |
| 第一編 法制 | |
| 第一章 總論 | 四四九 |
| 第二章 公法關係 | 四五〇 |
| 第三章 私法關係 | 四五八 |
| 第二編 經濟 | |
| 第一章 總論 | 四六四 |
| 第二編 平面幾何學 | |
| 第一章 直線 | 四八 |

圖畫

| | | |
|-----|------|---|
| 第二章 | 圓 | 三 |
| 第三章 | 面積 | 五 |
| 第四章 | 比及比例 | 九 |

第三編 立體幾何學

| | | |
|-----|----------|---|
| 第一章 | 平面角、球及角錐 | 三 |
| 第二章 | 球、圓錐及圓錐 | 六 |

代數

| | | |
|-----|-------|---|
| 第一章 | 總論 | 三 |
| 第二章 | 加減乘除 | 三 |
| 第三章 | 因子分解 | 四 |
| 第四章 | 分數 | 七 |
| 第五章 | 方程式 | 六 |
| 第六章 | 冪及根 | 四 |
| 第七章 | 比及比例 | 四 |
| 第八章 | 級數及對數 | 四 |

算術

| | | |
|-----|---------|---|
| 第一章 | 整數及小數 | 一 |
| 第二章 | 四則 | 九 |
| 第三章 | 諸號數 | 二 |
| 第四章 | 整數の性質 | 二 |
| 第五章 | 分數 | 三 |
| 第六章 | 比及比例 | 五 |
| 第七章 | 步合算 | 七 |
| 第八章 | 開平法及開立法 | 九 |
| 第九章 | 求積法 | 三 |

英文法

| | | |
|-----|-----|---|
| 第一章 | 品詞 | 一 |
| 第二章 | 名詞 | 二 |
| 第三章 | 代名詞 | 四 |

| | | |
|------|-----|----|
| 第四章 | 形容詞 | 七 |
| 第五章 | 冠詞 | 九 |
| 第六章 | 動詞 | 一〇 |
| 第七章 | 副詞 | 一六 |
| 第八章 | 前置詞 | 一六 |
| 第九章 | 接續詞 | 一七 |
| 第十章 | 間投詞 | 一七 |
| 第十一章 | 文章 | 一七 |

目次 (終)

中學百科寶典

大日本國民中學會編

修身

第一編

總論(日常心得)

【學生の心得】 ■學問の目的は(一)一個の人間として又國民としい完い者となる基礎を作る(二)生活に向つて職業を得る爲めとなり。

■學生らしき面目を保つには、規律とか、規則とかいふ一種の標準あるを忘るべからず。

■其標準は束縛にあらず眞の自由ある方面に向つて善導する親切なる道なり。○此道は細

修身

くして狭く且つ險阻なるものなり。常に注意して指導者の教へに従ひ決して踏み外しのなき様心掛くべし。

第二編

第一章 衛生に關する心得

【飲食、運動、休養】 ■健康なる精神は健康なる身體に宿る。健康は一切修養の根本なり。

■健康なる身體を得べく先づ第一に注意すべきは飲食也。滋養物をとれ、暴飲暴食を慎め。

■第二運動也。運動は飲食を最も有效ならし

むる法也。適度に不斷に之を爲せ。四休養も亦必要なり、適度なるを要す。

【清潔】清潔は、單に自己の身體衣服に止まらず、一般公共物に對しても之を清潔ならしむるを必要とす。外界の清潔は精神までも清潔ならしむ。清潔は、身體健康維持の爲のみにあらず、間接に精神修養の一方法たり實行せざるべからず。

第二章 修學上の心得

【立志と勉強】事爲さんとするものは先づ志を立てざる可からず。志は勇猛なるを要す。千辛萬苦に逢うて挫折せざるものなるを要す。一旦立てたる志は寸時も弛めざるを要す。即ち勉強を要す。先づ時間を重んぜよ。今日の事を明日に延す勿れ。勉強は習慣なり、堅く此習慣を持して徐るに進め、焦躁す可からず。

相重んずる所以也。朋友は互に温情を以て相抱かざる可からず、彼を我とし我を彼とする親愛の情を以て相慰め相激まし相恕して共に世の道を進まざる可からず。
【約束、責善】約束を重んぜよ、邦人は心に必ずしも不信を思はずして約束を無視する弊風を有す。集會の際の如き規律を嚴守して、時刻を違へざるを要す。果し得ざる可しと思ふ約束は初めより結ばざるをよしとす。各人相互の信用は、社會機關の運轉を敏速にし相互の利益をなす可し。朋友は、互に相注意し相忠告せよ。而して互に注意を容れ忠告に顧みて過を改め善に就け。責善は朋友相互の義務也。伊太利の或地方の小學校にて標準とせらるる學童の十戒を次に掲ぐ。(一)汝の學友を愛せよ、學友は汝の一生の伴侶なれば也。(二)教へられたる事を愛せよ、之れ精神

らず、無理になす可からず。

【自修と制欲】人は自ら修めざる可からず、自發的に自修せざる可からず、自力を恃まずして成功するを得んや。制欲とは欲望を制する事也。衣食住等の欲望は堅く此を制せよ。名譽心競争心等は或る點迄はこれなかる可からずと雖も、夫に溺れて自他を害するに至るを戒めよ。最も惡む可きは怠惰の欲也、第一に之を去れ。

第三章 朋友に關する心得

【信義、禮儀、親愛】朋友の交際は信義を基とする。信はマコト也、義はタシキ也。虚言する勿れ、偽る勿れ、唯正直にして眞摯なれ、最も輕薄と阿諛とを排す。小利を争ひ損益の爲に變ずるは眞の朋友にあらず。親しき仲にも禮儀なかるべからず、禮儀は虚禮に非ず

のパンなれば也。(三)汝は日々善行と有利なる動作にて身を潔くせよ。(四)汝は善人を敬し總て人類に對して侮慢無く而かも何人に對しても屈伏する勿れ。(五)汝は何人をも惡まず而かも自己の權利を尊重し暴慢者に對抗せよ。(六)臆病なる勿れ、弱者の友となり正義に與せよ。(七)一切の財貨は勞働より生るるを忘るる勿れ。働かずしてパンを得るものは天下の賊也。(八)眞理を求めよ、理性に反する事物を迷信する勿れ。(九)祖先の國を愛するは他國を惡み戰を好むものと思ふ勿れ。戰は野蠻の遺物なりと知れ。(十)一切の人類が正義と平和に於て自由の士民として生活すべき時代の來るを祈れよ。

第四章 起居動作に關する

心得

【舉動、容儀】 舉動は精神のあらはれなると同時に舉動は精神を支配す。須く之を沈着にし慎重にし、而して又敏捷にし快活にせよ。

容儀もまた精神を支配す。奢侈ならざる限りに於て衣服を修め、而して容姿をととのへよ。これ、一面に於て他に對する禮儀なり。

【言語、品格、秩序】

言語は眞實より發せざる可からず之を節して濫に發する勿れ。口は禍の門也。明晰にして緩急宜しきを得よ。

動容儀言語に對する用意は、皆品格を高くせんが爲に外ならず。高き品格と云ふは、正しく清き精神の姿に外ならず。其他嗜好などにも注意するを要す。内外の生活狀態に規律あり順序ありて整然たらしむるは秩序也。秩序亂るゝ時は生活狀態亂れ生活狀態亂るゝ時は何事にも成功す可からず。苟くも事をなさんとする者は、秩序を重んぜざる可からず。

邦人は秩序を重んぜざる國民也。戒めざる可からず。

【持久、敏活、快活】

勉強も秩序も之を久しきに持し習慣と爲さざれば其効無からん。持久は習慣を作ると共に習慣は持久の性を作る。

二者相俟つて初めて萬事に成功するを得ん。持久と敏捷と相反すと誤解する勿れ。持久は遲鈍に非ず、敏捷は輕卒にあらず、持久なるもの程よく敏捷なるを得る也。

人は常に快活なる心持を以て仕事に従事し人に接せざる可からず、又たとへ心中に憂ありとも人に接する時には之を抑制するを要す。これ禮儀なれば也。喜怒哀樂に表はさずといふは決して偽にあらず。唯此用意に外ならず。

第五章 家族に對する心得

【父母】 父母は我が本也始也。報本反始は人

の自然の情也。孝は實に自然の情に出づ。

孝は愛と敬と二者相待つて始めて全し。我が國體に於て、忠孝は一致す。忠臣は孝子の門に出づ。四孝は百行の本萬善の基也。人の第一に守る可き道にして第一に爲す可き善也

【兄弟】

兄弟の相敬愛するも亦自然の情に出づ。兄弟の關係は先天的にして家を同じし祖先を同じし血を同じす。異體にして同心也。

兄弟相和する心は、即ち親に孝なるの心也。従つて君に忠なるの心也。我が日本國民は一家族の發達せるものにして、其本に返り始を願れば、皆同一の祖先を有する兄弟也。

【親戚】

親戚は骨肉を以て繋がる。家族外の家族也。相助けて幸福と繁榮とを共有せざる可からず。

而して日本國民は皆互に親戚也親戚相親むの精神は即ち國家的精神也。

れど親戚の情誼にのみ依頼して獨立の精神を失ふ可からず。兄弟親戚は相助く可し、相依頼る可からず。

第六章 國家に對する心得

【皇室】

何事のおはしますかは知らねども忝けなきに涙溢るゝ我國國民の尊皇心は宗教的也。

皇室は國民の宗家也。孝道は祖先崇拜となり祖先崇拜即ち宗家崇拜が此宗教的の尊皇心となれる也。我等は此光榮ある國家に生れたるを謝せざる可からず。而して此有難き皇室を頂き此聖代に生れたるを感謝せざる可からず。

【國憲國法】

國憲即ち憲法は國家統治の大綱也。我國の憲法は、今上天皇陛下が皇祖皇宗の御遺訓に基き、國運を進め我等臣民の幸福を増進せんとの大御心より定め給へるものに

して、其成立は諸外國の夫と全く異なる。國法は種々の法律也。皆社會の秩序を保ち、直接間接に我等の幸福を増進せんが爲に定めらる。之を守るは、實に自己自分の爲なるを思はざる可からず。

【兵役と租税】 憲法第二十條に「日本臣民は法律の定むる所に従ひ兵役の義務を有す」と規定せらる。兵役は國民の義務也。他の國家と對立し競争益々激甚也。兵備を充實せしめずば國家を維持する能はず。戦争は競争の爲の戦争に非ず、平和の爲の戦争也。即ち兵力は平和の保障にてある也。一旦緩急あらば義勇公に奉ず、斯の精神を以て我が金匱無缺の國家を守る可し。兵役は實に光榮ある國民の義務也。四國家の施設の費を辨ず可き納税も亦國民の義務也。昔は税法一定せず或は苛虐の徴收に苦しみしが、今や帝國議會の協

賛によりて定めらる。我等は喜んで此義務を果さざる可からず。

第七章 社會に對する心得

【交際】 人は生來交際的性情を有す。群を離れて獨居るは人の堪ゆる處にあらず。交際を圓滿ならしむるは、互に譲り合ひ助け合ふにあり。我欲を徹さんとするを戒めよ。長幼序あり。長者は經驗に富み、知識に富み、直接間接に我等に裨益するもの少なからず、我等の長者を尊敬し長者に柔順ならざる可からざる所以也。幼者はすべて弱少也、之を愛恤輔導せざる可からず。此序を重んずる事によりて社會は保たると也。

【職業】 人は自ら活きざる可からず。進んで自家の子孫の爲に其計をなさざる可からず。更に進んで社會國家の爲に盡さざる可からず

【而して然するには自家の能力を發揮して大に働かざる可からず。人各々働く可き事あり之を職業と稱す。遊惰は卑し、働くは尊し、人は自家の職業に忠實なると共に之を尊重せざる可からず。

【公德】 公德に消極的公德と積極的公德との二種あり。消極的公德は、他に害を加へざるにあり。積極的公德は、進んで他に益を與ふるにあり。邦人は、公德心に乏しきを定評とす。遺憾といふ可し。公德の程度は直に文明の程度を示す。之を戒めざるべからず。

第八章 修徳に關する心得

【誠實】 「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らむ。」誠は總ゆる美德の根本にして、忠と云ひ孝といふも、誠實の發現に外ならず。成功の基礎は自信と勇氣と也。誠

實ならずば兩つ乍ら得ず、須らく誠實なれよ、自ら欺かざれ、人を欺かざれ。

【恭儉と堪忍】 恭とは心身を平和にして行を鄭重にする事也。儉とは動作を慎み放逸に流れざる事也。恭以て人に接す可く、儉以て自ら持す可し。儉の心を財物に及ぼす、之を儉約と云ふ。儉約して餘財を蓄へ他日に備へよ。恒産なき者は恒心なし。己に克つは堪忍也。而して人を忍ぶも堪忍なり。己に對しても人に對しても堪忍が最も大切也。

【改過と自重】 過失は有り勝のもの也。之を隠す勿れ。之を改むるに憚る勿れ。決して二度なす勿れ。自ら悔む時は人亦悔む。能く自己の價値と能力とを信じて、威儀を備へ尊嚴を保持せよ。されど自重は傲慢の事にあらす。

【勇氣と智慮】 智者は惑はず、仁者は憂へず、

勇者は懼れず。何事を行ふにも勇氣を要す。勇氣は氣力によつて養はる。氣力は體力より生ず。されど眞の勇氣は誠實より出づ。俯仰天地に耻ぢずして自ら勇氣あり。勇氣は自ら發するもの也。之を装ふは偽勇のみ。偽勇は寧ろ耻づ可き也。智慮は知識に非ず、知識を運用する處のもの也。智慮は知識と共に之を養ふを要す。

【慎獨】 獨を慎む、之を慎獨と云ふ。人に耻ぢずして自ら耻づる。自ら耻づる、これ品性修養の第一義也。

【興味】 大學に「心ここにあらずれば見れども見えず聞けども聞こえず」とあるは是れ興味をそこに向けざれば知識とならずと警めたる句である。「すきこそ物の上手なれ。」

【健康、鍛錬】 人間の身體は弾力性を有するものなり過度の働きに對して一時は疲勞を感

ずも、度々練習すれば遂に疲勞を感じざるに至る。依て身體の諸機關を鍛錬して活動の範圍を大にするを要す。寒暑に堪える度も亦鍛錬によつて抵抗を強くする事を得。

【心身の關係、精神】 心身は親密なる關係あるを以て精神の緊張によつて身體の健康を維持する事を得。精神の作用は知力、感情、意志の三つに分つ。知力は知識を收め理窟を吟味する作用也。感情は快、不快を感じる力也。意志は思ふたる事を決行する力也。

【獨立獨行】 二宮尊徳翁が「自分の鎌を研げ」自分の運命は自力に依つて開拓せよとの言は獨立獨行を奨めたる事也。教育の効果も亦大に然り學校にて教師より學ぶよりも自學自習の方却つて成功の人物を産む事多きは之が爲なり。獨立に似て非なるものを孤立といふ。孤立は社會より捨てられたる事なり。

【時節を待て】 急げば廻れ、靜に急げば血氣の青年時代を誡めたる金言也。果報は寢て待て」と混同すべからず。一は餘力を貯へ徐ろに時機の到るを待てとの云ひにして、他は自暴自棄の意味を含む。

【善惡の分岐】 善といひ惡といふは全く別に遠く距るの如くなるも其實相接近せるもの也。善惡の分岐點は恰も阪路を昇ると降るとの如し其間一步あるのみ。善惡の判断は常に良心の指圖と、先輩の意見とを聞き定むべし。

【娛樂】 人間の精力は限あり精神の休養に娛樂の必要の起る所以也。精神的の娛樂は高尚にして修養に資する者を撰べ。事物に耽り爲に本務を怠り、又法規に觸るゝが如きことあるべからず。貝原益軒の言に「文を學び行を力めて餘力あらば則ち逍遙遊觀せよ」と。

【讀書と修養】 聖人と交り賢人と語るを得るは讀書の賜也。讀書の利益を收めんには先づ收め得べき資格を備ふるを要す。この資格は則ち文字の知識なり。(一)讀書は單に娛樂の具にあらず各自修養の資に充て以て品性の向上を計るべし。

【不撓不屈】 獨立獨行と不撓不屈との精神は鐵の如き堅き意志發表の別名也。堅固なる意志と不撓なる忍耐とは他に成功の樂園に達するの門也。

【同情】 人の幸福を喜び人の不幸を憂ふは自然の人情にして則ち同情心といふ。慈善、博愛、親切等の徳はこの同情より發するもの也。

【風俗習慣】 風俗習慣は外部の形成的のものなる自然に人心を感化し思想感情の統一を計ること渺からず。風俗習慣悉く道德的の

ものにあらす明治天皇御即位の御誓文に「舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ」と仰せられたり。

【崇禎敬神】 我が國體の世界無比なるは我國に勝れたる風俗習慣あるが爲め也。祖先を崇び神を敬するが如きは其中の著しきもの也。曾子が「終ヲ慎ミ遠ヲ追ヘバ民ノ徳厚キニ歸ス」といへるは寔に祖先を尊敬しその恩に報あるの美德といふべし。

第二編

第一章 皇位及び皇室

【皇位】 憲法第一條に「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とあり、萬世一系と稱し得る國は日本を措いて他になし。我國は皇統連綿として今日に至り皇位の尊嚴は一度

も傷いたる事なし「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」とは憲法第三條に規定せらる。【皇室】 我國の皇室は吾人の大本家である。大和民族の此國土を拓き種族を平げ爾來國運の發展に盡したるは宗家に盡したるものと子孫である。我國は國家と皇室とが一つであることを忘るべからず。

第二章 國

【國家の成立】 國家の成立には一定の土地と一定の民族と及び主權が必要である。國家には君主、臣民、政府、議院等の機關があり。その機關の關係から政體が定まるもの也。主權の君主にあるものを君主政體。人民にある者を民主政體。統治の運用が全く主權者の意志のみに出づる場合は專制政體。憲法に依て定められたる規定によつての場合には之を立

憲政體といふ。我國の如きは立憲君主政體也。

【國體】 政體は政治の形式によつて定まるものなるが國民生活の有様則ち民族の團體組織の特性を國體といふ。國家成立の三要素より國體の美點を念ぜよ。

【臣民】 臣民の國家を構成する分子也。臣民の義務は教育勅語に「學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ知能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ」以て國家に貢獻する所なかるべからず「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己ヲ持シ」以て日常修身の道に反かざる心掛けをなし「進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼」し奉らざるべからず。

【憲法】 君臣、政府、議院等の諸機關の關係を定め且つ其活動の範圍を明にするは憲法也。憲法は明治二十二年二月十一日發布せ

られたるものにして七章七十六條より成る。

【法令】 法令とは法律命令の總稱也。共に國家と臣民との關係及び臣民相互の關係等を規定する者也。法律は必ず帝國議會の協賛を経るを要す。法令に違反するものは必ず制裁あり。臣民は此法令に服従するの義務あり。

【自治體】 國家の基礎は多數の市町村の自治團體より成る。我國の自治制は明治二十一年に發布せられ翌二十二年より實施せられたる也。市町村の公民は議員を選擧し市町村長候補者及助役を選擧す。自治體の仕事は行政事務の外産業、財政、教育の進歩發達を計るの義務あり。

【一等國】 我國は明治三十七八年日露戰捷の結果、世界の一等國の班に列せり。世界の一等國は英、露、獨、佛、奧、伊の六國と北米合衆國に我國を加へて世界で八ヶ國なり。

第三章 家

【家、家族、家庭】 家は父母を同じうせる者が父母の慈愛の保護の下に相依り相成したる血族團體なり、家族は血族關係の下に起居寢食を共にし苦樂を共にするもの也。家庭は和氣霽々たる一家の團樂である。

【祖先】 祖先を敬愛し祖先に事ふる道は之を一言にいへば祖先の恩徳を感謝して其祭祀に務め且つ祖先の遺業を成就し以て家名を顯はすべきものである。之れ子孫たるものゝ當然の義務なれば也。

【親子】 家庭の中特に血族關係の直接なるものは親子也。親を養ふを以て得たりといふも心を喜ばしむるの道缺くれば孝といひ難し。孝の要は愛敬を以て従ひ其心を喜ばしむるに如くものなし。

【夫婦】 家庭の中心は主夫と主婦也。然して家門に對し祖先に對し家族に對し最も重大なる責任を持つるものも亦此の二人也。

【兄弟姉妹】 民家分量記に「兄弟は同親同體にて共に親より分けられたる體とは誰も知りたる事なり。我身を輕んじて少しにても傷くる事は、親の體を傷くるも同前にて兄弟を疎にするは我體を疎にする也。」と。

【親族】 一家の中に成育したるもの、分れて別に一家を立てたる場合又は一家の中に育つものゝ養子婚姻によつて他の家の人となりし場合には茲に親族關係を生ず。

【奴婢】 奴婢は他人なるも同一の家に起臥し同一の家に業務をとるものなるを以て又親密に愛撫し扶助するを要す、又親愛の情もその勤務の今月に伴ふて自然に加はるべきものなるを忘るべからず。

【教育】 父母は其子を教育すべき義務あり。普通教育は學校のみに行はるゝものなりと思へるは大に誤りなり。社會の感化影響も教育といふ文字を廣き意味に使用すれば之等總體を人間の眞の教育といふを得べし。

第四章 社會合同生活

【社會】 人間は各々自分の長處に従つて各々異つたる業務をとり互に利益を交換し相扶け相救ふことによつて生存を營むことを得るものなり之が則ち社會である。社會の範圍は小にしては一村、一自治體、一組合より大にしては人類全體を指すことを得るもの也。

【合同の精神】 社會合同生活を維持し發達せむるに必須なるものは公共的精神なり、公共的精神にして缺けたらんにはその社會は決して進歩するものにあらず。

【公務】 吾人は國家、及び團體に對して當然盡すべき任務あり之れを公務といふ。公務の種類は兵役、租税、選舉及び官吏官吏等になるべきものを主なるものとす。

【所屬團體】 吾人は公務に盡すが如く又自分の所屬團體例へば學校組合會、俱樂部の如きに對しても同様の任務を帶ぶもの也。各自の所屬團體は同じ目的の爲めに團結し相互に進歩を計るべきものなれば也。

【公益】 個人は自己の能力に應じて學術技藝を修得し品性を鍛鍊し以て平生能力を發揮して社會に貢獻するは社會進歩の爲めになすべき本務也、それと同時に一層廣く自ら率先して社會を導く事換言すれば公衆の利益を進め社會有益の事業を興し更に社會全體の知識の程度生活の状態等の進歩に盡さざるべからず

【秩序】 社會の秩序を維持するは合同生活の

必要條件也。之れによつて人々は安全にその生活を營むことを得る也。

【社交】 社交の秘訣は信實、正義、親愛也。

【博愛】 同情心に基き他人の不幸を救ひ幸福を進めるを普通博愛と稱せらる。博愛の心は單に人類のみに限らず、動物に對しても常に慈悲の心愛憐の情を起してみだりに殺害虐待せざるをいふもの也。

第四編 道德

第一章 國民道德

(總説) 道德の根本は世界を通じて同一なるを普通とす然れども土地、境遇の如何によつて其國民に特有たる道德あり、之を國民道德といふ。

【祖先崇拜】 我國に於ける祖先崇拜を大別す

ると第一、家族に於ける祖先崇拜。第二、鄉村に於ける祖先崇拜。第三、國家に於ける祖先崇拜の三つである。

【家族制度】 戸主によつて家族を統率するを家族制度といふ。祖先崇拜と相離るべからざるものは家族制度也。家族制度行はれざれば祖先崇拜の美風も亦行はるゝ者にあらず。

【忠孝一本】 皇室は我國民の一大宗家にして天皇は其家長なり故に祖先及び父母に孝道を盡すはつまり天皇と國家とに忠なる所以にして又皇室に對して忠勤を勵むは總て吾々祖先と父母とに對して孝なる所以となる也是れ忠孝一本と稱する所以也。吉田松陰が「君臣一體、忠孝一致、唯吾國爲然」といへるは忠孝一本の特有なる國民道德を稱へたもの也。

第二章 武士道

【武士道の發達】 武士の間に發達したる一種の道德之を武士道と云ふ。其發達の時期を

第一期 神武天皇より鎌倉時代迄

第二期 鎌倉時代より徳川時代の初迄

第三期 徳川三百年の間

第四期 明治維新以後

【古今武士道の異同】 武士道の根本は忠君愛國に外ならず。其精神は終始一貫して渝らざるもその形式は時勢によつて變遷あり。徳川時代にあつては武士道は各藩の士が各主君に對して忠節を勵むものなりしも明治大正の軍隊組織に就ては天皇に對し又國家に對して忠節を爲すこととなれり。

【武士道の長處及短處】 禮儀廉恥を尙び節義質素を守り義勇を重んずるが如きは長所なり。武士道偏重の結果は自然文學美術を輕んじ經濟の念に乏しかりしは短所と言ふべし

【武士道と將來の道德】 武士道の長所は實に吾々の學ぶべきものなるを以て今後我國に於て大に道德を進めんには大に武士道の眞髓を鼓吹せざるべからず。

第三章 個人道德

【人格】 人格は人間の人間たる資格をいふものにして一切の道德は人格の發達なり假令ひ身體健全にして巨萬の富あり且つ深遠なる學識ありとするも人格の下劣なるものは實に取るに足らざる人也。

【自重と名譽】 自分の眞價を認め自分の能力を確信して外物の爲に意志を枉げず克く自己の品位を保つを自重といふ。自己の眞價を他人に認められたる場合に名譽を生ず。

【財産】 衣食足りテ禮節ヲ知ル「恒産ナキモノハ恒心ナシ」とは古人の金言也。實際一

定の財産なくして常に衣食に迫はるれば種々の不徳誘惑其隙に乗ずるもの也故に財産は本務を完うする基礎といふて可なり。

【權利義務】 人間には種々の欲望あり、その欲望を放任せば遂に衝突起る故に其の欲望を制限するの必要あり國家が法律を制定して各人の欲望の範圍を定め、互に相侵害するを防ぐを以て社會の秩序を維持し平和を保つを得るものなり、權利義務は茲に初めて起るもの也。權利の種類の主なるものは次の如し。

- 第一、生存の權利（身體生命の權）
- 第二、自由の權利（言論行動の權）
- 第三、所有の權利（財産の權）
- 第四、名譽保全の權利

第四章 國際道德

【帝國の地位】 國際關係を理解するに先ち我

國の世界に於ける地位を了解するを要す。従つて國際に要する道即ち諸外國に對して及び其國民に對して行ふべき道が明瞭するなり。

【國際關係】 國家は他の國家に對して其獨立と權利とを重んじ和親を厚うせざるを得ず。従つて一國の臣民は他の國家に對し又其臣民に對して同様の責任本務を生ずるものなり。
【國際法、國際裁判】 決せざる場合には茲に於て開戦により干戈を以て決するの外なし戰爭の起る所以也。

【外國人に對する信義】 國と國との關係につき大切なるものは通商貿易である、商工業に従事するものは廣く世界の市場に注意し信義を重んじ國利を増進すべし。

【外國人に對する禮義交際】 外人に對する禮義交際は甚だ深き注意を要す何となれば若し其當を失せりとせば單に個人の人格を傷ける

のみならず國民一般の品位を傷けることとなり遂には國際の關係にも影響を及ぼすを以てなり。

【人類に對する責務】 人類は親疎、内外、貴賤、貧富を論ぜず廣く人類全體に對し盡すべき責任本務あり之を人道と稱す。

第五章 倫理學要領

【總論】 道德とは善をつとめ惡をさくる事である、然して何が善で何が惡であるかを教ふる學問を倫理學といふ。倫理學には

倫理學
理論的方面 理論的倫理學 理論
實踐的方面 實踐的倫理學 實際

【行爲】 倫理學上の行爲は自ら知つて之を行ふのみならず意志の作用の加はる動作たらざるべからず。換言すれば意識的で且つ有意的

たるを要す。

【動機】 動機とは意志を動かして決意せしむる所のものをいふ。故に吾人をして活動せしむる機會を與へるものなり。即ち動機は意志作用の原因にして従つて又行爲の原因なり。

【品性】 意志作用をして一定の傾向を有せしむるもの即ち品性也。品性は天性遺傳によるものもあるも多くは同一行爲を繰返へすことにより習慣となり習慣が固まり遂に品性を形作るものなり。品性は斯く行爲習慣の集積したるものなるを以て常に品性修養のために

は始めより留意せざるべからず。高潔なる品性、善良なる性格は實に重要なるものなるを以てこれにより誘惑と罪惡とに打勝ち成功を收むることを得るものなり。

【責任】 責任とは文字の示す如く責に任ずる即ち始末を全くすることなり、社會に之の責

任あるが爲め社會の秩序が維持せらるゝ也。
 吾々が行爲をなすに於て思慮選擇し決心してこれをなしたるも其結果の惡しき場合に於てはたとへ其動機は善なりとも責任は必ず負はざるべからず、即ち手段の選擇を誤つたるが爲め也。昔の武士はこの責任の念の強きこゝに於て甚だ秀でたるもの也彼等は申し譯けの爲めに切腹して罪を謝したる例少からず。

【良心】 生れた時に得たる天性と、生れた後に得たる經驗とが積み重なつて善惡の判断を吾人に起させるものを良心といひ。道徳心といふ又道徳的意識などといふも此良心と心得て大差なし。良心にも知情意の三作用其の中に含まるゝものなり。古は良心は特別の作用なりと稱へたる學者ありしも良心も天性と經驗とが吾人の心に蓄積せられ三作用に含まるゝ也。

【理想】 物の長短を計るに尺度を用ひると同じく行爲の善惡を判断するの尺度即ち標準は道徳的理想である。良心は裁判官の如く理想は法律にして行爲は被告人の如し。理想とは吾々が現在の不完全なる状態に満足せずして將來に完全なる状態に達せんとする希望をいふ。理想道徳に適したる想像にして空想にあらず。

【意志の修養】 品性の修養も人格修養も皆意志修養を俟たざれば何の用をも爲さず今意志修養に必要な條件を左に、
 第一、克己……誘惑に打ち勝つ
 第二、進取……向上前進
 第三、精力……體力鍛錬
 第四、冷靜……周圍の事情に心を奪はれず
 第五、正道……正しき目的を以て進む
 (終)

國語

第一編

【水村】 舟—小舟也。大船は船と云ふ。うつくしく—うつくしむに轉ずれば愛する意となり、更にいつくしむと轉ず。若蘆—若き蘆。一寸ばかり—ばかりは程也、のみといふ意に非ず。幾戸—幾は數を定めざる也、數戸といふが如し。戸は戸也。木は株を以て數ふるが如く、家は戸を以て數ふる也。

【土筆】 郊外—野外也。野邊といふに同じ水筆めきて—めくとほらしく也。水筆らしく—おちこち—遠近也。擡ぐる—持て上ぐるの約也。

【自然の音楽】 自然—天然の意、人爲に對して云ふ。名詞也。自ら然りといふ意味の副詞也。

として用ふる場合あり。人爲—人の爲せる也。萬物—多くの物、すべての物、萬は形容して云ふ也。調—調子。百鳥—多くの鳥、百は萬物の萬の如く、必らず百と限れるに非ず、形容していふ也。梢—木末也。木の幹に對して末になる處を云ふ。ひぐらし—蝸と書く蟲の名。こほろぎ—蟬と書く、古名きりぎりす。樂—音樂也。動詞として樂むと訓ずる場合に樂となる。奏—奏す—本義はつかまつる也、かなづると訓ず。かきならすの約。喩ふ可からむ—喩ふ可くあらむ也。どうどう—水の激しく流れ落つる様を形容して滔々といふ。夫を濁音にして調子を強めたる也。

【故郷】 故郷—ふるさと、生れたる土地也。われひと—自他。東西の別—單に方角を指すのみにあらず、東洋と西洋とを指す。東洋人と西洋人との別。國許—望郷—故郷を望

み戀しく思ふ事^①嘗て一前かた^②一孤島一孤
 はみなしご也、一つ離れて便無き鳥^③斃れ一
 死にたふると也。倒は逆様になる事^④暴威一
 有情の人間に云ふ可き語、轉じて非情の者に
 いふ擬人法也^⑤遂に一とうくの意、竟はつ
 まりといふ意、卒は果てはといふ意、畢はこ
 とごとく、終はしまひにといふ意を含む。混
 同せざるを要す^⑥まことに一本當に也、感嘆
 の意を含む^⑦樂土一樂しき土地^⑧物の數にも
 あらず一數ふるにも足らぬ也、何でも無き也
 國口を極めて一言葉を盡して、口で言へるだ
 け。

【智慧の使用につきて】^①金言一言葉の中での
 黄金といふ意、尊び重んずべき言葉也^②物に
 觸れ一物事が起つて來た其時々^③生涯一涯
 は海のはて、山のはてなどの意、生涯は人の壽
 命のはて也、即ち生きてゐる間といふ意也^④

【彼岸】^①彼岸の中日一彼岸は春分又は秋分と
 云ひ春秋二季にあり、春の彼岸の中日は大抵
 三月二十一日にして春季皇靈祭之れ也。秋の
 彼岸の中日は大抵九月二十四日にして秋季皇
 靈祭之れ也。晝夜等分の日、家々祖先の靈を祭
 るを例とす^②近在一近き田舎といふ意^③寺詣
 一まうではまゐでの音便^④織るが如し一前後
 左右に行きつ戻りつする様を云ふ。

【江の島鎌倉】^①渚一浪の打よする濱邊^②物の
 具一軍道具^③双の手一兩方の手^④物思なし一
 物思は心配也^⑤かゝる一斯くあるの約まりた
 る也^⑥更に一其上に^⑦一寸の地一一寸は形容
 詞、少しの土地といふ意^⑧しのばる一思ひ
 出さる^⑨何ならぬ古寺一何ならぬは、何で
 もない、名も無い、見る影も無いといふ程の
 意^⑩雪と碎け霧と散る一雪の如く碎け霧の如
 く散る^⑪うちかけ一うちは意味なし、語氣を

動もすれば一どうかすると^①一切一何事も^②
 高くみづから構へ一威張るといふ意^③藏めて
 一藏にしまひこんで置く様にする^④かひがひ
 しく一甲斐あるらしく^⑤事を辨ず一辨ずはわ
 きまへる也、即ち用を足す事也。

【文盲の者】^①文盲一あきめくらといふ意^②異
 見一見る所を異にする也、其異にせる考へを
 人の爲に説き聞かす也^③愚昧一愚はわるか、
 味は闇き也。愚かにして心闇く物の道理のわ
 からぬを云ふ^④訓みて一漢語を國語に釋きて
 讀む事也。

【植物問答】^①玉をなす一玉のやうになりて也、
 玉なすをば玉なすものを也^②唯いかにせん一
 どうしようぞ、どうもしやうは無いといふ意、
 反語也。

【微雨】^①微雨一微は小也、小雨と同じ^②ほの
 かに一微也、少しといふ意。

強むるのみ^①せまり來ぬ一傍に寄つて來た。
 【硝子】^①開關一兩字共にひらく^②古領一占は
 しむる、領はうけとる^③價格一ねだん^④廉一
 安値^⑤需用一需はもとむる也。入用といふに
 同じ^⑥煮立つ一立つは別に意味なく、語氣を
 増す爲に用ひられたる也。燒き立つ、追立つ
 などの如き同じたぐぬ也^⑦模型一かた^⑧訛一
 音便其他の關係より發音の仕方が或る一地方
 に限り一般と異なるを云ふ。

【ピスマルクの幼時】^①言行一言は言葉、行は
 おこなひ^②往々一どうかすると^③常軌を脱し
 一常軌は常道の如く、人の常に踏み行く可き
 道也。脱しは踏み外す也^④常人一常の人、あ
 たりまへの人^⑤天稟一稟は受くる也、天より
 受けたる才^⑥辛酸一辛はからき、酸はすき、色
 色の苦勞を云ふ^⑦管め一辛酸に對して云ふ、
 經驗ある事^⑧耽り一深入り也、身をも心をも

うちこむ事也。壯年—三十歳以上を云ふ。壯なる年。風雲の變—風起り雲起る、世の中の騒ぎを天氣模様かたがたの穩ただかならぬに譬へて云ふ也。優長—優よしく氣長きき、即ち餘裕よゆうのある也。朝餐—餐いは食也。卓前—卓たはテーブル。應ずる—しりこみする也。相顧みて—眼を見合せて。首領—人體じんたいにつきて云へば首、衣服いふくにつきて云へば領、他を從へて率ひきあるの意、即ち大將しやう株也。さるを—然るに。儕輩—いづれもともがらと訓む、友達也。殘燈—消えかゝりたる燈火。緋ひいて—開いて。連夜—毎夜。得々—得意なる貌。其の居—その居るところ。鬪夜—鬪たたかむ狀。鬪たたかむを忘る—寝る事も食ふ事も忘る。鬪裁たたか決けつ流りゅうる—が如く—裁さき決けつする即ち取りさめる事、水の流るゝが如く滯とどまらざる也。奇策—策さくははかりごと。鬪節たたかを屈たげし—節せつが其節を屈たげめて竹たけとなりて伸のびぶるを待つ如き也。鬪鑑たたか

みる—鏡かがみにかけて見る也、自分の行いと他の行いとを照あり合あせて比較ひかくして見る也。鬪辭たたかをあらためて—言葉ことばを丁寧ていねいにして稱揚しょうやう—賞しょうめたゞへる。鬪閣たたか下—位階いはいある人に對する敬稱けいしょう。鬪讚言たたか—賞しょうむる言葉。【旅順戰中奇話】—夜襲—襲せうはおそふ也、不意ふい討うち也。堡壘—とりで、敵てきを防まぐ爲の壁の如きもの也。負傷—傷きずはきず、負おは負おふ即ち受くる也。美稱—美うつくしき稱なづ唯々—ハイ—と命いのち令めい通つうりにする也。交叉—組み合す。便宜—便たり宜いき也。匍匐—地に伏して這はふ事。分明—はつきり。奇遇—不思議のめぐり合あひ。厚遇—厚あつくもてなす。復命—命めいを復かす也、命令めいれいさされてなした事件じけんにつき申まし上げる。【霧の都】—さながら—それ乍またら也、丁度ちやうどといふ意。おぼろ—明あきかならぬを云ふ。徐行—しづかに行く。欄干—手すり。之これに加ふるに—

其上に—事ことを執とる—事ことは仕事、仕事しごとをするといふ程の意。腹はらを捧たふ—激げきしく笑わらふ時は腹はらの上に擧あぐ、故ゆゑに腹はらを捧たふといふ也。【功臣の末路】—豪傑—兩字共にすぐれると訓ず。たゞ事—普通の事。必かならずずや—やは別に意味いみなし語氣ごきを強つよむる爲に用もちひらる。鬪兵—つはものともみ、劍戟けんげき等をいふ。轉てんじて兵士へいしの意となる。鹿兒島りくじやうなる—鹿兒島りくじやうにあるの約やくまれる也。たゞならぬを知り—尋常じんじやうならぬを知り。くれつかた—暮方也。たゞ—其時思おもひがけなく、漢字かんじにて偶などかく。歸省—郷里きやうりに歸かへり、父母ふぼを省かへる也。たゞ—訊問しんもんする事、此この外ほかに調しらべる、又は正ただしくする等の別様べつやうの意い有あす。問者—まはしもの。あてたり—充あてたり也。あてがふ事。重圍—幾重いくじゆうものか。こみ。援兵—たすけの兵。死屍—屍しかばねはかばれと訓ず、死骸しかばねに同じ。鬪すべきやう—爲なす可べき方法はうほう。鬪な

みなみの人々—普た々な即ち普通ふつぽうの人々。鬪夜のまぎれ—夜の暗くらきにまぎれてといふを名詞めいしとせる也。鬪死たたかを極きよくめて—必死ひつしの力ちからを出だして。松の下露まつと消きえぬ—松まつの下露したろの如く消きえたりといふ意。【東京】—霸府—幕府。民草—民たみの大君おほきみの惠めぐみの露つゆにうるほひてつぎ—に殖ふえくるを草くさに喩たとへて云へる也。あをひとぐ草くさとも云ふ。鬪繁さかりに繁さかり—繁さかるが上に繁さかる也。同じ言葉ことばを二つ重かさねるは其意そのいを強つよめんが爲也。鬪かたちづくり—格好かっこうができたといふ意。鬪なべて—總すべべて、おしなべてといふに同じ。鬪もの寂さびしき—ものは發語はつご、別に意味いみなし。面目めんめくを革くわめぬ—様子を更かへたるを云ふ。面目めんめくは人ひとにたとへて云へる也。鬪偏陬—片かたすみ。寧なろ—いつそ。追おはんとする傾かたむき—まれをしようとする傾かたむき。鬪變遷—かはりうつる。鬪靜閑—二字共にしづかと訓

【閑静とも云ふ】熱鬧—閑はさわがしき也、繁劇と同意。靈廟—たまや靈擁す—抱へるといふ程の意。絶佳—絶は比較を絶つ也、非常に佳き事。詞春時—春のころ。四時—春夏秋冬。山門—寺院の樓門をいふ。朱門—朱塗りの門。幽趣—奥深き趣。風帆—風を孕める帆。胸襟を潤うす—胸を広くさせる也、即ち爽快なるせい—とした氣持にさせる也。丹碧—丹は赤き也、碧は青き也。雲聚—雲の如くあつまる。勝境—景色の勝れたる地。

【動物の保護】—たよりよき—便宜き也、都合のよい事。いはれ—謂と書く、理由といふ程の意。終歳—一年中といふ意。終生、終日、終夜等此例。榎息—棲はすむ、息はいこふ也。【山家】—垣根の川—垣根の傍を流るる川といふ意也。軒端の山—軒端に近く見える山といふ意。浮べる雲—富は浮べる雲の如しといふ

意を含む。圓求めぬ富—自然に受くる富。青のひげ—青く生えたる鬚にたとへたる也。花のまゆ—美しく開けるを顔と見て、眉と云ひたる也。花笑ふなどいふと同じく、擬人法の一也。山ふかく—浮世を遠く離れたる意を含む。水あはし—心に何の執著もなき意を含む。

第二編

【獨逸留學中の所感】—威武—威勢。偶然のこ—にあらす—理由無くして起つた事では無い。かた—まへかた。實況—實際の有様。尙武—武を尙ぶ。遺訓—遺した訓。嘉肴—佳肴と同じ、よい肴。知名—有名と同じ。延き入—通すこと。さばかり—それ程。醜藏の肉—鹽漬けにしてしまつて置いた肉。完備—完く備る、不足のないこと。諒す—承知する。絶いへづと—みやげ絶無—絶へて無き事、絶

倫絶世の如し—かばかり—かくばかりの略。徹底—底に徹る、深く徹る事。

【赤道直下の一日】—水天相交はる—水と天とがくつついてある。入日の山—日の入る山をいふ。名狀—其ありさまを言ひ表はす事。ゆらめきて—揺らめきて、揺れて也。大海原—大海の事。眼を遮るなく—眼にさはるものが無い。中空—空の中ほど。四顧—前後左右を顧る。重疊—かさなりたまる。黒すみ—黒き色を帯びる。横さま—横の方。沛然—大雨の降り来る状、ざあツといふが如し。潑刺—勢よく飛びはれること。餘光—残る光り。黒そめて—黒くなり初める。

【カナダ鐵道】—ようせずば—氣をつけなければ。うちうめく—唸る。月盤の差—月と盤との差、似てゐて實は非常にちがつてゐる事。いふ—宏大—ひろく大なる事。とどまかうさま

—種々の方向又は方法。夕食す—夕食を喰べる事。たなはる—漢語の重疊と同じ意也。

【ベルナルド、パリツシ—】—名工—名人のこと。あはれにも—殊勝にも。さらぬだに—それだけでなくさへ。毫も—少しも。錢財—錢と家財と。下地—もと。端然—正しく崩れざる狀。辛うじて—ヤツと。何ながな—がなは願望の意、何か無いかなといふ意。それいかにぞや—まあどうであらうぞといふ意、感歎の意を含む。才覺—くめんといふ意。詬罵—そしり罵る事。うち語りひて—うちは意を強むる意、語りひては語り合ひての略。蓬髮—蓬の如く亂れたる髮。いかにありけむ—どんなであつたらうと想像の意。

【長篠】—敗北—北はにげる也。小迫合—小さい戦。ゆきしくも—いみじくもといふ意也。あた—可憐と書く、惜む可き事也。

【唐崎の松】 未明—未だ明けぬ也。いづればあれど—どちらともいえずといふ意。洛陽—京都のこと。洛陽は漢唐の都也、夫にたとへて云ふ也。同日の論にあらず—日を同ふじうして論ずる事ができぬ。げにも—成る程といふ意。

【婦人のまこと】 いとほしき—痛はしきといふ心。論言—王の言をいふ。

【小年作曲家】 貧民窟—貧民の多く集つて居る處。窟は巖屋である、暗い汚ない感じが貧民の住家と思はせる。まめやかに—親切にといふ意、又忠實ともいふ。ひたすら—心を傾けるといふ意。味はで—食へないで。枕頭—まくらもと。外面—おもて。小歌—短かい歌。黙禮—黙つてお辭儀する事。ある—或る。刺を通ずる—面會を求むべく名刺を出す事。いとほしくて—かあいさうでの意。反映—せりてりかへすこと。寂として—しんとし

て。家路—家のある方の路。さだかならず—はつきりとしなないこと。夢中—夢中のこと。

【合著ある詞づかひ】 名相—名高い宰相。駐劄—とどまりたる事。外國使臣—いふ。造營—普請の事。うちつけに—いきなり。わきて—特に。望まされ—さうありたいと願ふこと。げにも—思ひ—成る程、尤もだと思つて。

【修業論】 卓近—てびかなこと。士大夫—學問あり身分のある人。常を失ふことなく—なみはげれることなく。餘業—本業の餘暇にやること。則ち副業のこと。效驗—きとめ又しるし。

【加藤清正】 某—自分の事をいふ、私などに同じ。うたてさよ—おろかさよなどの意。侍—ありますかの意。則ち敬語。上意—御意見。陪いて—はんべつてなる。持重—大事を取る事。機務—政務などに同じ。浪華—大阪。

謁見—御目見え。拔擢—ひきあげること。陪從—從者共。急遽—にはか。承け引かず—承知しないこと。なむ—だらうとの想像の意。

【船室の記】 閱覽—しらべ見ること。トランプ—西洋のカルタ。ホーイ—給仕。いふばかりなし—いひやうがないほどであるの意。たごふる—充すこと。逆り出で—飛び走り出ること。宜ならずや—さもあるべきことだといふ意。

【書籍につきての金言】 フーラル—トーマス、フーラル。英國の著作家。クラツプ—ジョージ、クラツプ。英國の詩人。クラレンドン—英國の政事家。シセロ—羅馬の哲學者。コールト—英國の著作家。僻地—片田舎、へんびなる土地。障碍—さまたげ。伴—相手。慰藉—なぐさめること。餘念—こゝでは書物に向ふ心の外の心といふ意。

フーラル、クラツプ、クラレンドン、シセロ、コールト、五氏の金言中何れに一番心が惹かれたであらう、その惹かれたるの金言に聯想して一文を綴つて見るも大に興味があるであらうと思ふ。文章の研究にもなることを忘れてはならぬ。

【トラファルガルの海戦】 屏息—恐れて息をふさぐ。畢生—一生也。虚に乗ず—虚はスキ也。スキにつけこむといふ意。尾して—後について。喜色面に溢れ—喜びの色(表情)が顔に出る也。排布—排はならぶ、布はしく。塗炭の苦—民の非常なる苦み也、泥塗を踏み炭火に落つるといふ語に出づ。是認—よしとして認むる。偉功—偉は大也。大なる手柄。こもごも—交々と書く、かはるる也。犠牲—いけにえ。眉宇—人の額のこと、字は家の軒也。眉の面に於ける軒の家に於けるが如きより

云ふ【一齊一齊はひとしとよむ。一時に揃うてなり。齋と混す可からず、齋はととのふといふ意也】左舷一舷はふなばた也【好丈夫一快男子と云ふが如し】巨礮一礮は砲に同じ【算を亂して斃る一ばら／＼になりてたふれ死す】沮喪一沮ははぐむ、喪はうしなふ也【殘喘一喘は息苦しくあへぐ也、息の残れるを云ふ】耳朶一みゝたば【氣息奄々一氣息は呼吸、奄々は絶えんとする狀】限す一目を閉ぢる、即ち死ぬる。

【ツオルジ、スチアソソ】いかにもして一どうかして【はかなき一とりとめもなき也、かりそめといふ意】名譽を擔ふ一擔ふは物を肩にかつぐ意、名譽を得といふ程の意【眼に一丁字無し一一字も讀めぬ無學といふ意、一丁字は一箇字と同じ】期月一滿一月也、期年ならば滿一年【勞銀一勞役に酬るる賃金】宿願一かれたの望【技術一腕前】注せらる一稱せらると同じ【王公をも駕せんとす一王は一國の君主、公は貴族中の最高位、駕すは凌ぐといふ意】貴賓一賓はまらうど、即ち客也。

【寧月】搖動一ゆれうごく【籟々一竹や木やなぎの葉の相觸れて發する聲也】玉屑一玉の屑【狹霧一狭は發語、意味無し】耳をそばだつ一そばだつは歛と書く、傍によする也【暗費一費はこほろぎ、暗は夜の意、夜に鳴くこほろぎ也】展齒一展は高下駄、その齒也【しるく一著く也】さやか一分明也【いや一いよいよ也】濶浩々一ひろ／＼せる意。

【殊勝なる武者振】殊勝一すぐれたる意、けなげなる意、神妙奇特の意【武者振一武者の姿、轉じて武者の振舞を云ふ】嫡子一家督を相続する子即ち長男【歴々一歴は明かなる意也、世に知らるゝを云ふ】饜膳一饜は御馳走也。

その膳【候一昔用ひられた話語、謙りたる語也】敵とおぼしく一おぼしくは覺しく也。敵であるらしく【さあらば一然らば、即ちしかあらば也】わりなく一隔てなく【入魂一殊に親しき交際】脇差一刀の小なるもの、大小の小の事也【浮きたること一確實ならぬ事】鎧の威一威は緘と書く、鎧の札の綴りを云ふ【引きけり一昔武家時代に饗宴の後に馬を引出して人に贈る慣例あり、馬のみにあらず、此贈りものを凡て引出物と云へり。引出物を贈るといふ意也。

【國民の理想】うち續く一うちは別に意味無し、續くといふ語に力を添ふる也【自主一自らを主とし、自らに頼る也】沈重一おちつきて重々しき事【快易一たのしむ】窘迫一困り苦む也。

【多望なる我國の工業界】生産一生計のたづ

きとなるべき産業【微々一微は少き也、かすか也、衰へ果てゝ振はざる也】いかで一どうして【遜色一遜はゆづる也、負けてしりぞく也、負け色也】一に一全く、専ら等の如し【嶄新一斬りたての花の如く新しき也】層し一よしと思ひ氣の進む事【謬見一謬れるかんがへ】通觀一見渡す【斯業一斯の業。

【吾家の富】蝶兒蟬子一小さく愛らしきより、兒又は子を添へたる也【紅雨霏々一紅雨は落花をたとへたる也、霏々は雨の降る貌】旱月一旱月は舊曆五月、五月雨の降る處の闇夜也【宜一もつともといふ意】碧梧一青桐也【亭々一直立する貌】半夜一夜半と同じ【流石一二様の意味あり、さうは思ふものといふ意と、それ程の者丈あつていかにもといふ意。】【日本の大海戰】踊躍一をどり上る也【展望一望み得らるゝ限り望む也】須臾一わづか

の間**四**變針—航路を變ずる也、針は羅針也**四**千載の一遇—千載は千年也、一遇は一度遇ふ也、千年の中に一度有るか無きかといふ也**四**肉薄—皮肉に薄るといふ意**四**黎明—黎は黒き也即ち暗き也、暗きと明かなるとの間、夜のあけんとして未だあけざる頃をいふ、味爽と同じ。**四**波々—促急の意**四**奇績—不思議な事實**四**祖國—父祖の國**四**麾下—麾はさしまれくと訓ず、旗の一種にして大將軍の指揮に用ひ、又本營に樹てく目標とせり、部下といふ意也。**【山紫水明】**—山紫水明—紫は山の色、明は水の色、風景の秀でて溫和愛すべきを云ふ**四**たぐひなき—類無き**四**姥—祖母より轉じたる也、老ひたる女**四**茶烟—茶を煮る烟**四**かごよふ—輝くの音便也**四**とこしなへ—永久也**四**玉と碎け—玉の如く碎け也**四**蘭—眞盛也**四**鐘樓—かれつき堂也。

【沈蘭懷古】—いよ—いよ—詰まりたる也**四**鷓鴣—斑鳩に似たる小鳥、寂しき故址などの點景物として漢詩には多く出づ。**【石狩の昔話】**—なごか—どうしてといふ意、反語也**四**いへらく—曰くの音をのばしたる也**四**幣物—進物也**四**要處—肝腎の處**四**屯集—屯はたむろる也、あつまり居る事**四**見參—面會といふ程の意**四**色代—會釋也、正しくは式退とある可し、人を先にし我を後にするの儀也**四**辭令—挨拶振也。**【春の巴里】**—まめ立たず—眞面目ならぬ事**四**人の願を解く—人のあごを外す、即ち甚く笑はする也**四**目もあや—目もちらつくばかりに**四**めでたき—愛でたき也、愛す可きを云ふ。普通用ひらるる目出度しとは稍其意を異にす。**【わが幼時】**—草紙—書き物の事**四**往來物—書簡文の手本也、庭訓往來商賣往來などあり**四**

その義—義は意義也、わけ也**四**奇特—感心な**四**どいふ意**四**頑なる—頑固**四**學匠—學者**四**いづくしみ—慈愛**四**淨寫—淨はきよき也、清に同じ**四**清書の意**四**太刀打—擊劍也**四**わぬし—おぬしといふに同じ、お手前とかそなたとかいふ意、同輩以下に用ふ**四**ことわり—道理**四**心にも染めず—身にしまぬ也**四**早かり—早くあるの意早いといふに同じ**四**刀脇差—劍の大きいのを刀といひ、小さいのを脇差といふ。**【高山彦九郎】**—總髮—月代を剃らず。全髮を生やして後頭部に束ね結べる髮也**四**寫本—版本に對して云ふ。肉筆にて寫せる書物の事**四**相識—知り合ひ**四**四節季—十二月の末**四**内侍所—八咫鏡を安置し奉れる所**四**有司—役人**四**仔細—事情**四**便無きこと—たより無き事。**【伊良湖畔】**—中つ世—中世也、つはのと同じ意味にて古用ひられし接續詞也、天つ風、國つ

神等の如し**四**霖めき—騒ぎ立つ**四**潜き入る—もぐり込む**四**水手—水夫、即ち舟乗也**四**息吐く可き處—溜息を吐く様な處、困る處。**【同情】**—三層樓—三階の家、樓は高き家を云ふ**四**ところすきまで—所狭き迄也**四**ことごとしく—大業に、大事らしく**四**骨董—古器物のめづらしきもの**四**輸贏—輸はいたすと訓じ、贏はかつと訓ず、輸は出だす、贏は得る、輸贏は勝負といふに同じ**四**細民—貧民の淋漓—滴り進む貌**四**棄捐—金錢物品等を施與する事**四**おもとち—面持也、顔付**四**いひもあへず—云ひ終らぬうちに。**【ナイアガラ瀑布の記】**—人口に膾炙す—何人の口の端にもかたりて知らぬものゝ無きないふ。膾はなます、炙はあぶり肉、以て比喻とせる也**四**虹霓—虹も霓もにじの事也。**【徳川光圀】**—嗣—世つぎ**四**史記—前漢の學者

司馬遷の作れる歴史【殉死】殉はしたがふ、死にしたがふ也、即ち一所に死ぬる也【天聽】に達す一天皇のお聴きに達す【清朝の粟】粟はアハに非ず玄米の事也【壽藏】生前にこしらへ置く墓の事【宸筆】天皇直々の御筆御筆蹟の事【讚】他人の徳を書きしるせる文 銘一其物の徳を書きしるす文、讚と同じく漢文中の一體也。

【著譯】由來一由つて來る處也【おほかり】多くありの約まりなる也【無垢】けがれなき也即ち純粹也【徹頭徹尾】頭から尻尾まで【詮議】しらべる事。

【文貞公】袞龍の御衣一天子の御禮服也、赤地に日月星辰の象を繡にせる御服也【隈無き】光を蔽ふもの無き也、分明なるをいふ【花洛】洛は都、支那の周が洛陽に都せしより云ふ、花は美稱也【忠績】忠義を盡せし功績、

一人先づ發聲するを云ふ【追儼】鬼やらひの【日節分】立春の前後。

【螢】景物一景は風景、物は風物、其折々のながめを云ふ【飛びかひ】とび交ひ也【すだく】集る也、轉じて蟲などの集り鳴く事となる【有】姓は横井、徳川時代有名の俳人【五虛】名一其實を伴はぬ名。

【舟路】海にして一にしては、に於て也【うつろひ】映りの音の延びたるもの【みどりなす】緑色をなす【わだつみ】海神の名より、轉じて海を云ふ。わだの原とも云ふ【泊】船の碇泊する處。

【國語漢文の變遷】風土記一元明天皇の和銅六年諸國に詔し、其國々の山川風俗産物及び傳説等を記録して上らしめし書也【公文】公の文書也【命運】運命と同じ、めぐり合せ也【朝野蔽塞】朝は朝廷に使ふる役人、野は

績はあとといふ意【謚】死後におくる名也。

【わが小園】ゆたかに一豊也、窮屈ならぬを云ふ【物めかす】めかすは、めく、めき等とも活用す。らしくといふ意、物めかすは、其物らしくする也【さびまきりて】寂増さりて也【三逕就荒】陶淵明の「歸去來辭」の「三逕就荒松菊猶存」より出づ、三逕は三つの小みち、就荒は荒果つる也【詩料】詩の材料【十歩の地】狭き地といふが如し【芳葩】葩は花と同じ、芳は美稱也【夕影】暮色、即ち暮方の日影也。【年中行事】奴婢一召使ひの男女【素袍】直垂に似たる衣服【扮装】つくりの事【踏歌】昔正月に禁中に行はれたる御式、童男童女が年始の賀詞を云ひ乍ら足拍子取りて舞ふ踊也【上巳の節】三月の始めの巳の日【中元】正月十五日の上元、十月十五日の下元に對して、七月十五日を中元とす【音頭】多人數歌ふ時

民間、蔽塞はおほひふさがるにて、相通ぜざる也【經緯】經は布の縦糸にして緯は横糸也【女文字】中古漢文の隆盛なりし頃、國文は女子のものと思ひ下され、假名文字は女文字と呼ばれし也【氣運】時のまはりあはせ也【信備】難澁一信備はゴツ／＼せる也、難澁は六かしく判り難き也。

【甲冑堂】甲冑一甲はよろひ也、冑はかぶと也甲冑とあやまる勿れ【大破】大破損【さばかり】それ程【四佛】佛を學びて一佛は様子、學ぶはまれる也【香華】香と華と也【賽物】賽錢などの事也。

【山嶺の題名】絶嶺一嶺は山の頂上也。絶は此上なき也、即ち最頂上を云ふ【守疆】疆は堺、堺を守る也【落落】／＼／＼した貌【軒】軒一上下也【商賈】商人也【謂無し】道理が無い。

【伊能忠敬】鼻祖—始祖と同じ後學—後進の學生也家道—家のくらしむき也拮据—

はたらく事五題勉—二字共につとめるといふ意星霜—年月といふに同じ第一著手—著

手は手を著くる也第一は最もはじめ也、一ははじめと訓ず長汀曲浦—汀はみぎは、浦はうら、長と曲とは形容也、海岸を云ふ當事者—事に當る者也濫焉—俄かにの意。

【スエズ開鑿始末】開鑿—鑿は名詞となればのみ、動詞となればうがつ也稀有—稀有に有る也阻絶—阻ははごむ、絶は絶つ猜忌—

猜はそれむ、忌は忌む猜忌—勸誘する也寄附金也端緒—いとぐち誣罔—誣は誣ふる也、罔は根無し事也、造り事をして悪しく云ひ成す也流言—いひふらし。

【騎馬旅行】ひかへて—控へてと書く、引き止めて也けむりは迷ふ—けむりは煙霧の

のしり也腰の物—脇差四浪々—彼方此方さまよふ也神明—神姻親—縁つゞき一郷の良—一郷中のすぐれもの也。

【余の十餘年前】夏服—二領—領はえり也。魚は尾を以て數ふるが如く、衣服は領を以て數ふる也參差—相交はれる貌さかしく—賢く圓ねびまさりて—ねびは大人び也曾遊—曾て遊ぶ、即ち前かた遊びたる事。

【登仙法師】五穀—米麥粟黍豆をいふ食ひおほせつれば—おほせは仕遂げ也、食べ果てたればの意仙人—山に住み老ひず死なす神通力を有すと想像さるる人也食ひのきで—食ひ除きて也、絶食をいふげにも—實にも成程の意いで—さア也哀を浮べ—強く心に感ずる也あさましく—呆るるばかりなどの意やうあらむ—仔細のある事だらうえず—得爲す即ち爲得ず也ゆしく—立派

意、霧の立ち迷へるを云ふうそぶけば—嘯く、仰むきて覺えず聲を發する也四ほこらひて—誇りての延びたる也、はかりてか、はからひてとなれるが如し。

【アレクサンドル大王の逸事】逸事—世に知られ居らざる事實弱冠—元服して初めて冠をつくる年頃也掌大の地—掌の大き程の地、掌大は狭小の地を形容す心まめなる—まめは忠實也病革れる—危篤に迫れる也藥劑—劑も亦くすりといふ事よしなき疑—よしなきは理由無き也立證—證據立つる也軍のあとのごと—ごとは、如く也殊死—必死になる事きはみ—きはまり也胃の鉢—胃の頭を掩へる部分也瀕死—死にかゝる瀕暗涙—人知れぬ涙。

【或る人に與ふる書】御意を得—御話を伺つたといふ事、徳川時代の普通語也有識—も

に、事々しくなどの意とかくいふばかりなく、て—どうにも云ひやうが無くて也。

【岩倉公の逸事】月日の小車—月日の絶つを小車の廻るに喩へし也故右府—故は既に亡き人に冠する語、右府は右大臣に—儘に富嶽のやすき—富嶽の如く安きに也、嶽富は富士山御おぼえ—御信任際を生ず—仲たがひする也有職—古式に明るき學者の家五盤根錯節—わだかまりたる根、まじりあへる節、入り組みたる事といふ意也蟹居—蟹は穴に籠る冬蟲也、謹慎してゐるを云ふ從容—おちつきて迫らざるを云ふ攝關—攝政關白國洪圖—洪は大、圖ははかりごと旬日—旬は十日也禁闈—宮中の鴨居達文—御布令女房の請謁—女房は女官也、請謁は口入し奉る也國是—世間一般の認めて是とする國の方針姦雄—わる智惠のある英雄

長袖の人―公卿を云ふ、長き袖をつけて居る故也。蕭牆の内―蕭牆は何れも垣也。家の内、轉じて國の内意に用ひらる。自若―平氣也。長きあたり―御上の事。隱きはぬ―隱さぬ。

第四編

【桃山時代の工業】 貔貅―猛獸の義、昔野蠻なる時代戰爭に猛獸を使用せし事ありしより、轉じて兵士の稱となる。長押―鴨居の上に横に渡せる材也。そのかみ―過ぎし昔也。四意匠―かんがへをめぐらしたる事。調度―道具。趣致―おもむき、すがた。風尙―尙はよしとする處也。

【野路の夕暮】 酒代―酒錢。潤利―もうけ。頑然―堅く取つて動かざる事。四摩札―すれきし。套語―きまり文句、套は舊套の套。ふためき―あはつる様也。

まへ也。特徴―徴はしるし、特性を示すしるし也。四配合―とりあはせ。花曇―花の咲く頃は空の曇るを常とす、これを花曇といふ也。玉水―玉を散らすが如く滴る水。驟雨―にはか雨。見るから―見たばかりで。九蕭條―さびしき意。ほの見ゆ―ほのかに見ゆ。清楚―清くさつぱりとせる也。いひしらぬ―云ひ様の無き。松籟―松の聲、風が松を吹きて自然に聲をなす也。あはれ―おもしろみなどいふ意、憐とか哀とかの意にのみとる可からず。をかしき―面白い、趣のあるといふ意、可笑しとは全く意味を異にす。雲の峰―夏の炎天に峰の如く聳えたる雲を云ふ。中秋の満月―舊曆八月十五日の月。暗香浮動―暗香はそことも知れぬ香、浮動はうかび動く也。

【頼山陽及びその著作】 蓋世―一世を蓋ひつくす勇氣。風動―勢ひである。黄金時代―盛

【運命】 左右する―自由にする也。暗々裡―見えす開えざる裡。既往―既に往ける也。りより―折々。うまい―熟睡の寓目―目を附くる事。麟々―車聲。容與―容は安き狀、與は然などと等しき助詞。邂逅―めぐりあひ思ひ入りて―思ひ込んで。忽焉―たちまち、焉は助詞。駒々然―いびきの聲を形容す。粗野―粗末にして卑しげなる事。汚點―しみ也。臟物―盗み隠せる品物。首―あひくち。胸に擬す―胸に當つる也。半殘の夢―半ば残れる夢。股々―音の響き來る狀。こや―よびかくる言葉、コラといふが如し。

【相模灘の落日】 風―風の靜に收まりたるを云ふ。赫焉―かどやくさま。臨終―終に臨む、即ち死に際也。

【植物の景觀と氣象との關係】 景觀―景は景色、觀はながめ也。特性―特に有せる性、もちんではなやかな時代。張本―基礎をなすもの。近松―近松門左衛門をいふ。竹田―竹田出雲像をいふ。權度―度合ひのこと。北馬南船―彼方此方に旅行すること。禮貌を外にして―王侯に對して自ら屈すること。なかつた意。政記―日本政記をいふ。翳々―長くひびくこと。迂疎空濶―説く所たしかでなく迂濶なこと。小品―短篇のこと。曲雅―重々しく上品なこと。今様―今風といふこと。でなく今様歌といつて歌の一體である。馳驟縱横―想ひを縱横自在に走りせること、ぢつと觀ておられない程變化の甚しい場合にいふ。造詣―到り達する意。潛心―心をひそめること、ぢつと物を考へる場合をいふ。新機軸―新しき方法。江木鰐水―山陽に就いて専ら儒教を學んだ人。實迹―證據立てられる事實。意匠慘澹―かんがへをめぐらすことが慘ましい程深い。

といふ意吐屬越成、章何でもない一言一句も立派に章を成してなるといふ意常套あり来りの事をいふ調敷行しきのばすこと

【笠置山】 卿相雲客 卿相は公卿雲客は殿上人のことである 歩跳はだしで歩くこと

【熊王發心】 はかられるに謀にかゝること 具してつれて七めぐり七回忌のこと 四はたらかせれば手を動かさせないこと 五形をかへ出家の姿になること 行ひて佛道を修行すること

【忠度と俊成】 事の體その事の様 世にそれて一世を憚ること 千載果後白河院の院宣をうけて俊成の撰し奉つたものですぐれ

作りといふ意、氣を揉んで心配すること 女を愛づる一女を愛するの意 地體いつたいた御瑕瑾一キズさがしく利口に或はすぐれての意 かちんの直垂 かちんは裾とかく藍を染めて黒くした色 北政所一關白の妻の事 虚焼 いづこからともなく香らせること 妻手一馬手に同じ右の方である

【金吾秀秋】 金吾一漢の官名、わが衛門府の官に相當す、金吾秀秋は猶黃門光圀といふが如し 宗徒の大名一重立ちたる諸侯 引き具し一引き連れ 御感なくめならず一なくめは魚の目より出で斜也、斜ならずは可加減ならぬを云ふ、即ち非常に也 事の體、事のありさま 不覺一しくじりといふ程の意 しゃくび一その首也 八そやつ一かのやつ即ち彼奴と同じ 七尼前一尼御前の略、敬稱也 八にも一兎に角と同じ

た歌がのせてある。 【源頼朝論】 伺候一御機嫌を伺ふこと 釐穀の下一京のこと天子の御車のことから京の意に轉用せり 凶惡の日一ごくわるい日のこと 四起請文一誓書である誓ひにそむく様のことがあつたら神佛の罰を請ひ奉るといふのである

【徒然草より】 徒然草は兼好法師の隨筆を集めたる名文である すさび一なぐさみ 居たるあたり一居まはりのこと 四調度一切の道具をいふ

【那須與一】 柳の五重一五枚の衣の重ね方を表を白くし裏を青くした衣である別に櫻重梅重の類がある 女房一女官 舳頭一ヘサキと讀む 四雜司一雜事の用を足す召し使ひである 五古形一ウラカタと讀む、事の出来る出来なを占ふためにする 肝膽を作りし肝を繪に

【ベスピオ】 まがはせたり一紛らはせたり也 夢幻界一ゆめまぼろしの世界 微茫一かすかにぼんやりといふ意 四目睫一睫はまつげ也 五草寮一草葺の小家、寮は小窓といふ義なり、轉じて小家の意となる 六錯落一まじること 核心一中心 殷紅一眞赤 陷穿一落し穴 斷文一文はあや也

【文章の妙所】 上乘一上等 文を道ふ可き人 共に文章の話が出来る人といふ意 説破一破はつけ加へて其詞を全うする語也 喝破一擊破の如し、笑殺忙殺の殺も此類也 四會得一佛語、承知する、或はさとの意 晦澁一晦は月の無き三十日といふより、くらく判りにくき事に轉用せられたる也 澁はしふる也、はつきりせぬといふ意也 了々一ありくといふ意 七呼號一言ひたつ也 八三味一耳も口も目も盡く其の働きを絶つ如く、一事にのみ心を専ら

にする也。素然一みだる事、纏らぬ事也。氣やはらぎ一表情がたやかになる。

【和歌】わがせこわが夫也、せこは兄とか友とかいふ意味にして、男と男との間にも交換されし言葉なりしが、後、妻の夫を呼ぶ事のみ用ひらるゝに至れる也。かきなす一掻き鳴らす也。

【大安寺に遊ぶ】つ頃は即ち先の頃。方丈一住職。一寺の住職は四方一丈の室に居るといふより出づ。ふりはへことさら。驚かす一訪れたるをいふ。さ思ひてよ一さう思ひ給へ。しつらひたる一こしらへたる。あるじす一響應する也。さるは一然るは、即ちそれは。宿縁一古くよりの深い縁。おどろくしき一仰山などいふ意。圓居一圓かに居る也、車座也。かへさま一かさまといふに同じ。おのもく一各々。

くりなく一思ひがけなく。日頃經す一幾日も經たぬうちに。大かたの一普通一般の。一韻とか趣とかいふ意也。様かはりて一様子がかはりて。魂入れて一精神をこめて也。

【舊都の月】ましまし一第一のましは、居るの敬語、第二のましは動詞に添うて敬意を表はす語也。しのび一慕ふ意也。しのぶには、此外に隠ると、耐へる等の意あり。迫門一瀬戸とも書く、海峽也。鳥の臥床一荒野を云ふ。なほ荒野を鶉の床など云へり。蓬の袖一蓬が生ひしげりて袖の如くなりたる地也。袖は森林の山也。淺茅が原一茅が疎に生ひたる原。隨身一劍を帯び弓矢を執りて貴人に付き従ふ。供の者をいふ。上皇には十四人、攝政關白は十人、大臣大將は八人、以下官位に従つて一定す。惣門一屋敷の外構の正門。蓬生一蓬は荒れ地に生ふる草也、蓬生は草深き地を云ふ。

つれづれ一さびしき、退屈さ。御格子上げさせ一格子に今の戸の如き用をなすもの也、此を明くるには、上にあけて釣るし置く也。締める事を下すといふ。夢かや現か一現は現實也、正氣也。夜もすがら一終夜。有明の月一陰曆十六日以後の月、漢語にて殘月といふ。小夜一小は發語、夜といふに同じ。いとど一いとくの約まりたる也。今様一平安朝の中頃より鎌倉時代にかけて盛に流行せし歌の一種。歌ひすま一歌ひ終る。

【福原の都】水無月一七月をいふ。と思ひの外一甚だ案外。おほかた一多分。ことなる故。別條。公卿一大臣に對して公卿といふは大納言中納言又は參議の官に在る者、或は官は無くとも三位以上の位の者を云ふ。公卿の二字を以て大臣より參議迄の總てを含め稱する時は、攝關及び太政大臣左右内三大臣を公と

云ひ、其以下を卿と。軒を争ふ一軒をならべて繁昌を競ふ。世に餘されて一世の中に餘計者にされて也。條里一條は幅廣き道路、里は狭き道路。なかく一却て。有りとしある一有りとするに同じ、しは語調を強むる爲に用ひらる。衣冠布衣一衣冠は公卿の正服、布衣は六位以下の正服。直垂一武士の服装。てぶり一様子風俗。部び一田舎染みたる事。瑞相一瑞はめでたき也。されど一般に前兆といふ意味にも用ひらる。かしこき一恐多き又は勿體無きの意。尙かたじけなき、有難きの意、又は才智すぐれて利巧なる意にも用ひらる。比ぶる也。

第五編

【丹波少將】筆のすさび一漫筆やうのもの、折にふれ事につけて何となく書きつくる也。手

蹟—手のあと、筆蹟といふに同じ。下向—帝都より他に行く事をいふ。三尊來迎—人臨終の時念佛を唱ふれば、阿彌陀如來觀音菩薩勢至菩薩の三尊來り迎へて極樂に導くといふ也。九品往生—極樂往生の等階也、生前の信心の如何に依つて上中下の三品、其品毎の上中下の三品、九種の淨土に導かるるといふ也。欣木淨土—淨土は佛教の理想の天國也。淨土を希ひ求むるを云ふ。たのもしげに—頼みがひあるものゝ様に。かひがひしく—詮あるらしく。かきくどく—かきはくどくを強めたる語、くどくは口説く。生を隔てたる—現世と後世とかけはなれたるを云ふ。築地—築土とも書く、土塀の事。欄門—すかし模様のある門。部—格子戸の上をおほふ簾の子様のもの。遺戸—上下の溝にはめて左右に開け閉てする戸。中の六日—十六日。一向所感—佛經の

語也。善惡の業によつてそれ相應の報を感じ得るといふ意。墨染の袖—法衣也、法衣は黒く染むるを以て斯く云ふ。

【氣候風】—同一轍—轍は車のわだち也。同一の轍を行く、即ち行爲を同じくする意。轉訛—うつりなまる也。延いて—それよりつゞきて也。沛然—雨の勢よく降る貌。恩雨—めぐみの雨。霖霖—長雨也。霖は十日以上、霖は三日以上の雨をいふ。稻禾—穀類を總稱す。涵養—やしなひたくはふる事。挿秧—苗を植ゑつくるを云ふ。土用—一年の中、陰曆の三、六、九、十二の四ヶ月に於て各々其十三日より十八日迄を土用と稱す。普通夏にのみ云ふ。漫然—わけも無く、みだりに。立言—言ひ立つる事。解體遊惰—解體は身體のしまりが無くなる、遊惰はあそびなまける。蒸煩—熱苦しき事。非劣—非は薄に同じ。寬濶—二字

共にひろき也。金風—秋風也、春を木、夏を火、秋を金、冬を水、中央を土に配せる五行家の説に基く。偏狹—ものにかたより、心の狭き事。考究—考へ究むる事。

【開國の機運】—宇内—世界。小康—少しく康くなりたる也、小太平。長足の進歩—著しき進歩、足は歩に對して云ふ也。訂約—訂は結ぶ也、約は條約。駸々—進み行く貌。

【豊公征明論】—活機—活けるはたらき。利鈍の數—數は情勢といふ程の意。覆滅—全滅。蹂躪—ふみにじる。水軍—海軍、船に據り水上に戦ふ軍。有土—有は有す、土は土地、土地を有する也、有徳なども此例。乳臭の輩—弱輩、乳の臭の失せぬ年少の義也。猛省—つよく省る。

【漁村】—風もたまらぬ—風もとまらぬの意。手がらみ—腕ぐみ。まぼり—まもり也、見ま

もるの意。罵倒の意とのみとる可からず、聲高く云ひ駈ぐをすべてのとするといふ也。おのががじし—各々自分自分。あまのさへずり—あまは漁人、さへずりは言葉の訛れるを鳥の囀りに擬する也。漢語に南蠻、舌などあると同じ。眞砂—眞は別に意味無し、砂の事。さら—幸也、獲物の意。くどつ—藁にて袋の如く編めるもの。のぞくべう—のぞく可くも也。影—透きて見ゆる影。○あらは—露也、あらはれ見ゆる也。つゆ—すこしもといふ意。なりはひ—生計。

【鉢の木】—一所不住—一つ所に住まぬ。即ち身を雲水に任して諸國行脚する也。沙門—法師。修業—行を修する也。遠近人—里人といふ程の意。笑止—や—さて—困つた事だといふ程の意。普通には人を卑下するに用ふ。又氣の毒といふ意にも用ひらる。わたり—其邊一帶

を云ふ^い。わたり候ふぞ^い。おいでなされまする
 かといふ意^い。申さうする^い。申さんとする^い。五と
 もかくもにて候ふ^い。御隨意になさりませ^い。世
 にある人^い。一世に時めく人^い。鶴^い。鶴^い。鶴の細毛に
 て織れる衣^い。袖せばき^い。せばきは狭き也^い。細
 布衣^い。陸奥のけふの寒さ^い。細布衣は陸奥の名
 産^い。けふは狭布の里と云へる陸奥の地名と今
 日との兩つにかけたることば^い。さん候ふ^い。そ
 れは若くは其譯はといふ意^い。左様でいいます
 といふに同じ^い。曲もなや^い。面白くもない、不
 平の意を含む^い。あるまじい^い。あるまじき^い。詞よ
 しなき人^い。頼みにならぬ人^い。価値偶^い。偶ふ也^い。
 前世の戒行^い。前の生に於ける行也^い。佛家の輪
 廻説より出づ^い。後の世の便^い。後の世は後生也^い。
 後生安樂の便也^い。亦輪廻説より出づ^い。なうな
 う^い。呼び掛くる詞^い。此世ならぬ契^い。此世なら
 ぬ即ち前世也^い。前世の因縁をいふ。

【不二の高嶺】^い。雲漢^い。天の河也^い。五朶^い。五片
 平且^い。一夜明け也^い。且は日のさし出づるを云
 ふ^い。東道^い。道案内^い。躋涉^い。躋は山を登る。涉
 は溪をわたる^い。朔風^い。北風^い。困夢^い。苦しき夢
 徂徠^い。徂はゆく。徂はきたる^い。狼雨^い。烈しき
 雨^い。輕^い。手綱^い。斷霞^い。切れ断たれた霞^い。一路
 一すぢ路^い。一字^い。一つの堂^い。矮樹^い。矮き樹
 の委婉^い。うれり曲る^い。行膝^い。脛膝^い。迢々^い。は
 るかなる貌^い。卻りて^い。却つてと同じ^い。爛砂^い。
 焼けたごれたる砂。
 【萬里の長城】^い。萬世の業^い。萬世衰ふる事なき
 業^い。歌臺の響^い。歌臺は歌を唄ふ爲に作られし
 處^い。旌旗^い。旗指物^い。暗君^い。暗愚なる天子^い。倭
 豎^い。表に媚び裏に惡計を弄する小人也^い。一炬
 一片の火^い。焦土^い。焼け土^い。復道^い。空中に渡
 せる廊^い。衰蘭^い。衰へ凋みたる蘭^い。遺宮^い。遺さ

れたる宮殿^い。さはれ^い。遮莫と書く、さもあら
 ばあれの約まりたる也^い。それはさうだが^い。斬
 蛇のつるぎ^い。斬蛇は漢朝の重寶とせる名劍の
 名^い。炎精の光^い。炎精は同じく寶玉の名。
 【戦争と文學】^い。靜相的活動^い。靜かな相にて活
 動する也^い。象^い。あらはれたるかたちをいふ。
 無形のかたちにも用ひらる^い。因縁^い。佛語、形
 無く相無き中^い。事柄を發生せしむるを因と云
 ひ、物に附隨して事柄を成らしむるを縁とい
 ふ^い。因果報^い。佛語、因縁に對し、事柄の成就せ
 るに云ふ^い。因果^い。因縁と果報とを約めて云ふ
 白日夢^い。白日は晝、晝の夢即ち妄想^い。澹語
 一たはけたこと、馬鹿々々しい事^い。得喪^い。喪
 は失ふ也、得失に同じ^い。柄鑿^い。くひちがふ意
 一朝^い。一旦と同じ、ひとたびといふ意^い。天
 馬螫する^い。天馬は翼ありて空を行く馬、詩想
 感興を恣にするの形容として用ひらる、天

馬のかくるは、詩想の衰へを意味す^い。客觀
 一他を主として觀る、主觀といふ語に對す^い。
 繡腸^い。美しき心持といふ意、錦心といふも同
 じ^い。杼情歌^い。情を杼ぶる歌の揣摩^い。當て推量
 といふ程の意。
 【讀者の選擇】^い。さらぬ群書^い。さらぬはそれ程で
 も無い、即ち下らないといふ意^い。煥發^い。煥は
 火の光也、明かに發するを云ふ^い。神餒^い。え^い。精
 神衰へ^い。類然^い。グツタリとせる狀^い。審美^い。審
 はつまびらか也、美を審かにする也^い。庶幾^い。く
 は一物を希求する意、ちかといふ心持も加
 はれり^い。親炙^い。親み近づく^い。啓發^い。二字共に
 ひらくの^い。急務^い。さし迫れる務^い。第一流^い。
 第一等^い。淘汰^い。選びすてる^い。散佚^い。散つてな
 くなる^い。敷演^い。おしひろげる^い。推敲^い。文章詩
 歌の詞句を練る也。唐に賈島といへる詩人あ
 り、鳥宿河邊樹、僧敲月下門の句を得たる際、

敦字を推字にせんかに迷ひて苦吟せるより云ふ時弊—當時の弊害。

【國家國體政體および憲法】 御酒御饌—神前に供へる御酒と御食物—空論—根柢の無き議論—ふさはしき—相應する—いなみもやらで—いなむは否む、辭退の意ともなる。やらでは爲ないで—自主自宰—自ら主となつて統べる—掌握—にぎる—大綱—大ごりの事—元首—元も首もはじめ也、一番のかしらを云ふ。【秋の月夜】 あやしの竹の編戸—あやしは賤しげなるといふ意—さだか—明か—狩衣—もとの狩の時にのみ用ひしが後身分ある人の平服となれり—濃き指貫—濃きは濃紫を云ふ。指貫は袴の裾に締り緒のあるもの、直衣狩衣を著たる時に著く—ゆゑづきたるさま—仔細あるらしき様子—そぼちつ—濡れ乍ら—えならず—何ともいはれず—知らまほしく—知り度

く—扇—車の轆を支たせて置く臺—御佛事—御法事—空だきもの—そのことも知れず焚きしめたる香—追風用意—風の來て衣の裾を吹き亂すを用意する—かごとがましく—かこつけごとがましい—野原—野原—遺水—泉水。【水蓼】 はしたなき—はしたは端下にていやしき意、なきは助詞、無きの意にあらず—わたらひ業—世渡りの業—まだき—朝まだきの略—望の日—十五日—父の命—父を尊びて稱する也—まるし—効驗—かへさ—歸途—つみとらして—とらして、のらしては敬稱の助動詞、使役のそれに非ず—何ばかりの事とも思はざりしかども—別段の事とも思はなかつたが—けしき—御氣色御機嫌といふ意—いとなみ—仕事—とうで—取出での音便也—たけだち—身のたけ—よる光るらむ玉—支那に在りと傳へらるる夜光の玉—ものは—何でも無い、

かはは反語—老人のならひ—ならひはくせ—思ひあざみて—あざみては嘲りて也—はふり落つる—亂れ落つる—たちふるまひのなめげなるはさるものにて—たちふるまひは舉動、なめげなるは無禮、さるものにては云ふ迄もなき事として—水し女—炊事女—くたくし—面倒なる—かうは—斯くは也—なまさか—しげに—生利口らしく、利いた風などの意—ひが—しき心—れぢけた心—さばかりならずとも—夫程でなくとも—うつし心—現心なり、常の心也—みまけ給ひて—笑み傾け給ひて—さらぬ様にて—さらぬ體にて—ほれたる様—ほれば惚、ぼんやりと心をと失ひたる貌—給ひけるけに—や—けは、故にの意—くづをれ給ひて—崩折れ給ひて、力抜けたまひての意也—よしも—が—願望の意をあらはす—ほだし—絆也、足手まとひ也

ふたがりて—塞がりて也—のどめて—落着かせて—ころぶしつ—ころりと寝乍ら—妻戸—開き戸。【ある山里】 神無月—陰曆十月をいふ。神嘗月の義、此月に神嘗祭の行はるる故に云ふ—音なふ—訪ふ—關伽柵—關伽は梵語、佛に奉る水を云ふ。其水桶等を載する柵—柑子—蜜柑—枝もたわはに—枝もしなふばかりに—事さめて—興がさめて—なからましかば—無かつたら—覺えしか—かは感嘆詞也。【海と日本文】 稠密—稠はしげき、密はこまかき也—島山—島にある山—勅選の歌集—勅を承りて選べる歌集、醍醐天皇の朝、紀貫之が選り上りし古今集以後、後花園天皇の朝、飛鳥井雅世が新編古今集を選び上りしまで、すべて二十一、二十一代集と稱す—一家の歌集—勅選集に對して言ふ、一個人の歌を集めたる

もの也。五、眩頭—ふなばた。六、ひとりうそづく—得意の貌。七、源氏物語—紫式部の著、平安朝宮廷の裏面を描けるもの、我國文學の最大産物。八、宇津保物語—我國の物語の中最も古きもの。何の時代何の人の作なるかを明かにせず。九、諸曲—うたひ也、足利時代に新に興れる諸物の文學。十、淨瑠璃—徳川時代に盛なりし諸物の文學。十一、眼孔狭小—眼のつけどころの狭きを云ふ。十二、いはれ—所以。十三、驛傳—大化新政の際より諸驛に馬を備へ置き官邊の用を傳ふるに充てたる也。十四、壺中—壺中の天地などと稱す。

【雪の朝友のもとに】—たぐすまひ—居住也、模様といふ程の意。あぐれ—朝夕。朝ぼらけ—朝發也、夜明を云ふ。四、かゝるなり—斯ういふ時。心なき身—無風流の身。六、あたらしく—可憎しく。七、こよなく—此上なく。八、筆のしりとる博士—書をかく人といふ意。九、さうざうし

さ—寂しき。鳥の迹—文字を云ふ。【人のもとより氷をおくれるに】—やむことなき—止む事無き也、畏き尊きといふ意。【わらはども—童共即ち子供等】—めでくつがへり—悦びまはる。四、いぶせき—むさくるしき。五、心やりぐさ—憂さはらし。

【桐壺の卷】—女御—女官の名、后の次に位す。更衣—女官、女御の次に位す、主上の御召更を司る故此名あり。思ひあがる—心傲る、即ち高ぶるを云ふ。四、やんごとなき際—際は身分を云ふ、分際也。五、あつしく—弱々しく病身に。六、上達部—三位以上の公卿を指す。七、殿上人—うへびととも訓す、四位五位の臣、内の昇殿を許されたるものを云ふ。八、あひなく—間無く、隔てなく也。九、あぢきなく—味氣無く、即ち興味が無く情無く。北の方—身分より妻の尊稱。

(終)

文典

第一章 品詞の種類

【品詞】—品詞を分ちて體言、用言、助動詞、助詞、副詞、接續詞、感動詞の七とす。體言を名詞、代名詞、數詞に分ち用言を動詞、形容詞に分つ。一、名詞に普通名詞と固有名詞とあり。普通名詞は同種類の事物を通じて稱する語(山、川、鳥、机等)にして固有名詞は一事一物固有の稱(富士山、正成、旅順等)也。二、代名詞に人稱代名詞と指示代名詞とあり。人稱代名詞には自稱(われ)對稱(なむぢ)他稱(かれ)不定稱(たれ、だれ)等の別あり。指示代名詞は事物、地位、方向によつて異なり。其各々に近稱(事物—こ、これ、地位—こ、こちら、方向—こ、こち、こなた)中稱(事物—

そ、それ。地位—そ、そこ。方向—そ、そち、そなた)遠稱(事物—あ、あれ、か、かれ。地位—あ、あしこ、か、かしこ。方向—あ、あち、あなた)不定稱(事物—いづれ、なに。地位—いづこ、いづれ。方向—いづこ)の別なり。三、動詞は動作を表はす詞也(笑く、讀む等)。四、形容詞は事物の有様を表はす詞也(美し、惡し、高し等)。五、助動詞は動詞の意味を助くる爲に加ふる詞也(打たるゝのゝゝの如し)。六、助詞は他の諸詞の間にありて其關係を定むる詞也(君は行くのはの如し)。七、副詞は動詞、形容詞に副うて其意味を限定する詞也(屢行くの屢の如し)。八、接續詞は語句文章を續くる詞也(遼陽を撃ち又旅順を陥るの又の如し)。九、感動詞は感動を表はす詞也(あゝ悲しい哉のあゝの如し)。

【動詞】—動詞は他の諸語に連続せむ爲め又動

作の意を種々に表はさん爲め其語の尾を種々に變化す。この變化を動詞の活用といふ。例へば開かん、開き、開く、開けの如し。其變化する部分を語尾といふ（ひらかん、ひらきのか、きの如し）變化せざる部分を語根と稱す（ひらき、ひらくのひらの如し）一音の動詞はその全體を變化す、得は、え、う、うる、うれと變るが如し。動詞に他動詞と自動詞と二種あり。他動詞は他の事物を處分する動詞（打つ、打たる等の如き）にして自動詞は獨り動作するを表はす動詞也（氷る、眠る、浮ぶの如し）場合により一の動詞自他何れにもなることあり、例へば開くは、戸開くの時、は自動なるも、戸を開く時は他動なるが如し。

【動詞の活用】 一つの動詞の活用は五十音圖の同行の中に於てし、同種類の活用をなす動

詞に於て、五十音圖の同列に活用する詞は、同じ状態を表はすものとす。動詞の活用は、正格と變格との兩種あり、正格活用の中に、四段活用、上二段活用、下二段活用、上一段活用、下一段活用の五種あり。四段活用は、一行五段の中、第一段より第四段迄に活用するものにして、行か、行き、行く、行けの如し。か、さ、た、は、ま、ら、の五行に於て活用する。上二段活用は、一行五段の中、第二段第三段に活用するものにして、生き、生く、生くる、生くるの如し。き、ち、ひ、み、い、り、の五行に於て活用す。下二段活用は、一行五段の中第三段第四段に活用するものにして、受け、受く、受くる、受くれの如し。え、け、せ、て、れ、へ、め、え、れ、ゑ、の十行に於て活用する。上一段活用は、一行五段の中、第二段にのみ活用する

ものにして、著、きる、きれるの如し。い、き、に、ひ、み、あ、の六行に於て活用す。下一段活用は、一行五段の中第四段にのみ活用するものにして、蹴、け、ける、けれ、の如し。が行に於て活用す。變格活用の中に、加行變格活用、左行變格活用、奈行變格活用、良行變格活用の四種あり。良行變格活用は、有り、居り、侍り、の三語に限らる。有ら、有り、有る、有れ、の如し。良行四段活用と外形は同一なれど、第二段が終止體をなすを異なれりとす。奈行變格活用は、死ぬ、去れ、の二語に活用す。死な、死に、死ぬ、死ぬる、死ぬれ、死ぬ、の如し。四段活用より活用の形多し。左行變格活用は、爲の一語にのみ活用す。爲、し、す、する、すれ、の如し。第二段にも活用して左行下二段より活用形多し。加行變格活用は、來の一語にの

み活用す。來、く、き、く、くる、くれ、の如し。第五段に亘りて活用するの變格なり。【動詞の段階】 然段は事の將に起らんとする時用ふ。書かむ、書む、落ちばの如し。連用段は用言即ち動詞、形容詞に連る段也。書き終る、着にくし、落ち行くの如し。終止段は意味の完結を表はす段也、字を書く、衣を着る、木より落つるの如し。連體段は體言即ち名詞に連る段也。書く人、著る著物、落つる猿の如し。已然段は己に然る意味を表す、書けば、著れば、落つればの如し。命令段は命令する時に用ふる段也。字を書け、早く死ぬの如し。【形容詞の活用】 形容詞の活用は二行に跨る。善き、善し、善き、善けれ、の如し。語根にしあらば、終止段に於けるしは省くを常とす。各段の性質は、動詞と異ならず。

【助動詞】 受身―他より動作をしかけらるゝ意の助動詞、押さる、報いらるゝの、らるゝ如し。 使役―他を使役して動作をなさしむる意の助動詞、受けしむ、報いさすのしむ、さすの如し。 打消―事を打消す意の助動詞、花咲かず、鳥なかじ、のず、じの如し。 同時の未來を表はす助動詞、明日行かむのむの如し、現在完了を表はす助動詞、花咲きたり、開花せり、花咲きの、花咲きのたり、せり、ぬ、つの如し。 過去を表はす助動詞、花咲きき、花咲きけりのき、けりの如し。 推量―事物を推量して言ふ意の助動詞、雨降るべし、雨降るめり、鳥啼くらむ、鳥啼くまじ、鳥啼くらしのべし、めり、らむ、まじ、らしの如し。 指定―事物を指し定むる意の助動詞、花咲くなり、彼は行きたり、彼は行くべしのなり、たり、べしの如し。 比較―甲と乙とを比較

する意の助動詞、飛ぶ如しの如し等。 感嘆の意を現はす助動詞、雪は降るなりのなりの如し。

【助動詞の活用】 べし、如し、まじは形容詞の活用に同じ。 ①る、らる、す、さす、しむ、つは下二段活用、②なり、せり、たり、けりは良行變格活用。 ③ぬは奈行變格活用。 ④むはむ、めの二様に變化す。 ⑤きはせ、きし、しかと活用し、すはず、ぬ、れと活用す。 ⑥じ、らしは活かず。

【副詞】 ①時間を表はすもの―今、しばし、嘗て、現に、久々に等。 ②場所を表はすもの―彼處に、此處に等。 ③分重、度合を表はすもの―纒に、全く、殆んど等。 ④動定、推量、願望の意味を表はすもの―必、豈、恐らく、願くは等。 ⑤形容詞の副詞となれるもの―蝶を軽く撲つの軽くの如し。 形容詞は體言にのみ

附く、用言につくは副詞也。 ⑥動詞より副詞となれるもの―極めて、決して等。 ⑦他の副詞の上に添はりたるもの―いと徐に、甚だ熱心にのいと、甚だの如し。

【接續詞】 ①附屬接續詞―一つの句に附屬して離し難きもの、人之を笑ふと雖もの雖も等。 ②獨立接續詞―取り離し得るもの、月又花、人かはた鬼かの又、はたの如し。

【感動詞】 あはれ不幸なる少女よ、あな面白の琵琶の音やのあはれ、あな等。

【助詞】 ①打消―で。 ②命令―よ。 ③禁止―な、なそ。 ④疑問―や、か等。 ⑤連辭―が、の。 ⑥指定―は、もの、が、ぞ、なむ、こそ、を、指し示しに、へ。 ⑦限定―ばかり、のみ、だに、すら、さへ、より、まで。 ⑧比較―、より。 ⑨決定―かし、ぞ。 ⑩反語―や、やは、か、かは。 ⑪接續―て、と、も、は、ば、ど、ども、に、を、か。

【品詞の轉成】 名詞の動詞になり、動詞の副詞になる等、或種の詞が別種の詞に轉用せらるるを品詞の轉成と稱す。

第二章 品詞相互の關係

【動詞と助動詞との連續】 ①受身の、使役の、すは、良變四段奈變の動詞に、受身のらる、使役のさすは其他の動詞に、いづれも將然段に於て連る。 ②打消のじ、す、使役のしむ、未來のむは總ての動詞に將然段に於て連る。 ③現在完了のたり、ぬ、つ、過去のけり、きは總ての動詞の連用段に於て連る。 ④推量のらむ、べし、めり、まじ、らし、感嘆のなりは總ての動詞の終止段に連る。 ⑤指定のなり。 ⑥已然段べしは總ての動詞の連體段に連る。 ⑦已然段に連る助動詞は無し。

【動詞と助動詞との連續】 ①打消ので、接續のば

は總ての動詞の將然段に連る。【命令のよ、禁止のなそ、疑問のや、か、指定のは、も、ぞ、なむ、こそ、限定のなに、さへ、だも、反語のや、やは、接續のては總ての動詞の連用段に連る。】【禁止のな、疑問のや、限定のばかり、決定のかし、反語のや、やは、接續のと、どもは、總ての動詞の終止段に連る。】【が、ばかり、のみ、だに、だも、すら、さへ、より、まで、ぞ、か、かは、は、に、を、か等は連體段に連る。】【接續のば、ど、どもは總ての動詞の已然段に連る。】

【形容詞と助動詞との連絡】【や、は、も、ぞ、なむ、とぞ、のみ、だに、だも、さへ、や、やは、も、ともは連用段に連る。】【や、かし、や、やは、とは終止段に連る。】【か、ばかり、のみ、だに、だも、さへ、すら、ぞ、か、かは、とは、に、を、が、は連體段に連る。】【ど、ば、

どもは已然段に連る。【ばは將然段に連る。】【助動詞と助動詞との連絡】【使役のしむ、打消のす、じ、未來のむ、推量のましは、受身の助動詞の將然段れ、られに連る。】【受身のらる、打消のじ、す、未來のむ、推量のましは使役の助動詞の將然段せ、させ、しめに連る。】【打消のす、未來のむ、推量のましは現在完了の助動詞の將然段たらに連り、む、まはまた現在完了の助動詞の將然段せらにも連る。】【打消のす、じ、未來のむ、推量のましは指定の助動詞の將然段なら、たらに連る。】【使役のしむはたらに連る。】【過去のつ、ぬ、たり、けり、きは、受身の助動詞の連用段れ、られと使役の助動詞の連用段せ、させ、しめるとに連る。】【未來のけむ、過去のけり、きは、現在完了の助動詞の連用段て、に、たり、せりりに連、現在完了のたりは、にに連り、つ

はたりとせりとに連る。【七現在完了のつと過去のきとは、過去の助動詞の連用段けりと、推量の助動詞の連用段めりとに連る。】【けむ、つ、けり、きは、指定の助動詞の連用段なりとたりとに連る。】【らむ、べし、めり、まじ、らし、なりは、受身の助動詞の終止段る、らると、使役の助動詞の終止段す、さす、しむるとに連る。】【らむ、べし、めり、らし、なりは、現在完了の助動詞の終止段つとぬとに連る。】【指定のなりは、受身の助動詞の連體段る、らるる、使役の助動詞の連體段する、さする、しむる、打消の助動詞の終止段ぬ、未來の助動詞の終止段む、現在完了の助動詞の終止段つる、ぬるの各々に連る。】【らむ、べし、めり、らし、なりは現在完了の助動詞の連體段たるに重り、らむ、べし、らしは現在完了の助動詞の連體段せるに連る。】【らむ、

らし、なりは過去の助動詞の連體段けるに連る。【らし、なりは推量の助動詞の連體段ぬるに連る。】【らむ、めり、べし、らしは指定の助動詞の連體段なるに連り、らむ、べし、めり、まじ、らしは指定の助動詞の連體段たるに連る。】

【助詞記と助詞との連絡】【助詞は、で、よは受身、使役、打消、現在完了(つ、ぬ)推量(む)の助動詞の將然段に連る。】【助詞な、なそ、やか、は、も、ぞ、なむ、こそ、だに、さへ、やは連用段に連る。】【な、ばかり、や、とは終止段に連る。】【ばかり、のみ、だに、すら、さへ、か、かは、は、が、も、は、を、が、ぞ、こそ、なむは連體段に連る。】【か、や、ば、ど、ども、は已然段に連る。】【や、やは、と、ともは、現在完了(たり)過去、推量(めり)、指定、感嘆の助動詞の終止段に連り、な、か

(疑問)は、も、の、が、ぞ、なむ、こそ、を、ばかり、のみ、だに、さへ、すら、ぞ、か(接續)を、に、は、か(反語)かははその連體段に連る。

第三章 文の構造

【單語連語及び文】 箇々の意味を示す語を單語といふ。鳥、小女、正成、嘶く、止まる、の如し。單語の進まりて稍複雑なる、また纏りたる思想を表はすを連語若くは句と稱す。菜の花に、回航の途次、肥え太りたる、忠臣なりの如し。單語が集まりて、纏りたる一思想を完了して表はせるものを文といふ。馬嘶く、美しき栗毛の馬高く嘶く等の如し。

【文の主語述語】 叙述する思想の主題となるものを主語と稱す。叙述する語を述語(説明語)と稱す。文は主語と述語との關係より成

り立つ。主語は多くの場合體言即ち名詞、代名詞にして、述語は多くの場合用言即ち動詞、形容詞、又は活用連語也。されど用言又は活用連語が主語となることあり。得るは難く失ふは易し、及ばざるは過ぎたるより勝れり等也。また助動詞、助詞が述語となる事あり、孔子は聖人なり、其言動狂人の如し、そもそも何の罪ぞの如し。

【補語及び客語】 主語と述語とのみにては、其意味を完全にするを得ざる事あり。補語及び客語の必要に起る。補語及び客語は主語の事情、動作を補ひ、夫に關係ある對手を表はす語にて、主語と同じく多くの場合體言より成る。二つの客語を要するもの一帝群臣に謁を賜ふ。勝家盛政をして賤が岳を攻めしむ。一の客語と一つの補語とを要するもの一教師百點を満點と定む。形容詞、詞副も亦

補語として用ひらる。手を黒くす、其言を二三にする等。

【修飾語】 他の諸語の意義を種々に修飾するもの也。用言又は副詞を修飾するものを、副詞的修飾語と稱す。花遂に咲かず、海上は波極めて平なり等。體言を修飾するものを形容詞的修飾語と稱す。若き齡、眠れる獅子、我が國等。修飾語を更に修飾する修飾語あり、美しき極彩色の紙鳶、非常に早く駆け來る等。

【各語の位置】 主語、説明語、客語、修飾語等の文中に於ける位置は、尋常の場合に於ては自ら一定せり。其一定せる位置の順序を正序法と云ふ。主語―述語。主語―客語及び補語―述語。(修飾語)主語―(修飾語)客語及び補語―(修飾語)述語。種々の必要の爲め正序法の位置を顛倒するを顛倒法といふ。行け

(述語)わが胸(主語)の如し。主語、述語、客語及び補語を省略する事あり、省略法と云ふ。

【單文】 主語と述語との關係が、文法上の形式に於て唯一回丈成立せる文を單文と稱す。主語の二つ以上あるものあり、金、銀、銅は金屬也の如し。述語の二つ以上あるものあり、彼等は輾轉し號泣し哀訴せりの如し、客語の二つ以上ある者あり、余は手紙を母、兄、叔父に送れりの如し。主語客語共に二つ以上あるものあり。大工は木を切り板を削り家を建つもの如し。主語、述語共に二つ以上あるものあり、卿と我とは同時に入學し同時に卒業したりもの如し。以上何れも文法上に於ては單文也。

【句及び複文】 一の文が其獨立を失ひて他の文の一部分となれるを句と稱す。句は大小種

種ありて其用法頗る多様也。句は主語、客語、補語として用ひられ、又形容的修飾語として用ひられ、副詞的修飾語として用ひられ、又一層大なる修飾語の一部分として含まるゝ場合もありて、文を複雑にす。文が一つ以上の句を含み、而して主語と述語との文法上の關係が二回以上成立せるものを複文といふ。妹花の咲くを待つ(妹待つ、花咲く)彼は犬の走るを見る(彼見る、犬走る)等の如きは複文也。

【節及び重文】 文の中には其一部分が他の部分に附屬する事なく、同等の位置を保ちて併立せるを文法上節と稱し、二つ以上の節を含める文を重文と稱す。複文を重ねたるも亦重文と稱す。重文中の節が打消、受身、使役、命令、比較などの助動詞を要する時は各文節毎に繰返すを常とす。友も來らず我も行

かざりき、姉は賞せられ弟は叱責せらる、始めは處女の如く終は脱兎の如し等。其他の助動詞は最後の節にのみ附く。

【文の種類】 構造上の種類は、單文、重文、複文の三也。性質上の種類は次の四とす。反語法をとらず疑問體を用ひず、平敘したるものを平敘文と稱す。單文、複文は文をその構造上より分類せる名稱なり、反語又は疑問の意を含むやうに記述したるを疑問文と稱す。天下何人が彼を譏らんの如し。命令の意を現せるものを命令文と稱す。行け快男子の如し。感動の意を現はしたるを感嘆文(感動文)と稱す。あく悲しいかなの如し。天下の大惨事ならずやの如きは、疑問文の體を用ひて感動文とせるもの也。

第四章 係り結び

【係りの法則】 文法上に係と結の二法則あり。係とは一文又は句の結末に對してその上に來るべき助詞例へばぞ、こそ、や、か、などの用法をいひ結とは句の末又は文の末に置く動詞、形容詞、助動詞等の語尾を上置きたり係に對して結びせる特別の用法をいふ。今

- 一 平敘文係結の法則は、
 - 一、徒の係又は普通の助詞が係となるときには述語は通常終止形を以て結ぶこと、
 - 二、その助詞が係となつて居るときには述語は連體形を以て結ぶこと、
 - 三、その助詞が係となつて居るときには述語は已然形を以て結ぶこと。
- 二 疑問文の係結の法則は、
 - 一、疑問助詞や又はかが文の中間に來る時は述語は必ず連體形を以て結ぶこと、
 - 二、疑問助詞やが文の最後に來る時には術

- 語は必ず終止形を取る、
- 三、疑問助詞かが文の最後に來る時には述語は必ず連體形を取る、
- 四、疑問助詞ぞが文の最後に來る時には述語は必ず連體形を取るべし。

- 三 命令文係結の法則
 - 一、動詞が述語となつてゐる時にはその動詞が四段か又奈行、良行の變格活用に屬する時は已然形を取る。
 - 二、述語が形容詞の場合にはその連用形にあれの添はつたとの即ち善かれ、悪しかれの形を取る、
 - 三、述詞が助動詞の場合には動詞、形容詞と同じ形を取る。
 - 四、禁止の意を示す命令文の結は述語の連體形に禁止の助詞な、なかれ、を添へて現はすのが常である。

すべて命令の文には、ぞ、や、か、こそなどなし。

四 感動文の係結法則

一、感動の意を示す助詞が文の最後に來て結ぶので常で此感動の助詞は常に述語の連體形に連續する。

五 係に對し結びなきもの

六 現代文に於ける係結上の許容

一、現代文には述語の連體形にやを添へて結ぶ事を許さるゝなり。

第五章 點記法

【點記法】 一文の構造を迅速且つ明瞭に了解せしむるため文の中に點を添へ、記號を挿むなりその點を添へるを句讀法又は附點法ともいひ記號を挿むる記號法といふこの二つを總稱して點記法と稱す。

一、全切點(。) 文意の完了したることを現はすので文の終末の字の右脚邊に附す。

二、半切點(、) 語意が一度斷れて又直に下る續くことを現はすので文中の所々文字の右脚邊に附す。

三、並列點(・) 同位の名詞を二個以上並列する時その混雜を防ぐ爲めにその語と語との中間に挿入す。

四、括弧() 引用した語句、又は文中の人の對話の語句などを示すときに附す。

五、括弧() 又は() 本文と註釋文とを分つ爲めに附けるので註釋文等の上下に附すを例とす。

之れを要するに句讀點及び記號は多くは散文にのみ用ひるもので歌、謡、類の韻文にはもとよりこの規則に従はず (終)

作文

第一章 總 說

【書取と誦誦】 作文練習の第一歩として書取をなすを可とす。書取は六かしと思ふ漢字より始めよ。次に短き章句に及ぼせ。次に誦誦を試む可し。誦誦は其語句を記するに於て、文法を知るに於て、又、其文の妙趣を味ひ、調子を會得するに於て、作文に最も効果ある方法也。誦誦するには、最も佳き文章を選ばざる可からず。

【改作】 次に、或る一文に就き、其形式文を藉りて内容を種々に書き改むる事を試みよ。作文の第一義は正確といふ事也。適當なる文字を適當なる位置に置く事也。思想を發表する前に文字の使用法を學ばざる可からず。

更に口語を文語に改め、文語を口語に改むる事を試みよ。これも亦語句を正しく用ふる練習として頗る有效也。

【詩を文章に書き換へる事】

更に一步を進めて稍自由なる作文練習法としては、詩を文章に書き換ふる法を可とす。詩には語句に傾倒あり省略あり、而して語の外に意味あり、餘情あり、顛倒せるものは正しくせざる可からず、省略は補はざる可からず、語の外の意味と餘情とは或る程度まで之を添へざる可からず。詩を文章に改めんとせば、先づよく詩を了解し、其情趣を味ふを要す。此點に於て、此方法は詞藻を増すと共に、想像力を養ふの効果多しとす。

【文を約むる法】

文の組立法については文典に譲る。要するに文章の要素は主語、述語(説明語)客語及び補語也。此基礎の上に幾多の

修飾語を加へ、更に句を分ち、節を分ちて複文とし重文とし陸離參差の趣致を成さしめたる也。されば、其文の主成分のみを残して原文の意味を托し、簡單に之を約むる事を得可し。此方法を約文法と稱し、作文練習上効果ある方法也。文の骨子を握り、文法を明かにするは、正確なる文章を得る第一の用意なるを記憶せよ。

【文を引き延す練習】 此方法は前と反對也。詩を文に改むる方法と相似て、詞藻を豊かに想像力を盛んにする効果あり。約文法と併せ練習す可し。初學の中は類語を探りて思想喚起の一助とするも不可ならず。唯、類語はなる可く己の經驗を語れるものに近きものを選ぶを要す。

【意味を取換へて書く事及び日用文】 所謂換骨脱胎也。日用文の練習には最もこの法をよ

しとす。日用文には一定の形式ありて、安否、見舞狀、依頼狀、注文狀等皆夫々の型を有す。唯、特殊の部分丈意味を書き改むれば可也。日用文は全く實用的のもの也、正確に其要件を盡さざる可からず、正確ならざる日用文は他に迷惑を掛くる點に於て寧ろ罪惡也。又日用文は社交的のものなる故情味なかる可からず、禮儀なかる可からず、而して正直ならざる可からず。端書の文は簡單にして明瞭なる可し。而も遺漏ある可からず、一枚の端書と雖も周到の用意を以て書かれざる可からず、手紙及び端書によつて與へられたる習文の機會を重んぜよ。

【文章の簡潔】 文章は先づ第一に正確ならざる可からず、正確ならんとして陷るは冗漫の弊也。冗漫は文の効果を薄くす。文章は正確なると共に須く簡潔なるを要す。簡潔は簡單の謂にあらず。簡單は書く事實が單純なる也。簡潔は、いかに複雑せる内容にても些の遺漏あるなく、能ふだけ少なき言葉によつて夫をつくす也。簡潔ならしめんとし、書かざる可からざる内容を捨つるが如きは、甚だしき誤解也。簡潔に書くには、書かんとするに當り、まづ其思想を整理し順序を定むるを要す。而して確實に其表はさんとしたる意味を表はし得可き語を選ぶを要す。而して其語

を最も有力に其語の力を表はし得可き適切な位置にあらしむるを要す。斯くて重複なく混雜せざる文を得可し。冗漫の原因は、重複と混雜とにあり、簡潔の要は、正確と適切とにある也。簡潔なる文には從つて餘情あり、次に其一例を示す。女郎花咲き、柿の實ほのかに黄ばみ、甘藷次第に甘し。つくつくほふしは晝に、松蟲、鈴蟲は夜に、共に秋を語る。粟、稻、蘆の穂のさわくといふ音を聴け。微雨はらく降りて歌みぬ、是れ今年の夏のシグズンを送るの聲なり(徳富蘆花) 其一冗字一冗句なきを見よ。手紙の文には緩急あり、急を要する特殊に簡潔ならざる可からず、端書の簡潔を要する云ふを俟たず。重ねて云ふ、簡潔は簡單にあらず、言はんと欲する事を言はざるに非ず、云はんと欲する事を精選して、多く言ひたる以上の効果を收めんと

する也。沈黙は多辯にまさる。簡潔の陥り易き弊は餘裕のなくなるにあり、筆の萎縮するにあり、これを注意せざる可からず。簡潔なる描法は和歌、俳句に見る。また俳文と云ふ一文體あり。最もよく簡潔の妙趣を發揮す。就いて吾人の資とす可し。一例を擧ぐ。「焼蚊の辭。蚊、蚊、帳中の蚊、汝を焼くに辭を以てす。汝此辭を聞く時はわが手に死すともみづから足れりとせよ。夫れ澤雉は焚中籠に養はれん事を願はずと、彼は心をとる、これは食を求めて人の肌にせまる。かれを愛せんや、これをにくまんや。」

【日記文に就きて】 日記を書くは文章練習法として最も効果ある方法なりとす。日記の文章は簡潔なる可とす。煩雜の敘述は、恐らく之を日々に永續する能はざる可ければ也。

【日記は自分の思ひ感じたる事を吐露し經驗

したる事を敘述する也、偽らず飾らざる處に生命あり、文章は最も真情の流露を尊しとす。正直に書かれたる日記文は最も尊かる可き素質を有する文章也。【日記文を書くの要は、一日の出來事について其中心を捉ふるにあり。炙所を抑ふるにあり、中心を捉へ炙所を抑ふるは總ての文章に於て最も重要な事也。斯くて簡潔にして達意、素樸にして眞率なる可し。斷じて浮華を避く可しと雖も、詞藻を豊富ならしむるは必要也。】

【文章と寫生】 文章は寫生より入る可とす。想像力といへども、其根原を培ふものは實際についての觀察也。先づ實際について觀察せよ。文章の形式を會得せば、第一に寫生に就け。繪畫にても詩歌にても、寫生を以て入門とする也。寫生は實に一般藝術の基礎也。【寫生は其初めに於ては虚心平氣にて或る事物

に對しその輪廓を正しく寫し得るに努めよ。奇拔を街はんとする勿れ。【寫生は精細なる可し。寫生の精細は觀察の精細に俟つ。されど精細とは煩雜冗漫の謂に非ず。【寫生は先づ手近なる所より初めよ、態度の忠實が第一要件也、細工をなさず、正直に寫して活躍の致を得る處に寫生の特色は存す。【寫生文の祖なる正岡子規の語に曰く「文章の面白きにも様あれども、古文、雅語等を用ひて言葉のかざりを主としたるはここに言はず、はた作者の理想などたくみに述べて趣向のめづらしきを主としたる文もここに言はず。ここに言はんと欲する所は世の中に現れ來りたる物事（自然界にても人間界にても）を寫して面白き文章を作る法也。或は景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、その文章に直して讀者をしておのれと同様に面白く感ぜしめんとするに

は、言葉を飾る可からず誇張を加ふべからず、唯ありのまゝ見たるまゝに其事物を摸寫する可とす。」と、寫生文の意義これに盡く。

【寫生文】 記事文は抽象的也、寫生文は飽迄も具體的也、記事文は地圖の如く寫生文は繪畫の如し。地圖よりも繪畫に興味多きが如く、一般に記事文よりも寫生文に興味多き也。【寫生文を書くには、事件の取捨選擇が必要也。總てを書き盡さんとせば、一をも書き得可からず。まづ中心點を定めよ、夫を幹とし枝葉を繁らしめよ。中心點に關係無きものはこれを捨てよ、如何に複雑なる事件を寫すも枝葉の幹に於けるが如く中心に於て統一せらるるを要す。中心點は興味之最も充實せる處にあり、子規曰く、「取捨選擇とは面白き處をとりて詰らぬ處を捨つる事にして、必ずしも大を取りて小を捨て、長を取りて短を捨つる事に

非ず。又曰く「或景色又は或る人事を敘するに最も美なる處又は極めて感じたる處を中心として描けば、其景其事自ら活動す可し、しかも其最美極感の處は必ずしも常に大なる處者しき處必要なる處に非ずして往々物陰に半面を現すが如き隱微の間にある者也。薄暗き恐しき森の中に一本の赤椿を見つれば非常に美しく且つ愉快なる感じを起す、此時には椿を中心にして書くは宜しけれど、椿を中心にすれば必ずしも椿を詳敘するの謂に非ず。森の薄暗き恐しき様を稍詳かに敘して後に赤椿を點せば一言にして著しき感動を讀者に與へ得可し」と、以て寫生の中心點といふ事に悟入するを得ん。

第二章 作文修養

【文章の修養】 寫生文のみならず、凡て文

章を書かんとするに當りて、先づ第一に我は何を書く可きかと自覺せざる可からず。然らずして漫然と筆を執り紙に向ふも終に得る處無けん。次に美しく書かん、巧に書かん、人をして感ぜしめんといふが如き術氣を去れ。あく迄も天真なれ、文は最も虚飾を惡む。次に觀察力を養成せよ。いかに觀察す可きは自家の悟入にありと雖も、古人先輩の作を翫味して參考に供するを要す。四型に囚はるる勿れあく迄も自己の思想感情に忠實なれ。【文章と敘景】 形式としては寫生文より入る可く、其内容としては景色より入るをよしとす。敘景文は比較的書き易ければ也。敘景文は已に記事文に非ず、景色其物を描くと共に景色によつて動かされたる自己の情緒をも書かざる可からず、情緒は其幼稚なるを愛ふる勿れ、唯眞實ならざるを愛へよ。敘景文

に於て殊に意を用ふ可きは自然の色彩なりとす。感覺を鋭敏ならしむる事に努めざる可からず。

【觀察の方法】 寫し描かんとせば先づ見ざる可からず。寫生が藝術の基礎たると同時に觀察は藝術の根本也。二觀察が精細ならざる可からざるは、單り寫生文に就てのみに非ず、假令描寫は簡單なりと雖も、其觀察は精細ならざる可からず、七を描く際にも十を觀ざる可からず。外形のみを寫す際にも内部迄を觀ざる可からず。物の簡性を觀ざる可からず、一草一木皆特殊の性格を有す。凡そ天地間の萬象皆同じきは非ず、而して簡性を發見するは、觀察の精細に俟つ。四觀察は常に新なり、物其物に簡性なると共に、觀察者其人にも簡性あり、觀察者の簡性に映ぜる其物の簡性ならざる可からず。觀察者は先づ自己の簡

性に忠實なれ、何物にも囚はれざる純粹の自己の眼を以て觀察せよ。そこに新らしき觀察ある也。五觀察は明敏なる判斷力を要す、物の簡性を發見する事、事件の中心點を見出す事は、皆明敏なる判斷力に俟つ。以上四條件を用意として、物及び事件の眞相に徹底せよ。文を作る前に、觀察の習慣を養ふを要す。【文章の組織】 文章には體制なかる可からず、首尾の順序に従ひて、主尾、一貫せざる可からず、評論體の文に於ては殊に然りとす、前後本末其處を得て、整然として一糸亂れざるを要す。然らざれば、支離滅裂となりて理義の明白を缺くの嫌あり。次に文章に於て明かに二段に分れたるを見る。彼は不世出の英雄なりき。彼が一代の間に遺したる偉業はやがて世界の偉業にして萬世朽つる事無かる可し。此英雄を産みたる某國の榮華や洵

に想ふ可き也。第一段は首也、第二段は胸也、第三段は尾也。正格なる文章には此三段なる可からず。而して此三段は強いて意を之に用ひずとも、思想の十分整理せられ居る時は、自ら斯かるを得る也。三段は其均衡を得ざる可からず、首尾は概ね簡勁なる可く、胴部は其中心也、文の主部なり、委曲を盡さざる可からず。然れども斯くの如きは自然に得可し。型に囚はるゝ勿れ、如何なる場合にも唯自己に忠實なれ。

第三章 作文上の注意

【時間、其他の注意】 邦人は時間の觀念頗る不正確也。文章の上にも之を見る。時の呼應に注意するを要す。現在の呼詞は現在の應詞と伴ふ可く、過去は過去、未來は未來と伴ふ様に注意せよ。明日雨降れば躑躅見を見合せ

ん、或は書を讀めば賢者とならん如き不正確なる使用法を避けよ。假名の誤用なきやうに注意せよ。おとこ、おんな、堪え、川に沿ふての類の誤用少なからず。三誤字無きやうに氣を附けよ。慧星、未來、瀛車等は最も陥り易き誤用也。餘りに耳遠き古語を用ふる勿れ、死語死字は之を避けよ、新時代の用文は國語と漢語との調和宜しきを得たるものを以て形成せられざる可からず。文章の虚飾は嚴に之を戒むれ共、詞藻は豊富ならざる可からず、然らずば、書かんとして書き得ざる憾みある可し。

【文章の調子】 文字を整ふると共に、更にその續け方即ち句調を整へざる可からず、而してその句調は内容と相應じたるものならざる可からず。緩急強弱、其宜しきを得て文章始めて見る可し。調子のよき文章を作るには、

名文を多く讀みて其調子を體得す可し。誦詠を殊によしとす。和歌、詩等は調子に一種の型あり、参考とするは可なれど、すべて之に則らんとするは、散文と韻文との別を知らざるもの也。調子のよきといふ事は、調子が文の内容をなす思想感情の調子と合致するといふ事也。單に流暢といふ事を以て調子よきものとなすは大に誤れり。意達して止むは文章の第一歩也、進んで面白味をつくるを要す。滋養品にも味を要する也。されど徒に舞文曲筆して面白味を強ひんとするは文章道最も卑しむ可く惡む可き事也。文章の面白味は内容にあり、形式にあらず。即ち觀方、考へ方にありて書き方にあらず、材料の使ひ活かし方にありて、云ひまはし方にあらず。

【作ると讀むと】 文章上達の第一義は、自ら進んで作らんとする心であり、此心は廣く云

は即ち感興也、感興なくして作られたる文には生氣無し、死文也。作らんとする心の裏面には必ず仔細に事物を觀察し、取捨し選擇する用意ある可し。豫め此用意なく、唯漫然と作らんとするは、殊に初學にありては六かしき事也。忠實なる用意あれ。用意といふはアテ氣にあらず、人の賞讃を得ん。人を感動せしめんとし、いふやうなる不純の心ある可からず、唯飽く迄も自家の思想と感情と感覺とに忠實なれ、文章其物に忠實なれ、爲にする處あらんとする心は、文章道の賊也。忠實にして純粹なる用意あれ、文章上達の方法は、多作と而して多讀と也。多作のみにては眼が肥えず、いつまでも自家の文章の非を知らず、随つて上達なからん。必ず多讀を伴ふを要す。しかも多讀は動もすれば粗讀となる。之を戒めざる可からず。讀む可し、さ

れど讀まる可からず、確實に自己を立して後に讀め。而して之を自己の者とせよ。徒に書に心酔して、右に就き左に就くも何の得る處かあらん。批評的に讀め、而して其精華を摘め、必ず精讀、可し、而して之を消化し自己の血肉とす可し、然らずば讀書の勞程徒勞の甚しきは莫からん也。理解せよ、味解せよ、身讀せよ、體讀せよ。

【文章を作る遅速】 一初學者は却つて速筆なるもの也。遅筆は語句の適不適を思ひまどふに よるものにして、即ち多少文章眼の開かれたる人に之を見る、遅筆は決して悲觀す可き事にあらず。されど餘りに考へすぎ凝りすぎるは初學の爲に宜しからぬ事也、或點迄は冒險的に自在の筆を驅使せよ。初學の文が多少の疵瑕を有するは是非も無き事也。疵瑕なきのみ旨として筆端萎縮するは最も不可也。

疵瑕もあれ、生氣は決して失ふ可からず、されどこれ、無責任にかき投げよといふ謂には非ず、努力にはかならず貴き報酬あり、才ばしりたる人の無造作に走らせたる筆の見る眼には心地よからんも、眞面目に努力して作れる文の、よし才氣こそ無けれ、一味眞摯の氣の人に迫るに如く可きか。要するに遅筆速筆皆各自の天分の異なるに従つて分る、唯忠實なれ、眞摯なれ、文章上達の訣は唯これのみ也。

【文章の精粗】 文章の簡潔といふ事は、其精粗とは全く別義也。精密は冗漫の謂に非ざる事にまづ注意せよ。文章に精粗の別あり、一文の中に於ても自ら、精かに書く可き部分と粗く書く可き部分とある可し。其邊の消息は學ぶ者の自然に悟人し得べきもの也。唯精密に描かんとすれば、冗漫となるは簡潔を

欲して粗筆となると同様に初學の最も陥り易き弊所なるを注意せよ。精密の中にも選擇あり取捨あり、其表現法はあくまでも簡潔ならざる可からざる也。粗筆を旨とせる文の、やくもすれば獨合點に陥りて、片輪なる文となる事ある、また注意を要す。

【活きた文章】 活きた文章とは生氣ある文章を云ふ也。文章の生氣は眞實より來る。偽りなく誤りなく作者の思想感情の紙上に披瀝せられたる時、其處に生氣ある也。此意味に於て生氣は衝氣と正反對也。活きた文章とは、また効果を有する文章とも解せらる。人を動かすを得る文章は是也。而して人は眞實に非ざれば動かす。

【文章の目的】 文章は要するに、廣き意味に於て自己の思想感情を發表するの具也。自己の思想感情を發表するは人として世に立つ上

に最も必要なもの也。文章はこの必要を充たすもの也。即ち一般的に文章の目的は實用にありといふを得。文章の中、最も必要なるは實用的文章也。實際に役に立つ文章也。我々の有する詩的感情、美的思想は尊重せざる可からず、されど徒に詩に耽り美に溺るるを以て文章の能事となすは、其本末を誤れるものなからざる可からず。先づ實用としての文章を學べ。

【自己の意見を發表する場合】 自己の意見を發表する文章は即ち論文也。されど論文といふ一定の形式にのみ限らず、我々は書翰其他に於て常に自己の意見を發表する必要と機会とを有す。自己の意見を發表せんとするには信念を以てせざる可からず。強き自信を以て堂々として語らざる可からず。顧みて自信なからんか、初めより語る可からず。之を語

るは他を偽り自らを偽る也。飽迄も論理的ならざる可からず、理路の晦澁と柔盾とは決して人を同情せしめ難からん。されど、或程度迄は情趣を添へざる可からず、理、頷づかしむると共に情以て化するを忘る可からず。四論難の際には、飽迄も慎重、厳正の態度を以てするを要す。嘲諷亦可なり、されど敵に對する尊重の念は之を裏に把持せざる可からず、飽く迄も眞實にして眞面目ならざる可からざる也。

【文章は人格也】 是を要するに、文章は眞實なる表出ならざる可からず。文章道の要は唯誠の一字に歸す。根本に於て此態度なからんか、いかに技巧工夫に腐心するも、畢竟これ徒勞に歸せんのみ。技巧の如きは抑々末也。眞實とは何ぞ、其人の有せる知と情と意と即ち其人の全人格が其儘に流露せるもの也。

乃ち知る文章は畢竟人格なるを。名文を得んとする人は、自らの人格に顧みて切磋の功を積む可き也。重ねて云ふ、文章は畢竟人格也。ひとり文章のみならず、あらゆる技術は皆人格を根柢とせざる可からず、人格を離れたる技術は、所謂技術のみ、生命なき技術のみ。所謂技術としての文章は半銭の價値すらなし。寧ろ有害にして無益の物たらんのみ、三度云ふ文章は畢竟人格也。(終)

習字

第一章 總說

【書の價值】 惡筆は人に不快の感を與ふ。文字は實用の具たると共に、美術品の一種也。文字の練習は、社交上、品性修養上極めて必要也。筆蹟の巧拙は多少天分による。されど習ひて及ばざる事無し。筆蹟は人格の表現なり、習字は又人格修養の一方便也。

【姿勢】 字を書く際、第一に注意す可きは姿勢也。姿勢正しからざれば、正しき字を書き難し。坐して習字する場合には、端坐して腹部を張り、胸部を伸べ肩を水平にし頭首を眞直にす可し。腰を掛けて習字する場合には腰掛を机卓の端より半ば内方に引き入れ、脚は趾頭を揃へて床上に安んじ、足尖に少し

力を入れて膝を直角に曲げ、腰部を腰掛に安んじ、體の上部を眞直にし殆ど全身の重さを腰部に托し足尖にて支へ、上體を泰然安舒ならしむ可し。

第二章 執筆法

【執筆】 執筆は習字上最も大切なる事にて最初より一定の良法に慣れざる時は終に改む可からざるに至る。執筆法には雙鉤、單鉤の二法あり。筆管を保持する高低につきては筆の種類あり、鋒に長短あり管にも長短あるにより且つ流義を異にするによりて一定する能はざれど、眞書には筆管の下より三分の一の高さ、行草書は三分の二の高さを普通とす。雙鉤法は筆管に人指と中指とを掛くる持方にして、單鉤法は人指のみを掛くる持方也。雙鉤法は嚴重、最も腕法を發揮す可く大字を

成すに適す。單鈎法は優柔、十分に力を加ふる能はざれど、細字又は假名文字を書くには之を適せりとす。四何れにせよ執筆の主眼とする處は、指頭に力を集めて浅く筆管を持し、掌中を空虚にするを要す。「執筆無三定法一要、使二虚而寬」といふは此の謂也、「虚掌實指」といふも亦此謂也。要は全身の力を筆鋒に集むるにある也。腕法には懸腕、提腕、枕腕の三法あり。懸腕は右手の腕を水平に懸け、左手は其掌を以て左方乳下の邊にて机端を軽く壓ふる也。提腕は右手の肘を軽く側面に觸腕を提し運用を自在ならしむ。此時肘の側面に固着し易き憂ありとす。枕腕は右手の手首の動脈部を左手の手甲に枕せしめ、左手の腕をして机縁と並行せしめ、決して肘を左上方に突き出さざるやうにする也。懸腕は大字に適し提腕は中字に適し枕腕は細字に適す。さ

れど主とす可きは懸腕也。提腕殊に枕腕は腕の働き自在ならずして、流麗奔放の致を成し難しとす。

【書法の二大要件】書に大切なるは形と筆と也、形は文字の格好にて、格好を作るを結體と稱す。筆は一畫に要する筆づかひ即ち筆鋒也。形と筆とは相俟つ可く、其の一を缺く可からず。文字の眼に與ふる美感は其の形のととのへるより来る、されど書の眞生命たる妙趣風韻は、腕の運用によりて其筆鋒の中に發揮せらるるものとす。其いづれにも偏す可からざる也。文字を組立つる骨格は種種の點畫也、一點一畫の運筆を研究するは、大工が家を建てんとして其柱たり梁たる用材を吟味し製作すると等しく、習字の第一歩也。

【點畫】點は文字の根本也。すべての筆鋒は皆點の變化也。點の種類は種々あれど、其筆

づかひの法は一定し一點の中筆勢の三轉するを常とす。點に次ぎて文字の要素なるは横畫と豎畫也。横畫は即ち一也、この裏には筆鋒に要する諸精神悉く含まる。古人の「一貫傳神」と稱せる所以也。四横畫にても豎畫にても、首尾相應するを必要とす。首は筆の起點にして即ち起筆也。尾は筆を收むる異にして即ち止筆也。所謂「一點一畫皆有三轉」の如く、點畫の中に筆勢三度變化するを法とす。起筆に藏鋒と露骨とあり、藏鋒は、筆鋒を外に現はさざるを云ひ、露骨は外に現はすを云ふ。點と畫との外に必要なは勾及び掠磔と也。

【勾及び掠磔】勾には其種類頗る多し。掲筆()、縦戈()、横戈()、其他ノしつて等也。外に掠及び磔と稱するあり、掠()はまた撇と云ひ拂過也、磔()は波筆と稱し掠點也。

一波一拂有三轉といふものもこの書法也。

【結體】點畫を骨格とし、筆鋒を其動作とすれば、字形は其姿勢也。結體の方法は文字によつて異なる。されど其原理は同一也、文字の輪廓は概れ三角状のもの、圓形のもの、方形のもの、三種となる。其の點畫の有する自然の性質を失はずして、各字に適當なる輪廓を作るを必要とす。この輪廓を整ふる方法を對位法と稱す。旁に應じて偏を作るが如き、此の用意に外ならず。四されど其の輪廓を整へたるのみにては尙不可也。其の内容に於て、畫と畫、點と點、及び點と畫との間隔について廣狹疎密を整へ、字格の鈞合を均齊にせざる可からず。これを分位法と稱す。古來稱する處の間架、結構の法と云へるは、前者は分位法にして、後者は對位法に外ならず。

【結體法三十五則】結體法中、最も必要なる

は次の如し。(一)天覆、上が下を覆ふ也、「宇」
 「客」の如し。(二)地載、下が上を載する也。
 「至」「直」の如し。(三)讓横、中間に横畫のあ
 り上にのせ下に覆ふ也、「素」「吾」の如し。
 (四)讓直、中に縦畫ありて貫く、「市」「甲」の
 如し。(五)懸針、前者の縦畫を下に引き出す
 也、「巾」「申」の如し。(六)左右平、左右平等
 に並立する也、「頓」「體」の如し。(七)三並、
 中間を正して左右拱揖する也、「樹」「衛」の如
 し。(八)上平、偏の短かきは上を平にする也。
 「坡」「鳴」の如し。(九)下平、傍の短きは下を
 平にする也、「和」「細」の如し。(一〇)不齊、
 上下共に強ひて齊しくするを要せざる也、
 「川」「却」の如し。(一一)上下、上寬して下窄
 き也、「替」「雷」の如し。(一二)上下、前者と
 反對也、「禹」「界」の如し。(一三)上下占、上
 下を寬にして中間を窄くする也、「驚」「驚」の

如し。(一四)左占、左を寬く右を窄くする也、
 「歡」「數」の如し。(一五)右占、前者と反對也、
 「壤」「騰」の如し。(一六)自畫、各點畫間の粗
 密を均しくする也、「壽」「畫」の如し。(一七)
 錯綜、錯綜せる點畫の相犯碍せざるやう作る
 也、「繁」「擊」の如し。(一八)重撇、兩撇の平
 行するを忌む、「及」「反」の如し。(一九)減波、
 波筆の重れる時其一を減する也、「炎」「食」の
 如し。(二〇)屈波、扁に波筆ありて畫の多き
 時之れを屈して體をつくる也。「頗」「効」の如
 し。(二一)聯撇、三撇の相連る時各異勢をと
 らしむる也。「形」「彥」の如し。(二二)屈撇、
 也の法長きを尙べど扁に壓せらるゝ時は之を
 屈して短くする也、「飯」「偏」の如し。(二三)
 俯仰勾、勾の上下にある時相俯仰するん如く
 作る也、「冠」「宅」の如し。(二四)減勾、勾の
 重る時又は並ぶ時何れか一方を減する也、

「射」「羨」の如し。(二五)長方、文字の長きは
 強ひて之を短くせず、四方正しく寬かに作る
 也、「耳」「舟」の如し。(二六)短方、短き方形
 のものは兩肩を開き兩脚を窄くす、「曲」「而」
 の如し。(二七)正方、正方といへども稍長か
 る可く兩角は平なる可し。下を窄くする可か
 らざる也、「固」「岡」の如し。(二八)斜、斜な
 るものは殊に中心を失はざるを要す、「勿」
 「母」の如し。(二九)重、同一文字が二箇重り
 て成れるものは、下を大ならしむる也、「昌」
 「圭」の如し。(三〇)併、同字が二箇並びて成
 れるものは旁必らず大なる可し、「竹」「林」の
 如し。(三一)堆、前二者を併せたるもの也、
 前二者の方法を應用するを可とす、「晶」「磊」
 の如し。(三二)向、左右相向ふ也、「好」「舒」
 の如し。(三三)背、左右相背ける也、しかも
 脈絡相通す可く、上窄く下廣き也、「兆」「孔」

の如し。(三四)排點、點の列べる也、左右端
 は相向ひて八字形をなし、中間の二點は隨ひ
 て起き、各點皆變化ある可し。「然」「點」の如
 し。(三五)鳥脚、勾排點の二點を包み起筆に
 向つて撥する也、「鳥」「焉」の如し。

第三章 運筆法

【運筆法】 運筆は即ち筆の運び方也。文字の
 死活は唯運筆の如何にかゝる。「一點一畫皆有
 三轉」と云ひ「一波一拂又有三折」と云ひ、又
 は「如錐沙畫如印印泥」と云ふ、皆運筆の精神
 を道破せる也。點畫波拂皆筋骨を藏して潑瀾
 として生動するの致なくんば、唯線と點とを
 組合せたる死字に過ぎず。運筆には一字の
 中にも自ら緩急あるを要す。一般的に云へば
 行、草書は運筆の輕急を要すれども、楷書は
 寧ろ遲緩なるを要す。筆鋒には正偏あるを

要す。正鋒は常に斜左上方に向ふものとす。而して運筆正に始まれば必ず正に終るを要す。四筆鋒には強弱あるを要す。一般に筆の出と止めとは強くす可きものなれど、必らずしも然らず。

第四章 永字八法

【寫字八病と永字八法】 運筆法宜しきを得ざる時は、文字の病弊を生ず。古人此病弊を數へて八とせり。(一)牛頭、點の稜角だしく牛頭の如き形狀となれるもの。(二)鼠尾、撇の力無く細くひきて鼠の尾の如きもの。(三)狐尾、磔の本と末とが太く力なく狐の尾の如きもの。(四)蜂腰、乙が運筆の中途にて力を失ひ其轉回の蜂腰の如く細れるもの。(五)竹節畫の起筆と止筆とのみ力が入り過ぎて稜角の竹節の如く目立てるもの。(六)鶴膝、勾法



に於て止筆が餘り屈り過ぎ稜角が尖りて鶴膝の如くなれるもの。(七)稜角、フの折り曲る角が尖り過ぎたるもの。(八)折木及び柴擔、横畫に於て、前者は折木の唯直きが如く筆に意なきもの、後者は柴等を擔へるが如く兩端が重く下りたるもの也。一字萬字に通ず、永字に八法ありて、あらゆる筆法をつくせりと云ふ。八法とは。側(イ)勑(ロ)弩(ハ)趨(ニ)策(ホ)掠(ヘ)啄(ト)磔(チ)の八也。側は點の祖也。勑は横畫の祖也、弩は豎畫の祖也、趨は勾の祖也、策は短畫の祖也、掠は撇の祖也、啄は短撇の祖也、磔は捺點の祖也。(終)

漢文

第一編 總論

【語及び語の位置】 名詞—事物の名稱として用ふる語也。牛薰性度溫和の牛薰、出書室の書室の如し。主語となる者は句の上位に在り、客語となるものは動詞の下位に置く。代名詞—名詞に代へて用ふる語也、我汝此彼の如し、位置名詞に等し。動詞—事物の動作を云ひ表はす語也。讀書の讀、花散の散の如し。他動の時、名詞代名詞の上に置き、自動の時、名詞代名詞の下に置く。四形容詞—煙烟鬱勃の鬱勃、颯々春風の颯々の如し。名詞の上に位し修飾をなす者、名詞の下に位し説明語となり動詞の働きをなす者等あり。五助動詞—動詞、形容詞、副詞、名詞、代名詞

或は助動詞の上に位し、夫等の語を輔くる語也。受身の助動詞は、被、見、所、爲等也、見殺被放逐等の如し。使役の助動詞は、使、令、遣、教、俾、等也。令、和、使、生徒講讀漢文等也。可能の助動詞は、令、謂、賢の可、當、悟、之の當等の如し。打消の助動詞は、不、好、無、忘、之、不、無の如し。時の助動詞は、我將遊學東京の將、僕未服湯藥の未の如し。推量の助動詞は、應、雨の應の如し。反語の助動詞は、君盍勉強の盍の如し。指定命令の助動詞は、在教室可靜肅の可、人宜守信義の宜の如し。以上は何れも動詞の上にある場合也。兄弟之子猶子也の猶は名詞の上にあるものにして、莫善于此の莫は形容詞の上にあるもの也。無不從の無は、助動詞の上に更に重ねられたるもの也。六助詞—前置詞と後置詞と二あり。前置詞の、于、

乎、於(ニ、ヲ、オイテ)等は名詞、代名詞の上に位するを通則とす。歩兵整列於練兵場志于學の如し。(衣食於奔走の如く、名詞代名詞の下におくを顛倒法と稱す)、自、從、由、與、於(ヨリ)等は皆上に置く、後置置は名詞代名詞の下に置くを通則とす。者、也(ハ)、乎(ヨ)、之(ノ)等これ也。人者萬物之靈長の者、之の如し。副詞―動詞の上に位して其動作を限定するもの、獨爲之、能走の獨、能の如し。名詞の下に位して説明語となり動詞の働きをなす者、病甚、走速の甚、速の如し。形容詞の上に位して其動作を限定するもの、頗美、至大の頗、至の如し。接續詞の上に位して下の語を修飾するもの、啞然而笑の啞然の如し。助動詞の上に位して下の語を修飾する者、確乎不動の確乎の如し。前置詞の上に位して比較をなす者、無_レ急於水火の急の如

し。接續詞―名詞、代名詞又は名詞と代名詞との中間に位するもの、筆與_レ紙の與の如し。形容詞と形容詞との中間に位するもの、精且密の且の如し。副詞と動詞との中間に位するもの、啞然而笑の而の如し。動詞と動詞との中間に位するもの、怒與_レ喜の與の如し。動詞と助動詞との中間に位するもの、在下忍與_レ不忍之間の與の如し。名詞と動詞との中間に位するもの、幼而學_レ之の而の如し。名詞と助動詞との中間に位するもの、賢而被_レ辱_レ於_レ下_レの而の如し。感動詞―感動したる時發する語也、概れ他語の上に用ふれども、中間又は下に用ふるものも稀ならず、嗚呼、於戲、嗟、嘻、惡、吁、唉、噫の如し。終詞―文又は語句の尾に置き種々の意を含ませて其語を終ふるもの也。斷定の場合、也、矣、爾、耳、已、而已等。疑問の場合、乎、歟、

邪、耶等。咏嘆の場合、夫、哉、矣乎。指示の場合、諸、焉、旃、云、云爾等。

【國語と漢文との句法の比較】 國語と一致せる漢文―名詞と名詞との連結。日本東京、或は日本之東京(日本の東京)、名詞と自動詞との連結、雲晴(雲晴る又は雪の晴る、雲が晴る、雲は晴る、雲も晴る。總て、テニオハは日本語特有の語法なれば漢文に於ては用ひられざる也。以下皆之に準ず。)形容詞と名詞との連結。月明(月は明か)、美花(美しき花)、副詞と動詞との連結、莞爾笑(莞爾として笑ふ)、永住(永く住む)。副詞と形容詞と又名詞との連結、甚美花(甚だ美しき花)、最下等人(最も下等なる人)。國語と一致せざる漢文―名詞と他動詞との連結、讀書(書を讀む)。名詞と補語を要する自動詞との連結、蠶爲_レ蛾(蠶蛾と爲る)登山(山に登る)。助動詞と動詞との連

結、使_レ行(行か使む)。助動詞を二個重ねて動詞と連結するもの、莫_レ不_レ戰(戰はざる莫し)助動詞と副詞及び動詞との連結、固所_レ欲或は所_レ固_レ欲(固より欲する所)、名詞と名詞とを接續するもの、海與_レ山(海と山と)。

【助動詞と副詞との連結】 助動詞と副詞との連結は、互に上になると下になると二つの場合ありて、訓を同じうし意味を異にす。例へば不_レ獨行と獨不行の如し。不_レ獨行は獨では行かぬ也。同行者があらば行かんといふ意也。獨不行は、他人は皆行くも自分一人は止まりて行かぬと云ふ意也。不_レ空費と空不_レ費、無_レ甚不可と甚無_レ不可、非_レ必來と必非_レ來と、皆同様に意味を異にす。

【兩性を有する語】 副詞と助動詞とを兼ねたる者―當又は應(まさに―べし)、宜(よろしく―べし)、須(すべからく―べし)、未(いまだ

一す、盍(なんぞ)ざる、將及び丈(まさに)一す、猶(なほ)とし。助詞と助動詞とを兼ねたるもの。使、遣、令、教、俾(して)一せしむ。代名詞と終詞とを兼ねたるもの、諸(これを)か、や。

【反語】副詞の反語となれるもの一豈、密、何、奚、故、烏、安、惡、焉、將、其、奈何。助動詞の反語となれるもの一可。助動詞と副詞と連結して反語となれるもの一敢不、獨不。助動詞と接續詞と連結して反語となれるもの一不亦、無乃。終詞の反語となれるもの一乎。

【附説、漢字の構成と轉借】象形文字一物體の形狀を描きて文字とせるもの、日、月、牛、馬、鳥の如し。指事文字一數量方向等一定の成形なきものに對し符標を以て之を表はし、其符標を文字となせるもの。一、二、三、

上、下、左、右の如し。會意文字一二個の文字を合せて其意を取るもの。明、信の如し。諧聲文字一形狀則ち象形指事より成れる文字と、聲を表見する文字とを合せて成せる文字、江、河の如し。轉注一已成の文字の義を轉じ他の意味となせるもの。樂、度、の如し。(樂はがく、即ち音樂也、それよりタノシムといふ意に轉じ、ラクとなる。度はド、尺度也、それよりハカルといふ意に轉じタクとなる。)假借一ただ音聲ありて夫に相當する文字無きにより、已成の文字を假りて之を用ふる也。焉の如し。

第一編

【鶴】鶴一コフノトリ也。乳一乳を與ふる事。爲常一常は平常也、平常のならばはしと爲す也。火一火事也。霎時一少しの間、盤旋一輪

を描きて舞ふ也。鬱勃一滿ち漲れる貌。焚死一焚は、やくと訓ず、やけ死ぬる貌。衡一口にくはふる也。啣も又同じ。合は全く口中に入るを云ふ。

【牛薰性度】性度一性は性質、度は度量。案上一案は机也、堆紙一堆は積み上げる也。灰燼一燼はもえくづ也。刻苦一骨を折る事。痛惜一痛は非常にといふ意。非常に惜しむ貌。毆打一うつ也。不措一しきりにくりかへすを云ふ。復は再び也、くりかへす意あり、亦はもまた也、同様の事物を列擧する場合に用ふ、又は單に接續する場合に用ふ。

【加藤清正】駕一會意文字、馬に加はる也、則ち乗る也。轉じて乗り物の意ともなる。船間一舟中の室也。胡孫一猿也。中華の人猿を以て胡の孫と爲せる也。厠一便所也。縱横一たてよ、即ち滅茶苦茶にといふ意也。塗抹

一塗は塗る也、抹は消す也。視一氣をつけて見る也、見は自然に物の目に映り見ゆる也。看は見まもる也。觀は見渡す也。見物する也。覽は目をとめて見る也。閱は歴覽也。瞻は仰ぎ見る也。囑は心をとめてよく見る也。觀は見字と同じく、稍其意味重し、鑒は手本として見る也。瞥はちらりと見る也。

【鰐魚】人畜一人間や、畜類を云ふ。水濱一濱は水の淺き處を云ふ。連鎖一くさりなをいふ。便一輒と同じくたやすく又は直ちにの意を有す。乃はその意也。即はすぐ、又はとりもなほさず也。則是前後因果の關係をあらはす。【菅公忠愛】歷事一代々に事へる也。隨事獻替一事は事件也、獻はすむる。替はすつる也、事件の起るに従つて、可きをすむ、否しきを替つる也。匡救一匡は正す也、救はすくふ也、惡きを正し、危きをたすくる也。被

【配】遠隔不便の地に遣らるゝ也。託ニ文墨ニ自遣一文墨は文章詩歌等を作るをいふ。託はこ
 とよする也。遣は悶を遣るにて。即ち氣を晴
 す事也。謫居一罪を被つて居る也。無聊一頼
 む可きなく、心細くツマナイ事也。重陽一
 菊の節句也。即ち陰曆の九月九日。斷腸一腸
 を斷つ也。悲む事甚だしきを云ふ。恩賜一聖
 上の賜也。【日】人の口に出していふを云ふ。
 云も略曰に同じけれど、口に出しては云はぬ
 也。言はものを言ふ也、謂は噂する也、稱は
 ほめていふ也、道は條理をいふ也。
 【光】燈燭一何れもともし火也。燭はかざり
 火、松明等にも用ひらる。【仍】それでもと
 いふ意也。尙ほ加ふる意也、猶ほ國語のヌラ
 といふ意也、又比較する場合にも用ひらる。
 者一形のなきものを形のある如く考へて之を
 指し示す也、物は品物即ち物體也。

【空屋怪物】空屋一空はむなしき也、即ちあ
 きや。里人一其土地の人。自負一負はたのむ
 何物かたのむ可きものを有し、之を背に負ひ
 て自らのたのむ也。以爲一考ふる也。竟然一足
 音の響也。回視一視まはす也。鬼一幽霊也、
 日本のオニに非ず。交々一互に交るゝ也。
 敢一思ひ切つて。哄然一大口を開きて笑ふ貌。
 【有】無に對する語也、又所有の意に用ふ。
 在は存在也、ある場所に在るを云ふ。
 【空中巨人】晚眺一夕方の景色を眺むる也。
 雲樹蒼茫一雲樹は雲と樹と也、蒼は青き也、
 茫はボンヤリ也。蒼茫は暮色を云ふ。夕陽繞
 獸一獸は山の峰也、夕陽即ち夕日の山の峰に
 かくるゝを云ふ。指顧間一指はゆびさす、顧
 はふりかへる、すぐそこにと云ふ意也。巨人
 一巨は大也、大きな人といふ意、轉じて傑出せ
 る人の形容に用ふ。巨挺一挺は大なる杖也、

跟踪一跟はをどる、踏ははしる、うろたへて
 走り出す状をいふ。數武一武は一步の半を云
 ふ。頓一ふと氣がつく也。【普】一般に廣く
 といふ意、薄も同意味、遍は落ちなくゆきわ
 たる也、周は公平に厚薄無くゆきわたる也、
 決、冷、は何れも水のしみわたる如く、あまれ
 くゆきわたる也。

【遣金】募一廣く求むる也、多くの中より呼
 び招くを云ふ。私一人に知らせず獨りにて處
 置する也。一瞥一チラリと一目見る也。法規
 一法律に同じ。他日一後の日。【既】つくる
 也、事のつき去りしをあらはす副詞、已はや
 や意味輕し。

【服部中佐】先鋒一眞直にすゝむ兵。後拒一
 あとおさへ即ちしんがり也。雨注一雨の如く
 注ぐ。切齒一はぎしりする事。靡一音キ、さ
 しまれく也。奠一まつる也。四海一世界。歎

稱一ほめたゝへる也。【進】進ム一退の反對也。上
 若くは前にすゝむを云ふ。前は後に對す、前
 に出づる也、薦は祭時神に供物をなすをいふ
 より轉じて、人に進上する時にも、人を推舉
 する時にも用ひらる。差は食物をすゝむる意
 なれど、後には進の意にも轉用せらる、漸は
 何時となく次第にすゝむ也。

【太陽】對徑一さしわたし也。一粟一一粒の
 粟。【計】數をはかる也、轉じて一般にはか
 るの意となる、籌も計と同じ、略は經營の意あ
 り、謀は物事をおもひはかる也、圖も亦同じ、
 議は諸人相はかる也、量は秤にてはかる、度は
 ものさしにてはかる、權ははかりにてはかる
 の意なれど、何れも種々の意味に轉用せらる。

【東海道鐵道】不待言一改めていふまでも
 なき也。形勝一景色のよき土地也。俯一仰古今一
 一俯はうつむく、仰はあふぐ、俯仰はものを思

ふ貌也。棍攪一棍はとりわくる也、攪は取りあつむる也。感慨一慨はなげく也。枚舉一記して數へあぐる也。隧道一トンネル也。太一太は甚に同じ。右顧左盼一顧はかへり見る、盼も亦ふりむくといふ意。山丘回互一丘は小山也、回互は喰違ひて出入せる也。荒涼一荒れはてとさびしき事。雍熙之化一雍はやはらぐ、熙は穩か、化は治といふが如し、太平の御世といふ意也。迅一極めてはやきを云ふ、速と略意味を同じうし一層強き也、速は遅の反對也、早は晩の反對にして主として時にいふ、夙も早と略同じく未明の意也。疾は迅の如し、捷は手ばやき也、敏はさとくすばやきにて、人の性質に用ふ、駛は馬行の速かなるに用ふ。

【發民】一等級は位也、四字合せて上下何段を降す也、階級は位也、四字合せて上下何段

にも分れたるを云ふ也。習俗一習慣風俗。文野一文明野蠻也。懸隔一かけへだて也。一斑一豹の毛皮の、一つの斑を見て全體の知らるるより出づ、一斑全豹を知るといふ。舉ぐ(アカル)一措と對し、下にあるものを上にあぐる也。上は下に對し。總て上にあぐる也、扛は重きものをあぐる也。昂は自らつきあがる也、翹も亦略同じ、騰は勢よくあがる也、颺は風に吹きあげらるる也。

【上杉景勝】一黃門一中納言の唐名也。支那にて禁裏の門の闔を黃に塗りしより、禁門を黃門と稱し、轉じて禁門に出入し得る官人の或る者を黃門と呼べり、而して其官は日本の中納言にあたるより云ふ。豪邁一豪も邁もすぐれたる也。鹵簿一行列也。肅々然一靜かに嚴なる狀。左右侍御一おそばつきの者。駢聲一いびきの聲也。巾幗一頭巾也。一揮一ひと

ふり也。點頭一お辭儀也。臥一座の反對にて自體を横にするを云ふ。偃に曲りふす也、伏は地に面腹をつけて平にふす也。俯は仰の反對にしてうつむく也。

【沈黙會】一謝一謝絶也、ことわる也。領一承知する也。崇一もと貴く高きをいふ、轉じて積もりて高くなる即ち盛り上がるといふ意となる。滿は一ぱいになる也。缺くるなき也。實は虚の反對にして中に隙なきを云ふ。盈は虧の反對、次第に滿ち行く也、充は端々までゆきわたりたるを云ふ。泛一たゞよふ也、即ち水のまゝに浮ぶ也。浮は沈の反對にして水の上にある也。

【家原卜傳】一擊刺一人を刺し殺す也、轉じて劍術槍術の意となる。箕裘一家傳といふ意、良き弓師の子は必ず箕を作るを學び、良き鍛冶の子は必ず裘(皮衣)を作るを學ぶといふ

より出づ。周遊一めぐりあそぶ也。猙獰一猙は猛獸の名、惡恐しきといふ也。鬚髯一鬚は口ひげ。髯は願ひげ也。武伎一伎はわざ、武術といふに等し。睥睨一にらみつくる也。吾子一君といふに等し。作色一顔色を變ふる也。徒手一から手也。遙一遠き狀也、遠は甚だ遠く、前の知れぬ也、遙は奥深くの意。

【植物大小】一滿孟須樹一之に現存してなる植物の最も古いものである。有加利樹一此種類は夥しい、濠洲ではこの大森林がある。

【護良親王】一引決一自害。意一心中におもふ也。搜索一捜はさがす、索はもとむる也。索一さがしもとむる也、求は一般に用ひらる、要は待ちまうけてもとむる也、繖も略同じ。需は必要としてもとむる也。干はをかすといふ意。無理にもとむる也。

【彈丸授祕曲】一棲隱一かたれすむ也。悶癢一

悶はもだゆる、癢はかゆき、苛々としてツレツタキ意也。嘯咏一聲をつくりて歌ふ也。向來—これまで也。■永—永久也、時間的の語に用ふ。長は短に對し、有形無形空間時間すべてに用ふ。

【宮城】 ■雲霄—霄は空也。燼—焼けたる也。瑞雲—めでたき雲也。細莎落如茵—莎は砂也、茵は敷物也。■雙鬘—鬘引ける貌。■羅—網にかゝるより來りたる語也、捕はるゝの意。嬰は觸れさはる也、掛と桂とは針などに物をかけおくをいふ、懸はかゝり下れる意、係はつながる意、架はかけ渡す也。

【海水浴】 ■散策—散步と同じ。登頓勞—高きに登るの骨折也。病憊—憊はつかると也。瘴氣—毒氣也。浮拍—浮は體を浮ぶる也、拍は波を拍つ也、游泳の事。宣暢—二字共にのぶる也。■借—普通にいふかり也。假は一時間

年有—何年と久しき間。祟患—重病といふ意。諦聽—耳を傾け一生懸命に聞く。異—異なるを認むる也。自經—自ら首を縊りて死ぬる也。多方—方々の意。牀下—牀は床也、床の下。■竊—獸類を穴に埋める也。請—願ひ。

【東京】 朕—昔は上天子より下庶民に至る迄自稱代名詞として用ひたる言葉なりしが、秦の始皇の時詔して天子一人の自稱と定む。親裁—天皇親ら裁き給ふ事。億兆—澤山の民の意、萬民と云ふに同じ。綏撫—治むる意。高陵—高い丘。大鎮—大國のおさへ。平衍—平たくなぞへになつて居る、周郭—外ぐるわ。塵肆—塵は店に同じ、肆も店也。綿亘—綿は連る意、亘はわたる、長く續くを云ふ。墟—廢れたる趾。輪奐—結構といふが如し、かまへ。開—閉の反對、一般に多く用ひらる。啓も略開に同じ、無形のものに多く用ひらる。披は擴ぐると

に合せにかりる也。

【格言】 ■過則勿憚改—論語の句、子曰君子不重則不威、學不固、主忠信、無友不如己者、過則勿憚改、過而不改是謂過矣—同じく論語の句。矣—斷定の終詞、別に意味なし、矣乎と連なれば咏嘆の終詞となる。■改—物の悪き所足らぬ所を直しあらたむる也、更も略同じ、革は從來の事を全然變じて新に事を立つる也、倏は心の悪心の非をあらたむる也。

【吾嬌國】 ■東夷—東方に居る蕃賊。■副—日本武尊に代つて軍令を掌るもの。■斧鉞—ナノ、マサカリと讀む、敵を殲す爲めの器具。■燧を鑽る—燧石を磨り合はすこと。■覆沒—ひつくりかへること。■草莽—生ひ茂つた草といふこと。■東陲—東の方の邊鄙の地といふこと。■種樹—種はうる也。木をうる事。

【義猴】 ■種樹—種はうる也。木をうる事。

いふ意あり、發はあばく也、藏めたるをとり出す意あり、轉用さるゝ場合多し。

第四編

【重盛忠孝】 ■群小彙進—群小は小人輩の群、彙進は彙り進む也。■觀視—隙を視ふ也。反唇—噤する事、罵り斥くる意を含む。■擲背之決—擲は向ふ、背はそむく、其何れに就くかの決斷。■霹威—怒を収む。■且—姑と同じくマアとか當分とかの意、暫は久の反對なれど時間制限無し、須臾、頃刻、少之等は何れも片時といふ程の意。

【記標工】 ■省視—見舞ふ事。奕々—ピカ／＼光る。■羸餘—羸はかつと訓じ、得るの意、儲け残り也。■沈痾—久しき持病。■讓—人を先にする也、禪は位、國などをゆづり渡す事。遜は他にゆづりて己は其場をのがるゝ事。

【細川藤孝歌學】 縉紳—縉は挿也、紳は大帶也、大帶に笏を挿む也、貴人をいふ、即ち社會的地位高き人々といふ意。玄旨—玄は奥深き意、旨は義、即ち奥義也。棄—すて去る也、捨より意味強し、捨は用の反對にして單に用に立てざるを云ふ、委は人に任せて顧みざる也、損は外にもち出す事、廢はすたれしめ破り去る事。

【望琵琶湖】 渺瀰—天—渺瀰ははるかにはる也、粘はつく也。突怒—突怒は突出たる貌、偃蹇は臥したる貌。風概—風景也、概はおもむき也。躡—躡は石段也、石段を登る事。躡—躡は石段也、石段を登る事。躡—躡は石段也、石段を登る事。躡—躡は石段也、石段を登る事。躡—躡は石段也、石段を登る事。

【廣瀨中佐傳】 瞠若—驚き畏れ目を開きてみつむる貌。規詞—規は竊に見る也、詞は探る也。輕軻—輕き舟。咫尺—咫は八寸、尺は一尺。

一旦きるをいふ。殲は一人も残さず殺しつぐす事、殲は次第に少くなりてつくる事也。

【嵐山】 榑牙—岩角の出入せる狀。嫵媚—かたちの美しき事。佳—好と同じ、されど好は俗語に多く佳は雅語として用ひらる、好は醜の反對也、善は惡の反對、良はすぐれてよき意、美は美麗の意、吉は凶の反對にして可は否の反對也、克は勝也支配する意あり、能は可能の意を有す。

【自警十條】 戰々兢々—戰々は畏ること兢兢は戒め謹む也。操守—しかと守る也。警—鋭く人の注意を促す也、驚かして氣をつけしむる也、戒は或る事柄につきて常に專一に氣をつくる也、誠は言葉を以て戒むる也。

【重矩寛厚】 童豎—子供の子使。瞰—其亡—亡は不在、瞰は覗き見る事。伺問—問は隙也、隙をうかがふ事。屏居—屏き居る即ち引き

【高徳題櫻樹】 悵悵—悵も悵もうらむ也。要—駕—駕は天皇の御乗物、要は遮りとむる事。且日—翌朝也。知—深く知ること也。識は見知る事、面識識別の如し、知は深淺を以てはかり、識は博陋を以て區別す。

【湊川之戰】 王師—天皇の軍。族隸—一族郎黨。鞬刺—さしちがへる也。訣飲—訣は別る也、再び來らざるの意味をふくめり。餘瀝—餘れるしたとり也。盡—つくとも訓ず、悉より稍其意輕し、悉は一つも残らざる也、悉、歇、殲、殲、何れも皆つく也、歇は止みつくにて、こもる也。壞—こぼる也、破は破損也、敗は失敗也、傷は疵つきやぶる也、弊は古くなりてやぶる也。

【山内一豊妻】 筮仕—始めて仕官するを云ふ、昔は仕官するに先ち吉凶を占へる也。簡馬—簡は閑也、しらべる也、馬揃をいふ。獄翁—妻の父を云ふ。釋褐—褐は卑しき者の服也、之を釋く、即ち出世の義也。始—始は名詞動詞副詞に用ふ、終の反對也、初は副詞又は接續的副詞としてのみ用ふ、最初の義也、創は新に始むる也、肇は事の起りを云ふ、開け始まるの意、甫は大きくなりはじむるの意也。

【記那須野與一事】 宮娃—娃は美人、即ち宮仕へせる美人也。寓目—目を寄する也。枝梧—くひ違ひ逆らふ也。凝視—見つむる也。自裁—自殺。颯然—物の飛ぶ形容。若—假定の副詞也、如、役、儻、倘、皆等し。

【宇治川先登】 河上―上はまたほとりと訓ず、邊と同義也、乞焉者―焉はこれと訓じてもよし、之と同じ程の意味、汝記焉の如し。久瀾―久し振り也。救解―口添して申譯する事。聾厖―やましき事。晒―小聲にて笑ふ也、哄又は嘘は大聲にて笑ふ也、嗤は嘲り笑ふ也、莞はにこやかに笑ふの意也、笑は一般に用ふ。給―口を以てだます也、欺は或る手段を以てあざむく也、瞞は人をくらます也、誕は大言、みだりに誇張するを云ふ、誑はたぶらかしまどはすを云ふ。

【下岐蘇川記】 瘡痛―瘡は馬病んで進む能はざる也、瘡は人病んで行く能はざる也、疲勞甚だしきを云ふ。崎嶇―路の險しき事。轡轡―轡は孤立せる山、轡は絶壁をなせる山、綏々―綏々―絲の垂るゝが如き貌。大小斧劈荷葉披麻―いづれも畫家の手法の稱、斧劈は嚴面の

われ目、荷葉披麻は蓮の葉の如く、麻の亂れたるが如き嚴面の裂隙の線也。一餉時―一度飯を食ふ時間。倅惚―忙しき事。千金之子―富貴の家の子。至―或場所に來る也、此より彼迄移る也、到は到著也、臻は集る至り也、造は造道の如く進み至る也、詣は言に従ひ旨に従ふにて或る目的を遂げんが爲に至る也、抵は到と同じ。泪羅之鬼―泪羅は川の名、鬼は幽麗、楚の屈原忠誠の容れられざるを悲みて泪羅に投ぜるを云ふ。

【乳雀】 乳雀―巢立たぬ子雀也、乳兒乳虎等の如し。徹旦―旦は朝、徹はとほす、夜あかした事。首實―白狀する事也、自首の如し。燕室―燕はやすむ也、寢室の意。縱―自由にさする事也、免はまぬかれしむる也、許は夫にてよしとする也、允はまことと信じてゆるす也、宥は格別の思召を以てゆるす也、恕

は思ひやりてゆるす也、宥は心を寛大にしてゆるす也、聽はきくとどくる也、釋は解きゆるす也。

【幼烈女阿富傳】 僦―人屋―他の屋を借りて住む也。學家―家を擧げて即ち家内中也、擧國の如し。自抬―白狀也、自首也。市尹―町奉行。異同―同の字意味輕し、差異といふ程の意也。怒―喜の反對、廣く用ふ、忿は心中にていかる也、憤はかくてはならじとふるひ起る也、即ち感激より發するいかり也、恚は恨み怒る也、愠は忿に似て意味輕く、ムツトする也、瞋は眼をいからす也。

【日本刀説】 聲色―耳目を喜ばしむるものないうふ、表情に用ふる場合もあり。列聖―代々の天皇也、聖とは智徳兼備を稱す。攘―斥けはらふ也、攘夷の如し、掃は箒にてはらふ事、拂はハタキにてはらふやうに少許宛はら

ふ事、被は神に祈りて災難惡魔などをばらひたる事也。禦―禦はふせぎ止むるを云ふ。防は此方に來らぬ様に用心する也、防及び禦は受動的なれど、扞及び拒は自動的也。

【蒙古來】 賊―ときの聲也。羶血―汚れたる血也、即ち夷の血也。擬―比ぶる也、まねる也。斫―斧などにて斬り落す事に用ふ、切はきり割り切り破る也、剪はハサミきる事、暫は首をきるに用ふ、截は刀などにて裁ち切る也。

【皇國史略序】 淳朴―淳は純也、まじりけなき也、朴はすなほ也。百家―老子莊子其他支那春秋時代に輩出せる學者哲人を云ふ。百爾―種々也。鑿至駢集―集まり來り群り至る也。津梁―津はわたし也、梁は橋也、即ちみちびきの意。未―開―未は此の場合否定の助動詞也。事の未だ起らずしてやがて起らんとするをあらはすもの、即ち當分の否定也、不は純

然たる否定也、弗は古書に多し不と同義とす、非は是の反にして然らずと否定する語也、たとへば非識は識れるのではないといふ意にて不有識は知識が無い又は識者が無いといふ意也。

【月瀬記勝】 彌望彌然 彌望は目の及ぶ限り也、彌然に白きをいふ。熱鬧 繁劇にしてさわがしき也。依約 ほかにかすかなるを云ふ、依稀も亦同じ。蒼勃 盛なる状也。開謝 一開は花の開く也、謝は花の梢を辭する也、即ち散る也。望前 望は十五夜の事也、其前といふ意。離披 咲き亂れたる状也。揮灑 詩歌又は繪等を筆に上するを云ふ。小奚 召使也。倒蘸 蘸はひたす也、倒影を水にうつすをいふ。望 高き所又は遠き所をのぞみ見る事也、臨は見下す事、莅も然り、これ等は動作にのみ用ふるに非ず。

【長政直言】 行臺 假本管也、行宮行在所なり。推輓 推は後より推す也、輓は前より輓く也、推薦せる事也。佛然 一ムツとせる状。無爲 何事も無き事、若くは何事をもなさざる事。按定 按べ定むる也。舍 止めにする也、置は其處に久しく在らしむる也、寔は一時おく也。慚 口惜しといふ意味を含む、愧は見苦しとしてはづる也、恥は心を主として心にはづる事、羞は何となく面はづかしく思ふ也、歸女子のはづるは是也、辱は外聞悪しきを云ふ、榮の反對也、赧は赤面する事、耻及び愧は、心にわるればづる也。

【士規十則】 五倫 君臣父子夫婦兄弟朋友をいふ、倫はすぢみち也。宇内 宇宙の間、世界といふ意。萬葉 萬世と同じ、中葉末葉などといふ。倚 高きものとして重んずる也、尊は卑の反對、徳位などの高きをうやまひ重

んずる也、貴は賤の反對、金錢寶玉などをめづらしとしてたふとぶ也、崇はあがむるなり、神佛等に用ふ。

第三編

【保元の亂】 篋 箱也。緩急 緩の字意味輕し變事のあるをいふ。老羸 老いて弱くなりたる事。芟鋤 芟は草を刈る也、鋤も然り、討伐の意に用ふ、年少負氣 年少くして勇氣を恃む也。糾合 糾は纏り合する也、集むるをいふ。邀擊 邀は要也、むかへる又もとめると訓ず、要擊に同じ。懼懼 兩字共におそる也。門扇 門の扉也。鼓諫 鼓は太鼓を鳴らす也、諫は騒ぐ也。驚 一般に用ふ、駭はビックリする也、驚よりも意強し、愕は不意うちなどに逢ひてハツとどろく也。據 根據としてよる也、寄はより託する也、依

は衣が人による如く添ひて離れぬ事、縁は關連する也、因は原因する所を云ふ、由はより來る所即ち事のすぢあひを云ふ、馮及び凭るはもたれかゝる事也、倚はより添ふ事、頼はたのみよる事也。

【沼津十六景記】 扈從 扈は尾也、後に從ふ也。蛋舍 蛋は海人也、海人の家。天々灼々 天はかほよしと訓ず、美しき事、灼々は花の盛なる貌、詩經周南篇の、桃之夭々又灼々其華とあるより出づ。絳霞翠雲 絳は赤色、翠は綠色、赤き霞に綠の雲といふ意也。別墅 墅はよりどころと訓ず、別荘の事。卓立 卓は高き也、高く立つを云ふ。驀然 驀は良き馬也、轉じて極めて速き事の形容となる。離々 然 親まざる貌也。斗牛之間 斗は北斗星、牛は牽牛星、其兩つの星の間也。絡繹 相連りて絶えざる貌也。居然 居乍らといふ意。柳

暗花明—柳の蔭暗く花の色鮮也といふ義なり、一般に春の風物の形容として用ひらる。

【怡—和といふ意にて、喜ぶよりも意味軽く、なだやかにたのしむ也、喜は怒に對す、欣はとびたつばかりによるこぶ也、歡は(權、驪にも作る) 悲又は憂に對す、たのしむといふ意強し、悦は心によるこぶ事、うれしく感ずる事也、懌も然り、慶は目出度しとしてよろこび祝ふ事也。

【菊地容齋傳】—穎悟—穎は銳也、悟はさとり也。致仕—仕を致す也、祿を戴きて仕官するを云ふ。參互—あれこれと互に交へ合はして其長を取る事也。拮据—あくせくと骨折る事。器用—器物用具といふ事。樵蘇—きこり草苻り也。荆榛—荆はいげら、榛ははんの木也、募化—化は佛德に化する也、轉じて信心者其者を云ふ、信心者より募集する也。瑩域—

墓地也。享年—享はうくる也、天よりうけたる年、定命といふに同じ。等倫—等しき倫也、平凡の徒也。眼照—千春—眼は眼識也、千春は千秋と同じく、千年又は千載の義、つまり永遠といふ事也。考稽—共にかんがふる也、考はかんがへ正す事、穆はかんがへ明むる事、勘は吟味する事也。振—ふり動かす事也、揮はふり去る事也。

【下筑後河】—行客—旅人也。鳴張—鳴は梟也、梟賊などといふに同じ、張は翼を張る也。西睡—睡はほとり也、邊卑なる地方を云ふ。龍種—天子の御子也、銜は口中に入る也、枚を銜むは敵を忍ぶ軍勢の聲を出さざらんが爲也。目背—背はまなじり也。奔湍—奔ははしる、湍は急流也。儔侶—儔はたぐひ侶はとも也、棣萼未—肯向—北風—棣萼はすもとの花也、北風は寒き冬の風也、棣萼は暖きに

咲く、未だ北風に向つて咲くを肯ぜざる也。乃父—乃はなんぢ也、乃の父といふ意也。弔—死者は後より慰め問ふ事也。鬼雄—英雄の靈也。還—出發地にかへる也、去不還の如し、歸は本に歸る也、反はうちかへす事、後もどりする事也、回はめぐりかへる也、復は往復の復にして來りし道を再びかへる也。乃—汝の古語也、爾、而、若、皆同一意味也、汝を最も普通とす、

【刀工表忠碑】—戡定—戡は刺す又は殺すと訓す、殺伐を加へて天下を平定する也。蒙塵—塵を蒙るの義即ち天子の居を失ひ難儀をうけるるを云ふ。鍛冶—鍛はきたへる也、冶は熔かす也。聖衷—衷は心中也、天皇の御胸中といふ意。拔萃—萃はあつまる也、あつまれるを抜く、即ち多くの中より選擇する也。苟安恬嬉—苟めの安きを偷み、恬として嬉める

也、恬は安靜の狀。嗚呼—於戲と共に句の頭に置く嗟嘆するさま也、稱美悲哀等あらゆる場合に發す、噫又は嘻は哀傷に用ひ、語句の上にも下にも用ひらる。吁は嗚呼より軽く、噫は少しく怒を帶び、唉は嘲を帶ぶ。遭—逢と同じ、會の如く集りてあふには非ず、唯兩方より出合ふ也、遇は期せずしてあふ也、又待遇の意に用ひらる。値はめぐりあふ也、合は離の反對にて一つになる也、觀及び邊は見合ふ也。

【武田上杉論】—勇悍—勇はいさましき也、悍ははやる釋、趨は足を高く擧げて歩む事、捷ははやき事、四字合して勇氣ありて強き事となる。先王—前代の帝王。闔國—闔は門の扉也、國內即ち全國といふ意也。斷—様爲—文—様は朴也、飾り氣爲き也、文はあや也、かざり也。飾り氣なき處をけづり去りて派手にす

る也。日ニシ月ニス厲ス—滓シはヤきバ也、かたクすト訓ズ、厲ハ砥也、とグと訓ず、月日と共に兵を鍊るをいふ也。以還—以來と同じ。不恤—心配せぬ事。牙旗—大將の旗。噬搏—噬はかむ、搏はうつ、相争ふ也。饒使—唐頃よりの俗語、物を假にゆるす時に用ふ。孫吳—孫氏吳起、支那の二大兵法家。

【送島村某序】 羊腸—紆りめぐる事。雉堞—雉ハ牆の長さを數ふる言葉、堞ハ土の垣、二字にて牆といふ事となる。城郭—郭ハ廓と同じ、城の外廓也。僕指—指を屈めて數ふる也。清淑之氣—淑ハ清湛也、清くすめる氣といふ意。暗隱—怒る貌。森布—森ハ木の多き貌、布ハ布帛の經を並ぶるに本づく、しくと訓ず、二字にて澤山あるといふ意となる。矯矯—矯ハ矯と同じ、竊また竊に作る、飛ぶ貌也、右文之治—文を以て治むる政道也、右文は氏

に對する也、咕暉—二字共に多言の意也。海寓—寓ハ宇の古字、海内の意。奠安—奠ハ定也、平定を云ふ。盱食—盱ハ晚也、晚く食するにて政務によく勉むるを云ふ。帷幄—二字何れも幕也、陣中を云ふ。干城—干ハ楯、國のまもりとなるを云ふ也。莫—無に似て其意重く俗語にては命令及び疑問の助動詞としてのみ用ひらる、無ハ有の反對也、靡微も略無と同じ、毋と勿とは禁止の助動詞也。

【林子平畫像記】 轆轤困頓—轆ハ坎也、困ハ困也、世に遇はざる也、困はくるしむ、頓ハ挫けるの意。忌諱—忌み避く可き事柄。眷々—眷ハかへりみる也。食頃—一食の間といふ意。阨塞—阨ハ地勢の迫りて狭き處、塞ハふさがる也。獲—我物になりたる也、捕獲の如し、得ハ手に入りたる也、利益になりたる也、得失の如し。

【長嶺子紀事】

楚も清き也、サツパリとせる也。萃—聚と同じ、散の反對にて一般的也、集ハ鳥が木に集りとなりたる意にて、方々より寄り來りあつまる也、擗ハ一所に簇りあつまる也、鍾ハ美を鍾む等の如く、無形の物に用ひ、輯ハよせあつひるにして、彙ハ分類してあつむる也、輳、湊ハ四方より一點にあつまり來る也。

【雜說示塾生】

聲の形容、ハツキリと澄みとほる也、希賢—賢ならん事を欲する也。怕—一般的に用ひらる、恐ハ未來の事を氣づかひおそる也、懼も亦然り、敬みおそる也、畏ハ甚だじく敬みおそる也、怖も畏の如くおそれこはがる也、惶ハおそれあはつる、惕ハおそれ驚く也、驚ハ何れせおれ伏す也。

【貓狗說】

厲—つよくはげしき事。善柔便辟

善ハ好、人前のよき事、柔ハ弱くやさしき事、便辟は起居のうやうやしき事、表面の媚を云ふ。餽—食之餘也。出入—開闔—開はれや、闔ハ門、人家の奥深き處に出入するを云ふ。捕—追ひかけてとらふ也、囚ハとらへて牢獄中へ入れおく也、俘ハとりこ也、軍にて獲たるものをいふ、虜ハ生捕也、俘虜何れも元來名詞にして人にのみ用ふ、擒ハ同じとりこにし生捕にする意なれど動詞にして必ずしも人にのみ用ひざる也。

【述懷】

髮々—髮や絲の如きものがふさくしたる貌である。皓々—白いことをかふたものである。

【白石新井先生傳】

諱—本名也、いみ名といふは古實名を呼ぶを無禮として忌みたるを以て也。字—支那風に倣ひて實名の外につけたる名也。岐巖—岐ハ峻、巖は高、すぐれたる

を云ふ。傲儼—倜儼とも書く、卓異の貌也。晏如—晏は安、如は助字、ユツタリとせる貌也。唱和—唱はとなへる、和は夫れに和する也。衰世—徳の衰へたる世也。儉薄—二字共にうすき也、人情のうすきを云ふ。回路—顔回季路、何れも孔子の高第。起草—草は稿と同じく文章の下書の事也。儲副—儲はまうけ也。副はそへ也、豫めまうけそへ置くといふ意にて世嗣をいふ、儲貳儲君も同じ。諷諫—うちつけに云はずに諫むる也、諷はあてこするといふ意、忠臣之諫、君有五義、五從、其諷諫乎といふ語あり。采地—領地又は知行地。稱旨—思召にかなふ也。縹緲—むつきと訓ず、子を負ふ衣也。頡頏—飛上を頡と云ひ飛下を頏と云ふ、相上下する事也。杜門謝客—門を杜ぎ客を謝絶する也。適—偶と同じ全く意外なりしを形容する副詞なれど、丁度よくといふ

意を有す、會は多く時間に用ふ。蔡之厄—陳蔡は地名、厄はくるしみ、孔子が諫蔡に於て困苦せし故事に出づ。
 【題三商相如奉璧圖】—悻悻—怒る貌也。志奮—於義—義を正しき也、筋道の正しきを云ふ。眇然—眇は小さき貌。完—全より其意重く一つの缺點なきを云ふ、全は全體也、すべてをいふ。
 【商相如論】—王霸—王は天下の主、霸は諸侯の主。懲慝—おだて勸めること。欽慕—欽はうやまふ、慕はしたふ也。瑕瑜—瑕は、玉の疵也、瑜は玉の光彩也。掩—おさへかくす事也、蓋は器物の蓋也、蓋の器にかぶさりたるが如く一げいに蓋ふ也、蔽は草の生へかぶさりたるが如きを云ふ、覆は上より距離をへだてるかぶさりたる也。

第四編

【送學生之東京】—清晨—清新なる晨といふ意
 一輒—のまゝ其處でといふこと。定省—温清—禮記の曲禮にある辭で定は夜父母の安定に寝られるを見届けること、省は朝の機嫌を伺ひ温は冬季暖かに清は夏父母を涼しくすること。
 【書二松學舍生徒寫真圖背】—松學舍とは三島毅先生の家塾の名。老顏枯瘦—年老いた顔が枯木の如く瘦せ骨立つてゐるとの事。
 【義家學兵法】—嘗て—或時といふこと、關白あづかり申すの義で支那の前漢の霍光の故事(萬機巨細皆關白之)から出た言葉である、古天皇をたすけて太政を執つた所の最高の官名で大抵は太故大臣以下三大臣の中で其れを兼官したのである。七書とは—孫子、吳子、

司馬法、黃石三略、六韜、尉繚子、唐太宗李衛公問對等である。
 【犀川之戰】—復—ふたゝびと訓む、またもやといふ意也。壘—とりで也本城の外の要所にかりに築いてある小さい城をいふ、砦とも書く也。采樵者—薪を采る者。回伏—忍ばせる兵士。麾下—戲下とも書く大將の旗のことで、轉じて大將の傍近く仕へるものを麾下といふ。五黃換—換はあうと訓み兩腋を明けた袍で袖をくり寄せたる様にしたもの六塵扇—軍扇の事。木駛—駛ははしると訓む走るが如くに水勢の速いことをいふ六湍中—湍は急流をいふ。
 【題不議庵擊機山圖】—肅々—靜かにとの意。千兵—千を以て算する大軍をいふ。大牙—牙は大將の陣頭に建てる旗のこと。流星光底—流星の光の如き疾きにたとへたこと。

【米田某】牌は盾である楯の字も書く。噤—つぐむと訓む口を閉ぢて聲を發せずといふことの意味す。

【竹廬記】廬—いほり也。涯溪—二字何れも水の限り即ち岸を云ふ。歎然—はあき足らぬ也。詆誹—詆はそしめる也、誹はおしのける也。擇—殆ど選と同じくすぐる事、簡は單にぬきとる也、撰は書を作り文を作る事。

【伯牙絕絃】嘒々乎—高き貌。美哉—歎美の言葉。聽—注意して聲を耳に受くる也、自動的—、聞は聲の耳に入る也、他動的也。

【下和泣玉】玉璞—璞は未だ磨かざる玉也。相—相地相人など用ひ、外形を以て内容をはかる也。哭—聲をあげて泣く也。貞士—貞は正也。士は男子の美稱也。郤立—郤はしりぞくる也、四邊を排しよりぞげ凜然として立つ也。間行—間はひそか也、ひそかに行く也。

【送末廣子儉之歐洲序】諧—言葉を以て戯る也。艷稱—美稱と同じ。式微—詩に式微とあるに出づ、式は助詞也、あゝといふ意也、二字熟しておとろへの意となる。諤—正直の言也、阿る事なく飽迄直言する也。誇大—夸はおごるとよむ。華言實無き也。通曉—通は通じる曉はさとる也。牧氏之術—牧はやしなふ也、牛を養ふの義也、牧民は民をやしなふ也。堅—高よりおつる也、落と大差なし、墮はくづれおつる也、隕はふみはづしておつる也。之—如及び適と等しく—的ありてゆく也、行は止に對しある事也、往は來に對し前方にゆく事也、征は行に似、徂は往の如し、古書に多し、逝はゆき去る也、往の如く還に對せず。

【信陵君救御郢】肆然—肆はほしいまゝ也。冠蓋相望—使者の頻りに至るを云ふ。蓋は車の蓋也。夫人—夫は扶夫、夫を扶けて家を治むる者也、貴人の妻に用ふ、妻は棲也、夫と共に棲むの意也。責—義務又は道理を以てせむる也、攻は一方よりせめつくる也、諂と讓とは詞を以てせむる也、譴は上よりきびしく責むる也。

【論信陵君】離駢—齒の相近きより、餘裕のなきに用ふ、小人細行の貌也、觀—過知仁—

【景春】大丈夫之冠—冠は元服して始めて冠をつくる也。不能淫—淫は心を亂す也、おぼる也。不能移—移は行を易ふる也。移—遷徒と同じく處を易ふる也、遷は高きより低きにうつる意あり、徒は彼方此方に所を定めずうつるの意あり、寫は多く文字をうつすに用ひ、摹はうつし眞似るに用ふ。

【鴻門之會】爲—壽—健康を祝する也。屠酒—屠はさかづき也。秋毫—すこしも。固—固く定れる也、素は下地也、元は元始也、本は根本也、原は源也、各々少しづつ意味を異にする。倍—筋道を違ふる也、乖はそむきもどる也、背は背合せなり、うらがへる也、向の反對也、負の恩徳にそむく也、反は反逆也、叛は反より輕し、畔は叛と同じく用ふ。

【吳越之爭】恨望—うらむ事。嗚衣—馬の革の囊。幘胃—幘は覆ふ也、覆面の帽子也。賜

【劍死】自殺を仰せつけられて死する也。喟然
 一喟は太息也、なげく貌。布衣一賤民也、不
 祥一祥はさいはひ也、即ち不吉の事。費一財
 寶。牴一牴牛。【果圓】果圓きもの方なるものな
 どのつみかさなる也。重及び疊は幾重にもた
 みかさなる也、層は一段一段と高くかさなる
 也、申はかさね云ふ也、複は單に對す再びす
 る事即ち二重になる也。

【孟嘗君】庶弟一庶は妾腹也。納一質一質は信
 也、人を信じさせる爲に物を以て大に委ぬる
 也、質即ちこれ也。【追】追一追ひかけゆく也、
 又追罰の如く時間にも用ふ、逐は追ひ退くる
 也、趁はあちこちと逐ひかくること也。

【讀孟嘗君傳】南面一人主は南面するを常と
 す、王霸となるを云ふ也、北面は即ち臣事也。
 【耳】そのみにてやむ事をあらはせる助辭
 也。爾も亦同じく、此二つは語の終のつまる

氣味あり、ソレキリといふ程の意を附けて見
 るをよしとす、已と而已とは、不得已して已
 む意あり。

【張良】留候一留といふ地に封を受けたから
 留候といふ、【謝病】病氣といつて職を辭す
 こと。【辟穀】辟はしりぞくると訓む家で物
 粒を一切食はなかつたのである則ち穀を辟く
 は人間の事を棄てるといふ意。【布位之極】
 人臣たるもの至極との意。

【赤穂遺臣復讐】者宿一年高き事に熟せるも
 のをいふ。唧之唧は心中に恨む也。典故一
 典例故實也。銅一禁錮などと熟す、一室に囚
 へ置く事。鬪狼一喧嘩狼藉也。計一死の報知。
 介弟一唯一人の弟。外親一母方の親戚。輪一
 いたすと訓す、出物。茗宴一茗は茶也、茶會
 也。誠一首を斬る也。膊送一くやみとして物
 を贈る也。【送】迎の反對也、人を送るの如

し、されど又送り届くる意に用ふ。贈は品物
 を送る也、貽も然り、唯給ふの意を含めり、遺
 はおくりて後にのこす也、餽は進物にする也、
 贈、貽、遺、餽は相轉じて同じ様に用ひたる
 例少からず、饋は食物を贈る也。

【雜說】伯樂一秦人、馬を相するに名あり、
 轉じて馬の相者をいふ。千里馬一日千里を
 走る馬と云ふ意、駿馬を云ふ。策一馬の鞭也。
 槽檻一馬の食器。【飽】食物に云ふ、腹一杯
 也、嫌は満足する也。(或はあきたらずと訓じ
 て満足せぬ意にも用ふ。)壓と厭とは、共にい
 やになる税食りて満足するを云ふ。

【烈士喜劍碑】物論一世間の評判、微言一お
 となしの言葉也。魚膾數鱗一膾は細くきりた
 る肉、鱗は肉片、夷然一平然也、夷もたひら
 と訓す。初之之は置字、意味無し、初とい
 ふよりも穩かに緩く云ふ言葉つき也。中行之

士一中庸の行を中行と云ふ。嗜々一嗜々に同
 じやかましく云ひはやす也。金石文字一鐘又
 は碑記にす文章也。荏苒一月日の長びく事。
 六秩一秩は十年也、六十歳を云ふ。

【習說】趨舍一趨は進み赴く也、舍は退き止
 まる也、即ち進退といふに同じ、夫子一支那
 にて大夫以上の身分の人を稱す、轉じて長者
 先生などの意となる。迨一其壯也一也は語又
 は句の間にある感動詞にして餘裕を存する爲
 に用ひらる。【嬉】あそびたのしむ也、娛は
 なぐさみたのしむ、樂は苦の反對にて心にた
 のしむ、愉は心をたのしましむる也。

【勸學】盛年一さかりの年也、青年也。晨一
 朝也。【愆】心得ちがひ也、過は思ひもよら
 ずなせる不調法也。延一延は長くのびる也、
 伸は屈に對し眞直になる也、舒は卷に對す、
 展は開きのはす也、宣は遍くひろむる也、述

は前にありし事をうけつぎてのぶる也、陳は條件をならべたてつたつられのぶる也、叙は物事を長く順序をつけてのぶる也。

第五編

【留侯論】操—心の守とする所也。卒然—不意也。圯上—圯は土橋也。刀鋸鼎鑊—刀はかたな。鋸はのこぎり、鼎はかなへ(罪人を煮る也)、鑊はかま、皆人を罪する道具也、責育—孟賁、夏育、二人共に古の力士也。鮮腍—鮮は少也、腍は善也厚也、善き事厚き事が少なき也、ソツケ無いとか薄情とかの意也。肉祖—祖はかたぬぐ也、かたぬぎて肉を露はす也。魁梧—壯大の意也。試—才を試み學を試みる等前以てためす也、驗は其效驗をこころみ察する也。待—一般に用ふ、あしらふ意にも用ふ、俟は跡よりするものをまつ也、須は

必要としてまつ也。

【踰三碓氷嶺過淺間山記】摺簇—あつまりむらがる也。大威—威はかなしみ也。紛華—紛紛たる繁華、裙屐子弟—裙はもすそ、屐は木履、もすそ長く木履を穿ける柔弱の子弟也。啓行—行を啓く也、旅立つ事。歎—誠也愛也、心と心とが打解ける事也。盤饌—盤は食物を載せる臺、饌は獻立の揃つた食物也、摸捉—摸は手でさぐる也、捉はとらへる也。蹠降—蹠はのぼる、降はくだる也。礮—石ころの多き山也。翳翳—覆ひかぶさる様にしげる事。空入—空は聚也。あつまり入る也。筆簪—笄也、簪は竹の皮といふ字。一炊頃—一度飯を炊ぐ程の間也。倩—しばらく雇ふ也。平楚—木草の生えたる平地也。客—籠—岳蓮—富士山也、四時雲を戴き八面玲瓏として白蓮の開けるが如きを以て云ふ、芙蓉峰といふに似たり。

【政宗偵羅馬】

幣物—贈物也。漂蕩—流れただよふ也。無恙—恙は蟲の名也、其旅人此蟲の爲に苦しめられしより轉じて、無恙を無事とせる也。回翰—翰は書翰、即ち返事也。偵—伺及び候と略同じく様子をつかひ察する也、覲及び覲は、ねらひつかぐ也、またのぞき見るの意味をも有す。應—應對也、單に返事をするは答也、對は改まりて答ふる也、目上の人に用ふ。

【遊鞍馬山記】

祭酒—學政を司る官を云ふ、禮記より出でたる語也。祇候—道度—度を卑とし右を尊とす。道左に祇候するは卑者の禮也。前呵—お先を拂ふ也。益々—盛なる貌。疎樾—兩木交りて陰をなせるを樾といふ、まばらなる木蔭也。蕭遠—さびしく静かなる心持を意味す。爽塏—爽はさわやか也、塏は高燥の地也。厥—其の古字也。十圍—十人して

抱へる程の周圍也。冥助—目に見えぬ助也、即ち神佛等の加護を云ふ。默佑—黙して佑くるにて、前者と其意同じ。管子—齊の名宰相管仲也。成蹊—桃李不言下自成蹊より出づ、蹊は徑と同じ、徳有る者の自ら人の欽慕する所となるを言ふ也。疋練—一疋の練絹也。助—力を添ふる也、佐及び佑もたすくと訓ず、左右の手の身をたすくる如くたすくる也、神の助は示に従ひて祐となる、扶は手をそへて助くる也、授はすくひたすくる也、輔は車輻の外れぬやうにする木を云ひ、はさきたすくる也、翼はたすけそだつる也、彌は過失なきやうになすくる也、相は常に注意してたすくる也。貴船祠—下の社、奥の社の二つ有つて今では官幣中社である京都府山城國愛宕郡にあり、半空—なかぞら。

【峨嵋山月歌】 峨嵋蜀中にある山の名で峨山の餘脈が三百餘里に連り眉州城内に通つて三峰を突起する、その三峰の對峙してなる狀は宛ら峨眉のやうであるとの意を含めたるもの

【航海朱印船】 不羈—羈は馬をつなぐ、轉じて物事に拘束されぬを不羈と云ふ。檢束—とりしまる也、曠世—曠は空也、世に空しき也、即ち稀也。眼孔之窄—識見の小なる事。炤々—照と同字、明に見る貌也。受—授の反對也、承はうけひく事也。

【富川攪勝】 驚悍—驚は熊鷹也、悍ははやる也。奔蕩—奔ははしる也、蕩の大水の形容也。劍戟—戟は戈に岐のあるもの也。攪—とりまとむる也、取は捨の反對、すてぬ也。執はシツカリと持ちて離さぬ也、操は執より軽く正しく持つ事、轉じて節操操守などの如くみさの意となる、採は采と同じくとり用ふる

意あり、把は執又は操の義に近く持に類す、とりにぎる也、乘も略同一也。

【朋黨論】 朋黨—相投じ相結びたる也、俗にいふ仲間也。賊害—賊はそれる也、きずつける也。忠信—已を盡すを忠と云ひ、僞らざるを信と云ふ。共濟—濟は亦すくふと訓じ、濟民等と熟す。聰明—耳疾きを聰と云ひ、目敏きを明と云ふ。鑑—かごみに照して見る也。亡—亡はうしなふ也、滅はつくる也、火の燃えつくるが如きを云ふ。事—用向を以てつかへ奉るにて、大切につかふる也。

【孔子】 儂、偃、俯—皆低頭する也、儂は最も軽く、一偃につき、俯最も鄭重—。餽粥—餽は粥のかたきを云ふ。俎豆—木にて造れる四脚の机、祭祀の時供物を載する臺也。委吏—委積倉廩の吏也、出納を司る。司織吏—織は畜を思の編する所、四書の一也。習ふ—くりかへして或る事に達せんとする也、倣は或物の通にまねる也、效、倣も然り、慣は事になる也。擬はひきくらべてなぞらふる也。容—容量ありて物を容るゝ物入は出の反對、主に自動詞として用ふ納は外の物をなさめ入るゝにて、主に他動詞として用ふ。刪—不用の部分かを去る也、削も刪と似、添の反對也。剝ははぎとるとも訓す。

つなぐ杭也、牧畜を主る官を云ふ。喪家之狗—喪はうしなふ也、家をうしなひたる狗、即ち宿無犬也。書社地—昔支那に於ては民家二十戸を一里とし一里毎に一社を置き其里人の名を書きとめ於ける也。刪—古詩三千—孔子民間の詩三千篇の中より、風教の助となる可きものを選びて三百五篇を得、これ詩經也、易—支那哲學の最古のもの也、韋編—なめし革也、書物の革のとが絲也、春秋—魯(國名)の歴史也、孔子の編する處、孔子歴史をも勸善懲惡の具とし、一字を以て褒貶す。春秋の正經の中に加へらるゝ所以也。(詩書易禮記春秋、これを五經と云ふ。獲麟—魯の哀公西狩して麟を獲、麟は神獸也、而も時に明王無くして獲らる、孔子深く感ずる處あり、獲麟に至つて筆を止む。六藝—禮樂射御書數、これ也、周代最も之を重んず。中庸—孔子の孫子

【陪永州崔使君遊譙南池序】 委會—落ち合ふ水也、委はまがりくれる貌。泓然—水の淀む貌。芡—おにげす也。菱—ひし也。梅—楠。船涵—つゝみひたす也。澹澹—たゞよはす也。宅以肆—宅は寛大、肆は自由。碧落—天也。羽觴—盃也、獻酬飛ぶが如き故に云ふ。匏竹—笛の義也、厚錫—錫は賜、厚き賜といふ意也。傾頰—憔悴と同じ、やつれおとらふる也。

趨起—足進まんとして進まざる也、ためらふ也。熙然—樂む貌。婆然舞ふ貌也。恒—殆ど常と同じ。されど常に意に更に不易の義を加へるたるが如きもの也、常は變に對す、平常也、尋常也、經は權(かりにと訓す)に對す、常久不變の意あり、正しきものはかはらざれば也、毎は事ごとにも也。當歡而戚の四字は此全文の總意がそれである、世の賢者等相して、山紫水明の靜寂な境に遊ぶことは、此上もない歡樂にして當然歡ぶべき事なり、然るに筆者は却つて其によつて一種の悲しみを味ふ。表面には此會の再びなしがたきを歎じてゐるも暗に不遇の詩人屈原を以て自ら比自分の不遇を託してゐるが動もすれば此種の感慨を漏した文は多く怨嗟の聲となり厭世の色彩を帯び憤恨諷刺の劣分子を交へものなるも此文には少しも其點がないのは畢竟作者の

性格の高い所なり讀者大に習ふべきことなり。
 四(附記)六朝の文—六朝とは東晉以來宋、梁齊陳などの時代をいふ、此頃の文章は常に文章に對句をとり華麗な文字を駢べて喜んだので文章の外形上實に美しく華やかでありたるも内容思想は殆んど見るに足るものかなくなりき。屈原—楚の懷王の臣にして王の信任篤く命をうけて憲令を造つたが、士大夫其方を妬み其原稿を奪つて其上懷王に讒言せりそれが爲め懷王は屈原を疎じたり其後頃王の時再び事を以て王の怒りに觸れ江南に謫せられたり此序に湘中に趨起し顛顛の客とならんやとあるは此邊から來たるなり。(終)

日本地理

第一章 領土

【領土】 我が大日本帝國は、本州、四國、九州、北海道の四大島と其他多數の小島よりなりしが明治二十七八年の日清戰役に勝つて臺灣及び澎湖島を清國より取り、同三十七八年の日露戰役の結果樺太の南半分を露國より取りたり。同四十三年に至り朝鮮を併合して其領土領みに廣まり遂に大陸の一部分をもすむるに至りたり、其他支那の關東州を年限を定めて租借し東滿洲及東蒙古に於ける地方にも特別なる利權を占むることとなれり、近年に至り獨逸と戦ひ支那膠洲灣にある青島を占領してより其の附近の山東省地方にも勢力を振ひ尙ほ獨逸領の東洋諸島をも占領して威勢は

遂に南洋方面に至るまで普及するに至れり。大日本帝國の位置は、亞細亞大陸の東岸に沿ひ太平洋の西北に斜列せる島々の中央には本州、四國、九州、北海道の四大島と其他の群島とあり南方九州の西南には琉球諸島及び臺灣あり南方遙かにバシ海峡によつて米領フィリッピン諸島に對し九州の北方は支那大陸より朝鮮半島突出し本州と露亞領の沿海州と共に日本海を圍めり北海道の北には樺太島あり其東北には千島諸島羅列し又本州の南方には小笠原群島あり其他島々の周圍には無数の島嶼ありて恰も碁石を撒き散らしたるが如し。面積はもと二萬七千萬里餘なりしも日清、日露の兩戰役を経て其の領俄かに増し現今にては舊の面積に比し約二倍となれり、今主なる部分の面積を列舉せば
 本州 一萬四千四百九十二方里餘

四國 千五十一方里餘
九州 二千三百十一方里餘
北海道(本島) 五千五十六方里餘
臺灣 二千三百十八方里餘
樺太(南半分) 二千二百方里餘
朝鮮 一萬四千四十七方里餘
其他諸島 千三百四十六方里餘
合計 四萬三千二十一方里餘

然して我領土の東端は東經五十六度三十二分
西端東經百十九度十八分南端北緯二十一度四
十五分北端北緯五十度五十六分なり。海岸
線の長さは樺太及び朝鮮を除き七千四百三十
三里半にして面積との比頗る大なり是れ我國
の發展上大に注意を要す、海岸に接せる海面
を領海と稱す、領海の範圍は一定せず我國に
ては海岸より三哩までを慣用し來れり。

【地方區劃】 自然的地理的に之を分つ時は、
樺太、千島、北海道本道、本州、四國、九州、
琉球、臺灣、朝鮮等となる、なほ本州を奥羽
地方、中部地方、信越地方、中國等に分つた
普通とす。北海道、本州、四國、九州には
府廳別の外に國別行はる、國別は昔時は實際
行政區域として用ゐられしものなれど、今は
殆ど其實を失ひて意味無きに近く、畿内八道
と云ふが如きも北海道を除く外は唯歴史上の
遺物に過ぎず。朝鮮は在來の習慣により十三
道に區別し、總督府を以て之を治む。

第二章 海岸(主なる岬、港灣)

【樺太(西岸より)】 能登呂半島—西能登呂岬—
亞庭灣—中知床岬—知床半島—多來加灣—北
知床岬—海馬島。

【北海道(西岸より)】 宗谷岬(宗谷海峽を隔て

て西能登呂岬に相對す) —禮文島—利尻島—
小樽港—積丹岬—奥尻島—白神岬—函館港—
惠山岬—内浦(噴火灣)—繪鞆岬—室蘭港—襟
裳岬—釧路港—厚岸灣—花吹半島—納沙布岬
—根室港—野付岬—根室海峽—知床岬—知床
半島。

【千島(南方より)】 國尻島—擇捉島—得撫島—
新知島—計吐夷島—羅處和島—松輪島—捨子
子丹島—加亞連子丹島—溫爾古丹島—幌筵島
—占寺島—アライト島(千島海峽を隔て、露
領勘察加に對す)其他大小島數多あり、全列
島すべて三十一島あり。

【本州日本海沿岸】 津輕海峽—津輕半島(平館
海峽を隔て、下北半島と相對し、津輕灣を抱
き、灣中に突出せる夏泊崎と青森灣を擁す)
—青森港—男鹿半島—入道岬—飛鳥—粟生島
—佐渡島—富山灣—處登半島—珠洲崎—七尾

灣—七尾港—敦賀灣—賀敦港—立石岬—若狹
灣—舞鶴灣—舞鶴港—宮津灣—新井崎—境港
—中海—地藏崎—島根半島—月ノ岬—隱岐島
—濱田港—下關—響灘。

【本州太平洋沿岸】 斗南半島(平館海峽を隔て
—津輕半島に對し、夏泊崎と野邊地灣を抱く)
—大湊港—野邊地港—大間崎—尻矢崎—宮古
灣—大船渡—女川灣—牡鹿半島—黒崎—金華
山—石巻灣、石巻港—萩濱港—松島灣—鹽
釜港—鹽屋崎—大洗岬—鹿島浦—犬吠岬—九
十九里濱—大東岬—房總半島—野島崎—洲崎
—館山灣—富津洲—木更津港—東京灣—橫濱
港—三浦半島—橫須賀港—觀音崎—劍崎—相
模灣—伊豆半島—石廊崎—下田港—駿河灣—
江浦灣—清水港—御前崎—遠州灘—渥美半島
—伊良湖崎、渥美灣—知多灣—知多半島—羽
豆岬—伊勢海—阿漕浦、志摩半島—鳥羽灣—

的矢灣—大王崎—御座崎—御座灣—紀伊半島—熊野灘—潮岬—田邊灣—比共岬—和歌浦—田倉岬（加太海峽を隔てて友ヶ島と相對し、友ヶ島は鳴門海峽を隔てて淡路島の生石岬と相對す。

【瀬戸内海沿岸】 大阪灣—境港—大阪港—神戸港—和田岬—須磨浦—明石海峽（淡路島の松尾崎と相對す）—播磨灘—小豆島—家島—豊島—兒島半島—兒島灣—水島灘—鹽飽群島—鞆津—備後灘—向善—院島—生口島—伯方島—大三島—大崎島—蒲刈島—藝象海峽—安藝灘—吳灣—吳港—廣島灣、宇品港—倉橋島—能美島—江田島—嚴島—大島—室積半島—下關海峽—周防灘—徳山灣—厚狹半島—丸龜港

【四國（湖内海沿岸より）】 鳴門海峽—丸龜港—多度津港—燧灘—來島海峽（大島と相對す）—高繩半島—硫黃灘—佐田岬—早鞆瀬戸（九壹岐（東水道を隔てて對馬に對す）—對馬—妙見崎—唐津灣—大門崎—玄海灘—沖の島—博多灣—博多港—鐘崎—若松港—小倉灣—小倉港。

【琉球方面の諸島】 種子島—屋久島—口之島以下の吐噶喇五島—大島以下の奄美諸島—（以下琉球）—沖繩島以下の沖繩諸島—宮古、八重山—二群島よりなる先島諸島。

【臺灣（西海岸より）】 富貴角—東石港—安平港—打狗港—西南岬—南岬—江頭岬—花蓮港—二貂角—基隆。西海岸は澎湖水道を隔てて澎湖諸島に對す。

州の地藏岬と相對す。）—八幡濱—豐後水道—日振島—蹉跎岬—土佐灣—浦戸灣—室戸岬—蒲生田岬—紀伊水道。

【九州（東海岸より）】 門司港（下關海峽を隔てて本州と下關と相對す。）—國東半島（室積半島と相對して、周防灘と硫黃灘とを分つ）—別府灣—佐賀關半島—地藏崎—白杵灣—津久見灣—蒲戸崎—佐伯灣—鶴見岬—日向灘—志布志灣—大隅半島—佐田岬—鹿兒島灣—櫻島—薩摩半島—開門岬—野間崎—吹上の濱—甌島—黑瀬戸（長島と對す）—獅子島—天草島—八代海—宇土半島—三角海峽（大矢野島と相對す）—有明海—島原半島（其南端は天草島と相對す。）—千々岩灣—天草灘—野母崎—彼杵半島—長崎港—大村灣—佐世保港—北松浦半島—平戸海峽—平戸島—五島列島—伊萬里灣—伊萬里灣—鷹島—東松浦半島—壹岐海峽—

に對す）—鎮海灣—南海島—濟州島—珍島—木浦—群山浦—安眠島—淺水灣—豐島—仁川港—江華島—鎮南浦—西朝鮮海（黃海と連る）

第三章 地 勢

【山系】 亞細亞大陸の東岸なる一聯の大山脈の裾の方が海に掩はれ、其頂部を擡げたるがわが日本本土也、此大山脈は、北彎、南彎、琉球彎の三大弧線に分たれ前二者が殆んど國土の大部分を形成す、朝鮮は、長白山系其脊梁をなす。北彎を樺太山系と稱す。樺太の山脈となり、宗谷海峽に切れて、宗谷岬より襟裳岬に貫く蝦夷山系となり、津輕海峽に斷たれ、本州に入つて北上山系、阿武隈山系となり、更に關東山脈となり房總半島となる。南彎は崑崙山系の餘脈にして越後越中の海岸より飛驒山脈、赤石山系、木曾山脈等を成し

木州中部を斜に西南に横切り、鈴鹿山系、紀伊山系となり、四國を横断する四國山系となり、九州の南半を構成する九州山系となる。又本州の西半に於て分脈せし一脈は丹波高原となり中國山系となり九州北半を構成せる筑紫山系となる。琉球を構成せる琉球、臺灣を構成せる臺灣皆一脈の山系也。朝鮮を構成せる長白山脈も亦中央亞細亞より崑崙山系を経て遠く連絡せるものと考へらる。以上その他に次の五大山帯あり、千島火山帯、富士火山帯、霧島火山帯、中央火山帯、日本海沿岸火山帯。千島火山帯は千島列島を形成し北海道本土に入りて西海岸迄貫通す。富士火山帯は越後の海岸より起り本州を横断し伊豆半島をなし、伊豆七島、八丈島、小笠原島、硫黄島等を成して獨領マリアナ群島に至る。霧島火山帯は九州の中央に起り琉球彎の北

側を走り臺灣に至る。中央火山帯は北海道の西岸を縦貫し本州の中央に至りて富士火山帯と交叉し、其西に於て一先づ消え更に西九州に入りて斜に走り肥前の半島に至りて終る。那須火山帯と阿蘇火山帯とに分つを得。日本海沿岸にも若干の火山列る。島海火山脈と名づく。

【北彎及北部の火山帯】樺太山系—樺太全島に平行して縦走し島幅の廣き所にては東西兩山脈に分れて其間に低地を挟む、西海岸遠く南に延びて更に小さき鈴谷山脈を岐ち知床半島の脊梁を成す。著名なる高山無し。蝦夷山系、北海道本島を南北に貫き北見山脈、天鹽山脈、日高山脈、夕張山脈の四條となる。天鹽嶽—ピハイロ嶽—神威嶽—夕張嶽。千島火山帯—チャク嶽(國尻島)—雄阿寒嶽—雌阿寒嶽—石狩嶽—メダブカウスベ—チブタク

シケ(十勝嶽)樽前嶽—マカリヌプリ—有珠嶽—積丹嶽。中央火山帯北海道部。利尻山—駒ヶ嶽—惠山。北上山系—一般に中高の山地にて廣き面積を占むれ共著名なる高山少し。早地峯山—五葉山—金華山。阿武隈山系—一般に高原性の山地にして著しき高山と稱す可きものなし、靈山—八溝山—筑波山—加波山—葦穂山。開東山脈—武藏、上野、信濃、甲斐、相模に跨る一大山地を成す、御荷鉢山—甲武信嶽—平國師嶽—金峰山—大洞山—雲取山—三峯山—武甲山—大嶽山—丹澤山—大山。此餘派南下して三浦半島並に房總半島の丘陵地を作る。鹿野山—清澄山—鋸山。中央火山帯と結ばれて、足尾山塊(岩舟山、太平山等)清水山塊(中ヶ嶽、朝目嶽、平ヶ嶽、八海山等)帝釋山塊(帝釋山、駒ヶ嶽、鬼怒沼山等)朝日飯豊山塊(朝日嶽、飯豊山等)

あり。皆日本北彎山系の分脈とす。中央火山帯—東北部。即ち那須火山脈—恐嶽—八甲田山—巖手山—駒ヶ嶽—栗駒嶽—藏王山—吾妻山—安達太郎山—磐梯山—那須嶽—旭嶽—高原山—日光火山群(男體山、白根山、女峰山、太郎山等)—赤城山—榛名山—妙義山—淺間山—四阿山—白根山—苗場山—御嶽—乗鞍嶽—燒嶽。日本海—岸火山帯。岩木山—森吉山—鳥海山—月山—米山—金北山—彌彦山。富士火山帯。妙高山—燒山—黒姫山—戸隠山—高妻山—飯綱山—赤嶽—硫黄嶽—立科山—富士山—愛鷹山—箱根山—神山—天城山—三原山(大島)—八丈富士(八丈島)—硫黄島。

【南彎及び南部の火山帯】飛驒山脈—越後、越中、信濃、飛驒に跨り其面積の大なる其高峯の群集せる、邦内第一の大地にして、日

本アルプスの稱あり、純粹一條の山脈にあらす。數列に分れて其間に火山を夾む。蓮華山—白馬嶽—杓子嶽—大黒嶽—祖母ヶ嶽—蓮華乘鞍嶽—黒嶽—鷲羽嶽—有明山—燕嶽—大天井山—常念嶽—蝶ヶ嶽—霞ヶ嶽—槍ヶ嶽—穂高嶽—硫黄嶽—劔ヶ嶽—立山—薬師ヶ嶽—笠ヶ嶽—白山(飛騨高原の西境を成す) 赤石山系—甲斐、信濃、駿河、遠江に跨る、日本アルプスの南半と呼ぶ。駒ヶ嶽—鳳凰山—白峯山—赤石山—七面山—身延山—秋葉山。木曾山脈—赤石山系の西に平行して岩質全く異なる山脈にして木曾川の東南岸を構造す、駒ヶ嶽—惠那嶽—鳳來寺山。四鈴鹿山系—越前、若狭、近江、美濃、尾張、伊勢、伊賀に跨る。伊吹山—靈山—三上山—經ヶ峯—御在所嶽—鷲峯山—紀伊山系—伊勢、志摩、大和、紀伊和泉の山地を構成す。大臺原

山—山上山—釋迦ヶ嶽—吉野山—高野山—那智山—金剛山—葛城山。四國山系。劍山—手宮山—瓶森山—石槌山—象頭山。丹波高原—山城、丹波、丹後、但馬、攝津に跨る。比叡山—四明嶽—鞍馬山—愛宕山—比良山—大江山—青葉山—六甲山—麻耶山—由良嶽—中國山系—中國の脊梁を成せる山脈也。書寫山—管山—永山—扇山—池田山—沖山—後山—三國山—大山—船上山—道後山—美古登山—猿政山—三瓶山—刈尾山—寂地山—彌山。筑紫山系—中國山系より續く、九州の西北半部を構成す。天拜山—高良山—春振山—雷山。九州山系—四國山系より續く。九州の南半部を構成す。傾山—戸川嶽—桑原嶽—諸湯山—三方山—内大臣山—石堂山—市房山。中央火山帯の西南部即ち阿蘇火山帯—九州の中央を東北より稍西南に奔る。由分嶽—鶴

見嶽—英彦山—犬ヶ嶽—岩嶽—九重山—大船山—黒嶽—涌蓋山—阿蘇山—高嶽—根子嶽—祖母嶽—温泉嶽—多良嶽。霧島火山帯—阿蘇火山帯より分岐せる如き姿をなし、九州を南へ貫き琉球灣の北側に平行して走る。霧島山—櫻島山—開門嶽。琉球彎及び臺灣彎。琉球彎には著しき高山無し。臺灣には臺灣山系南北に縱走す。雪山(シルビア)—新高山(本邦第一の高山)—關山。北隅に一の火山あり、大屯山これ也。朝鮮。長白山脈—白頭山最も高し。北朝鮮は長白山脈に平行せる低き山脈東西に走る。南朝鮮は脊梁山脈、東偏して南北に連り平に開けたると表朝鮮と、峻しくせまれる裏朝鮮との二部に分たる。脊梁山脈—狼林山—劔山—鐵山—五臺山—金剛山—妙香山—小日山—太白山—德祐山—俗離山—智異山—漢羅山

【平野】 我邦は島國にして山嶽國也。されば大陸の如く廣大なる平野平原を見る能はず。東京平野—東京灣に臨み、武蔵、下總、上野、下野、常陸に跨り、利根川と荒川との流域を含む。濃美平野—伊勢内海を半ば繞りて、尾張、三河、美濃、伊勢に跨り木曾川の流域を含む。大阪平野—大阪灣を圍み、攝津、河内、和泉に跨り淀川の流域を含む。石狩平野—北海道石狩より膽振に互る平野とす。十勝平野—十勝の大部分を占むる平野、臺灣平野—臺灣の西半を占む。仙臺平野—陸前の大部分を占む。熊本平野—肥後の一部を占む。新潟平野—越後の一部分を占む。其他、弘前の小平野、八戸の小平野、秋田酒田の小平野、阿武隈山系に沿へる太平洋岸の細長き平野、東海道沿岸の平野、富山、加賀、福井の小平野、熊本の

小平野、佐賀、久留米の小平野、福岡の小平野等あり、中國及び四國の沿岸地方も又平野をなせり。盆地には、米澤、山形の盆地、會津の盆地、甲府の盆地、川中島の盆地、諏訪の盆地、京都の盆地、琵琶湖沿岸の盆地、奈良の盆地、其他津山、福知山、山口及び人吉の盆地等あり。

【温泉】我國は火山に富み且つ水分に富むを以て温泉頗る多し。其主なるものを縣別として次に掲ぐ。北海道一定山溪(鹽類泉)湯川(酸性泉)登別(硫黄泉)。青森—淺蟲(鹽類泉)酢湯(硫黄泉)大鰐(鹽類泉)碓ヶ關(同上)獄湯(硫黄泉)湯段(鹽類泉)。秋田—大瀧(鹽類泉)櫻湯(硫黄泉)泥湯(酸性泉)。巖手—綱張(鹽類泉)臺ノ湯(同上)繁湯(硫黄泉)。山形—上山(鹽類泉)赤湯(硫黄泉)。宮城—鎌先(鹽類泉)遠刈田(同上)青根(同上)鳴子、鬼首(間

愛媛—道後(單純泉)。大分—別府(鹽類泉)。鐵輪—(酸性泉)。福岡—筑後(含鐵微溫泉)。佐賀—嬉野(炭酸泉)武雄(同上)。長崎—小濱(鹽類泉)温泉嶽(硫黄泉)。熊本—阿蘇枋木(鹽類泉)垂玉(同上)湯ノ谷(酸性泉、炭酸泉)山鹿(硫黄泉)日奈久(炭酸泉)。鹿児島—櫻島、有村(鹽類泉)福山(硫黄泉)霧島(鹽類、硫黄泉)。

【沿海々底の状態】日本群島の亞細亞大陸との間の海は概して淺し。樺太と露領西比利亞沿海州及び臺灣と支那との間は百米に過ぎず。朝鮮半島より支那南部にかけての海深は大抵皆百米を出でず。瀬戸内海、宗谷海峡、東京灣、伊勢内海、天草洋、又根室と國尻との間中國と隱岐との間は同じく淺き海底にて連絡せらる。日本海オホソク海間には三千米を越ゆる箇所あれど、概して千米内外也。

歌泉)。福島—磐城湯本(鹽類泉)土湯(同上)高湯(同上)飯坂(同上)深堀(同上)押立(同上)會津東山(同上)沼尻(硫黄泉)枋木—日光湯元(硫黄泉)鹽原(鹽類泉、炭酸泉)那須(酸性泉)。群馬—伊香保(含鐵鹽類泉)草津(酸性泉)。新潟—四萬(鹽類泉)澤渡(同上)赤倉(硫黄泉、炭酸泉)。神奈川—箱根湯本(單純泉)同宮下(鹽類泉)同塔澤(同上)同低倉(同上)同木賀(同上)姥子(同上)蘆湯(硫黄泉)湯河原(鹽類泉)。静岡—熱海(鹽類泉)伊豆山(同上)修善寺(同上)。長野—澁湯(酸性泉)白骨(炭酸泉)淺間(單純泉)野澤(硫黄泉)諏訪(鹽類泉)。岐阜—平湯(炭酸泉)蒲田(鹽類泉)。富山—小川(鹽類泉)立山(硫黄泉)。石川—山中(鹽類泉)山代(同上)和倉(同上)。三重—菰野(單純泉)。和歌山—湯ノ峰(硫黄泉、鹽類泉、炭酸泉)鈴山(炭酸泉)。兵庫—有馬(鹽類泉)城崎(同上)。

東支那海は極めて淺し、然るに太平洋岸は、五千米内外の海壚を有す。日本群島の亞細亞大陸の一部なるを知る可し。太平洋方面が一般に海深の甚しき中にも、本州の東北より千島の東方に至る邊最も深く、沈降八千米以上、世界最深所の稱あるタスカロラ海床あり。又、南方琉球、臺灣の沿岸より稍々東にあたり、琉球海溝と稱する、七千五百米の深所あり。伊豆七島より小笠原島に掛けて海底ひとり隆起す。小笠原海嶺これ也、千島列島も亦海嶺をなす。

第四章 河川及び湖沼

【我國の河川】我國は雨量乏しからざれば河川少しとせざれど、平原多からざるを以て、大河と稱す可きもの無く、河口の港とす可きなく、舟楫の便多きもの無し。加之近來森

林荒廢の爲洪水の害頻々たるを見る。殊に朝鮮を以て甚しとす。水路を修理する爲、政府が河川法を適用せる河川又は政府が直接に改修工事を施せる河も少からず。河川の爲に費せる費用一ヶ年平均一千二百八十萬圓、水害の損失最近二十年平均二千八百萬圓を超ゆ(朝鮮を除く)。

【樺太】 幌内川(日露兩國の境を貫く、所謂國際河)―鈴谷川―留多加川。

【北海道】 石狩川(我國二等の大河、雨龍、美瑛、空知、夕張、江別等の支流を有す、神居古潭の名峽あり)―天鹽川―十勝川―釧路川―常呂川―湧別川―尻別川―西別川。

【本州】 奥羽地方。馬淵川―北上川―鳴瀬川―名取川―阿武隈川―岩木川―能代川―御物川―最上川―荒川―阿賀野川(只見明橋等の支流あり)―信濃川(本邦第一の長流、千曲、

犀二支流あり)。**關東地方**、久慈川―那珂川利根川(吾妻、碓氷、渡良瀬等の支流を合し、關東平野の中央にて二分す。本流は鬼怒、小貝等の支流を合せ、霞浦、北浦の水を受けて海に入り、派流は江戸川又は市川と稱へて海に入る)―荒川(下流を隅田川と稱し、東京市を貫く)―多摩川(下流六郷川)―相模川―酒匂川。**東海地方**。富士川(笛吹、釜無の二支流を有す)―安倍川―大井川―天龍川―豊川―矢作川―木曾川(楫斐、長良、益田等の支流あり、本流の上流には木曾谷の奇勝あり)―床内川―雲出川―櫛田川―宮川。**北陸地方**。神通川(高原宮の二支流あり)―床ノ川―常願寺川―黒部川―手取川―九頭龍川。**畿内地方**。新宮川(上流に十津川、熊野川の稱あり)―日置川―日高川―有田川―紀の川―淀川(上流に瀬田川、宇治川等の稱

あり、木津、桂、鴨等の支流を合せ、神崎、中津、安治、尻無、木津の五流に分れ、大阪市を貫きて海に入る)―大和川―武庫川。**山陰道地方**。由良川―朝來川―矢田川―千代川―天神川―日野川―鏡川(斐伊川)―郷の川(江の川、中國第一の長流)―高津川、阿武川。**山陽道地方**。加古川―市川―楯保川―千種川―吉井川―旭日川―高梁川(川邊川)―蘆田川―沼田川―太田川―錦川(岩國川)―佐波川―厚東川。

【四國】 吉野川(上峽に祖母谷の名區あり)―那賀川―物部川―仁淀川―渡川―肱川。

【九州】 遠賀川―筑後川(九州第一の長流)―菊池川―白川―緑川―球磨川―川内川―山國川(沿岸に耶馬溪の名勝あり)―大野川―五箇瀬川―美々津川―大丸川―一ノ瀬川―大淀川。

【臺灣】 濁水溪―下淡水溪。

【朝鮮】 鴨綠江(朝鮮第一の長流、虛川江、長津江、渾河、鬻河等の支流あり、水源は森林鬱茂す)―豆滿江(圖們江)―大同江―漢江(北江、南江の二支流あり、河口は臨津江、禮成江の二流相合して長大なる峽灣を爲す)―錦江、洛東江(朝鮮の諸河川の中冬期氷結せざるは此川あるのみとす)。

【我國の湖沼】 我國は地形錯雜せるを以て湖沼少なからず。されど大なるもの無きは云ふを俟たず。**樺太**。多來加湖(海岸湖)―トナイチャ湖(同上)。**北海道**。網走湖(海岸湖)―頓別湖(同上)―サロマ湖(同上)熊取湖(同上)風連湖(同上)―厚岸湖―屈斜路湖(火山湖)阿寒湖(同上)支笏湖(同上)―洞爺湖(同上)奥羽地方。十和田湖(火山湖)―十三湯(海岸湖)―小河原沼(同上)―八郎潟(同上)―猪苗代湖(堰塞湖)。**關東地方**。中禪寺湖(堰塞湖)―

諏訪湖(同上)―霞ヶ浦(河跡湖)―北浦(同上) 印旛沼(同上)。四東海道地方。濱名湖(海岸湖)―山中湖以下富士湖(堰塞湖)。畿内地方。琵琶湖(地形湖)―巨椋池(同上)―余吾湖(同上)。北陸地方。福島潟(海岸湖)―河北潟(同上)―四方湖(同上)。中國地方。宍道湖(海岸湖)。九州地方及び臺灣、朝鮮には、湖沼と稱す可きもの無し。

第五章 氣候

【測候】 我國は緯度の差大なる、水陸の分布複雑なるによりて、氣候の變化頗る多様なり。政府は邦内(朝鮮を除く)を十箇の氣象區に分ち百十四ヶ所の測候所を設けて日々其地方の氣象を觀測し、之を東京なる中央氣象臺に報告し、同臺にて夫を綜合して所謂天氣豫報を公布す。

【風】 一般に夏季は亞細亞大陸に低氣壓を生じ風は太平洋方面より吹き、暑氣を一層強からしめ冬は太平洋方面に低氣壓を生じ風は亞細亞大陸より吹き、寒氣を更に烈しからしむ。季候風是也。春と秋とは季候風の交代期にして寒暖の差著しとす。されど地形錯雜せるを以て地方々々の小區域の風向は一定せず。其他臨時に颶風の襲來を受く。フキリツピン群島附近に起れる低氣壓が西南より東北に通過する其通路に當るを以て也。八月下旬より九月上旬にかけて襲來するもの最も烈し。(所謂二百十日二百二十日は此時也)此颶風を外人はタイフーンと呼ぶ。

晴天多く、特に中央山脈の直下は涸風強し) 瀬戸内海地方は腹背に山脈を控うるを以て夏冬共に雨量少なし、朝鮮の中部以北は一般に雨量減じ、滿洲方面の乾燥地に連絡す。雨期は夏の初め(所謂梅雨期)と末とに來る。夏の末の雨季の洪水に伴ふ。(津輕海峡以北には雨期無し) 雨量の最も大なるは、紀伊四國の南岸也。

【温度】 温度も氣候風地形緯度の影響によりて各地方の差著し。南方暖にして北に至る程寒氣を増し、且つ較差即ち寒暑の差を増す。(較差最も大なるは北海道の中部上川、十勝地方。)朝鮮は南部の沿海地方は稍溫和なれど、内部より北方にかけては寒暑の差頗る激甚也。全國を通じて極暑は大差無けれ共極寒の差は非常に大也。臺灣、琉球より薩摩の南端迄及び八丈島、小笠原島等は氷點以下に降

る日は一年中一日も無けれど、樺太に至れば氷點以下の日が一年の大半を越ゆ。高山の頂點は氣候常に寒冷にして就中日本アルプス地方は恆雪即ち萬年雪を絶たざれど、而も我國の高山は雪線に達するもの無く、氷河を見るを得ず。(氷河の痕跡は往々發見せらる)。

【海流】 我國の近海を流るる海流は、黒潮、對馬暖流、親潮、ライマン海流等也。黒潮(日本海流)は臺灣の南部海中に起り琉球列島を洗ひ、九州南端を東に通過し、九州四國の東南に沿うて紀伊半島の南角に接し、伊豆七島を縫ひ房總半島の沖を過ぎ、犬吠ヶ崎邊より東折し太平洋を斜斷し、加奈太に向ふ、水温著しく温暖流速一晝夜に五十哩、濃藍色を呈するを以て黒潮と呼ぶ也。此黒潮が琉球邊にて分派せしもの對馬海流となり、對馬海峡を過ぎ日本海に入り、本州に沿うて北走し北

海道(かいだう)の西岸(せいがん)に沿(したが)ひ、樺太(ひょうたい)の南隅(なんぐも)に到(いた)つて宗谷(そうや)海峡(かいきょう)を過(す)ぎ、北見(きたみ)の海岸(かいがん)を東(ひがし)に進(すす)み根室(ねむろ)灣(わん)に入りて消(き)ゆ。四親潮(よっしんしほ)(千島(ちしま)海流(かいりゅう))を白令(べいりん)海峡(かいきょう)より出(で)で、千島(ちしま)並(なら)に北海道(ほくかいだう)本道(ほんだう)の東南(とうなん)岸(がん)に近(ちか)く流れ、襟裳(むすも)岬(さき)より南(みなみ)に曲(まが)り、陸中(りくちゆう)陸前(りくぜん)の沖(おほ)を南下(なんか)し犬吠(いぬほ)ヶ崎(さき)邊(へん)にて消(き)ゆ、水温(すいおん)頗(おほ)る寒冷(かんれい)、流速(りゅうそく)一晝夜(いちしや)に五湮(ごえん)乃至(乃至)十五湮(じゅうごえん)。これが南下(なんか)して比較(ひかく)的(てき)温暖(おんなん)なる大氣(たいき)若(わか)くは水(みづ)に觸(ふ)ると時(とき)は、水蒸氣(すいじょうき)を凝結(ぎやうけつ)せしめて霧(きり)を生(な)ず、北海道(ほくかいだう)本島(ほんたう)より陸奥(りくお)陸中(りくちゆう)の海岸(かいがん)にかけて航路(かうろ)の妨害(ぼうがい)となるガス是(これ)也(なり)。四ライマン(らいまん)海流(かいりゅう)はオホツク海(おほつくかい)の北方(ほくほう)に生(な)じ、韃靼(たつたん)海峡(かいきょう)を過(す)ぎ南朝鮮(なんせうせん)海峡(かいきょう)附近(ふきん)に消滅(しょうめつ)す。對馬(たいま)海流(かいりゅう)に衝突(しゅうつう)して濛霧(もうむ)を生(な)ず。是(こゝ)等の海流(かいりゅう)は季候風(きこうふう)に影響(えいぎやう)せられて夏(か)冬(とう)稍(さう)々(々)其位置(そのいち)を更(か)ふ、又(また)其位置(そのいち)と氣候風(きこうふう)との關係(かへい)は、海流(かいりゅう)をして我邦(わがくに)の氣候(きこう)の緩(ゆる)和(わ)劑(ざい)たるを得(え)せしめざれど、多量(たうりやう)の水蒸氣(すいじょうき)を齎(もたら)して雨量(りやうりやう)を多(おほ)からしむ。

齎(もたら)して雨量(りやうりやう)を多(おほ)からしむ。

【流氷】 寒流(かんりゅう)に浴(よく)する地方(ちほう)にては、冬季(とうき)海岸(かいがん)に流氷(りゅうひやう)の漂(た)ひ來(き)るを見る。北海道(ほくかいだう)本道(ほんだう)の西北(せいぼ)より東南(とうなん)岸(がん)、及び(及び)千島(ちしま)、樺太(ひょうたい)の近海(ちかかい)は爲(な)るに十二月(じふにがつ)より翌(あした)四月(しがつ)頃(ころ)まで航海(かうかい)を絶(た)つに至(いた)る。

【潮汐】 潮汐(しほ)の最(あ)も高(たか)きは九州(きゅうしゅう)有明(あ)り明(あ)り灣(わん)也(なり)。太平洋(たいへいやう)沿(え)崎(さき)に概(おほ)して高(たか)く、瀬戸(せと)内海(ないかい)並(なら)に日本海(にっぽんかい)は極(きま)めて低(ひ)し。内海(ないかい)と外海(がいかい)との間(ま)の海峡(かいきょう)は潮流(しほりゅう)の急(い)なるを見る。津輕(つがる)海峡(かいきょう)、對馬(たいま)海峡(かいきょう)若(わか)しくは馬關(ばくわん)海峡(かいきょう)、鳴門(なるい)海峡(かいきょう)に至(いた)つて更(か)に著(し)しきを見る。

第六章 植物及び動物分布

【植物帶】 日本(にっぽん)の植物帶(しょくぶつたい)は概(おほ)ね次の五帶(ごたい)に分(わ)つを得(え)得(え)る(朝鮮(せうせん)を除(のぞ)く)。(一)亞熱帶(あねつたい)又は榕樹(じようじゆ)帶(たい)。(二)暖帶(ぬんたい)又は松帶(しょうたい)。(三)溫帶(おんたい)又は檜帶(ひんたい)。(四)冷帶(れいたい)又は山毛櫨(さんまうじゆ)帶(たい)。(五)亞寒帶(あかんたい)又は白檜(はくひん)帶(たい)。

帶(たい)。(六)寒帶(かんたい)又は假松帶(かりしょうたい)。

【亞熱帶】 臺灣(たいわん)、琉球(りゅうきゅう)より大隅(だいご)の極南(きよくなん)端(たん)まで互(た)る、(小笠原(せうらげん)島(じま)も亦(また)此帶(このたい)に屬(ぞく)す)何れも常綠樹(じやうりよくじゆ)也(なり)。榕樹(じようじゆ)——木性羊齒(ぼせいじやうし)齒(し)(ヘゴ、マルハチ)——鳳梨(ふうり)——椰子(や)——檳榔(べいろう)——甘蔗(かんざ)——紅樹(こうじゆ)——マンブローア——荔枝(りち)——龍眼(りゆうがん)——想(じやう)思樹(し)——刺竹(さしちやく)——蘭(らん)——蘇(そ)等(とう)等(とう)。

【暖帶】 九州(きゅうしゅう)、四國(しこく)、本州(ほんしゅう)の南半(なんはん)を占(し)め、海岸(かいがん)に近(ちか)き部分(ぶぶん)は更(か)に北(きた)に互(た)る、何れも常綠樹(じやうりよくじゆ)也(なり)。——櫛黒松(しこくしょう)——椎(しい)——樟(じやう)(以上皆森林(いじやうみなしんりん)をなす)——イヌグサ——ヤブニラ——ケイ——モチノキ——マサキ——カナメ——モチ——サカキ——イヌガヤ——枸骨(きこく)——山茶(さん茶)——常春藤(じやうしゆんとう)——ヒサカキ——ヤツデ——ツルグミ——イヌツゲ——アリドウ——ウレ——ウラジロ——竹類(たけるい)等(とう)。

【溫帶】 四國(しこく)、九州(きゅうしゅう)の高(たか)地(ち)、本州(ほんしゅう)北半(きたはん)の低地(ていぢ)を占(し)む。主(ちゆう)として落葉性(らくえつせい)の潤葉木(じゆんえつぼく)也(なり)。——櫛(し)——檜(ひん)——松(しょう)——櫨(じゆ)等(とう)。

栗(り)——櫨(じゆ)——以上林(いじやうしん)を爲(な)す、東京(とうきやう)附近(ふきん)にこれを見(み)る)——櫻(おう)——ヤマウルシ——赤楊(あかやう)——楊柳(やうりゆう)——ウシロ——ロシ——躑躅(つとじゆ)——山吹(やまぶ)——野薔薇(のばら)——カヅマミ——薄(うす)——蕨(わ)——オミナベシ——山百合(やまゆり)——マツムシサウ——苧(お)——麻(あ)——羊齒類(じやうしるい)等(とう)。(又(また)所(ところ)によりては杉(さ) (奥羽(おくう)地方(ちほう)、日光(にっこう)街道(かいだう)附近(ふきん)の大深林(おほいしんりん)を爲(な)す) 赤松(あかしょう)良(よ)く生育(じよじゆ)し、樺(か)——花柏(はなば)——檜(ひん)は本帶(ほんたい)より次(つぎ)の冷帶(れいたい)に跨(また)りて森林(しんりん)をなす。(本會(ほんかい)の楡林(じゆりん)等(とう)有名(ゆうめい)也(なり))。

【冷帶】 北州(きたしゅう)北半(きたはん)の中高地(ちゆうたかち)を占(し)め、北海道(ほくかいだう)の東南(とうなん)半(はん)を占(し)む。——山毛櫨(さんまうじゆ)——櫨(じゆ)——胡桃(くるみ)——サハガ——ルミ——刺楸(さしきゆう)——カツラ——ミツバツ、シ——ゴエフ——ツ、シ——樺(か)——羅漢柏(らかんぱ) (奥羽(おくう)地方(ちほう)に森林(しんりん)をなす)——樺(か)——フキ——ヤガクマ——サウ——熊笹(くまざ)——オホイダ——ドリ——タケニガサ——艾(あ)——菅(か)——ヤナギ——ラン——セ——ンマイ——松羅(しょうら)。

【亞寒帶】 北海道(ほくかいだう)の東北(とうほく)半(はん)の平地(へいぢ)南半(なんはん)と中高地(ちゆうたかち)及び(及び)本州(ほんしゅう)北半(きたはん)の高(たか)地(ち)を占(し)む。概(おほ)ね矮小(わいせう)也(なり)。

【白檜—檜松—蝦夷松—落葉松—石楠—ミヤマハンノキ—マメザクラ—ダケカンバ—ホウノキ—ネマガリザサ—スノキ—ノロウスゴ—イハヤナギ—越橘—ハクサンフウロウ—オホヤマリンドウ—ヒメヤシン—ヒトツバヨモギ—ウサギキク—シウネアフヒ—サンカヤウ—カニカウモリ—ミツバワレン—蘭類—地衣類等、

【寒帯】本州北海道の高峯並に千島、樺太の北部に擴がる。【樞松(主として、これ也)】—イハヤナギ—ミヤマナ、カマド—馴鹿苔—氷蘭苔—ツガサクラ—コメバツガサクラ—イハヒゲ—ハクサンイチゲ—クロユリ—チヨノスケ—サウ—イハキヤウ—チングルマ—チシマキキヤウ—チシマフウロウ—ウラシマツツシ—オヤマノエンドウ(ハクサンイチゲ以下皆美しき花を開く、高山植物これ也)。

綿等の亞熱帯、藻類の領となる、日本橋方面は種類著しく少なく、津輕海峽を界として南北に區域を分つ。

【植物の種類】臺灣、樺太、朝鮮を除き、我國産の植物は總數三千種に達す。【本邦固有の植物として】、公孫樹、蘇鐵、櫻、山吹、山茶、茶梅等を數ふ可く、古來輸入されたものには、稻、麥、豆等を初とし菜蔬、瓜類果樹の多數、及び栽培さる、花卉は概ねこれ也。ヒメムカシヨモギ、アレチノギク、ヒメシヨ、白紫、ツメグサ(クローバ)、ツキミサウ、マツヨヒグサ、イヌムギ、オホイヌフグリ、其他禾本科植物などの偶然輸入されて雜草となれるものも少なからず。

【動物分布】動物分布は植物分布の如く調査精密ならず。【哺乳動物】猿及び熊、猪、鹿、カモシカ、アナグマ、鼯、黄貂、ムササビ、モモ

米は暖温兩帶に適し、木綿、藍等は暖帶に適す。大麻、麥、稷、稗、粟は温帶に宜しく又冷帯にも稔る。亞麻、燕麥、蕎麥等は冷帯に生育す。甘蔗は亞熱帯、落花生は暖帯、馬鈴薯は温冷帯に適す。林檎、櫻、桃等も温冷帯に適す。紅葉は冷帯に於て最も美しとす。

【高山の分布】低他より高山に登る時も亦同様の變化を見る。これを山麓帶、喬木帶、灌木帶、草木帶、地衣帶等に分つ。温帶、冷帯、亞寒帶、寒帯に相當す。

【海藻】海藻の分布も略陸上の植物帯の分布と平行す。千島、樺太方面より襟裳岬迄は亞寒帯の藻類、昆布、裙帶菜等有り、夫より金華山沖迄は温帯の藻類が交り、それより南は亞寒帯の藻類全く跡を絶ち、チンガサ、フノリ、カサメ、黒菜、ホンダワラ等温帯の藻類を産し、九州南端より以南は、トゲノリ海

ンガロ、栗鼠、水獺等は津輕海峽以内琉球まで分布す、ヒグマは北海道、馴鹿は樺太、海豹、海馬、オットセイ等は千島、樺太方面に多く、海驢、海牛等は本州南方の海に多し、鯨類は全國の沿海に出没す。牛、馬、猫、犬、羊、豚などは悉く輸入動物也。兎は全國に産す、虎、豹等は朝鮮に棲めり。鳥類—分布最も不明也、丹頂鶴、鶴等は漸次減少する傾あり、其他鳥類減少の傾向あるを以て、政府は七十餘種の鳥を、鹿と共に保護動物と定む。但、朝鮮には丹頂鶴頗る多し。雉、鸚鵡、鸚哥、カナ

リア、七面鳥は輸入鳥也。【爬虫類】兩棲類—ウミガメ、玳瑁は南方の海洋に産し、飯匙倩は琉球諸島に、鮎、魚(ハンザキ)は中國の山間に産す。【魚類】—其數千二百種に上る。鯨、鱈は北海及び朝鮮に、鮪、鰹、鰯は南海に、蛙、鱒、香魚等は東北地方の淡水に産す、明太魚

は朝鮮に多き特産物也。甲殻類—タカアシガニは太平洋沿岸に、タラバガニは日本海に、イバミガニは北海に産し、何れも大形の甲殻類也。龍蝦は中部以内、カブトガニは瀬戸内海に産す。貝類—海扇は北海に、ホラガヒ、車渠、アワビは南海に産す。眞珠貝は天然に南海に産する外、有明海、伊勢海等に於て飼養さる。珊瑚—土佐、肥前、薩摩等の近海に産す。昆蟲—白蟻は臺灣に多く、蠶は本州中部に於て盛に養はる。蜜蜂も又各地に飼養さる。寄生動物、裂頭條蟲は琵琶湖沿岸に、肝臟アストマは岡山地方に蕃殖す。十二脂腸蟲、蛔蟲亦全國に蔓延し、マラリア病菌は臺灣に最も多しとす。

第七章 人種及び人口

【人種】 日本の人種は大略次の七種とす。

(一)オロケ。(二)ギリアツク。(三)アイヌ。(四)臺灣土人(漢人)。(五)臺灣蕃(マレー人)。(六)日本人。(七)朝鮮人。オロケはオロチンヨンとも云ふ。滿洲族にしてツンガイス種に屬す。漁業、放牧を業とし未開野蠻也。樺太に住す。ギリアツクは黒龍江沿岸オホツク海沿岸より樺太に移住せるものらしく、種族系統曖昧也。亦漁業、放牧を業とす。オロケ、ギリアツクイ合せて百餘口のみ也。アイヌは北海道本道千島並に樺太に住す、種族系統確かならず、太古は本土に分布し、日本人の祖先と衝突しき。未開にして農業或は漁業に従事し、言語風俗日本人に擬せり、總數二萬に満たず。臺灣土人は臺灣の西半部並に澎湖島に住む。漢人種にして、一般支那人と人文の度を同じくす。臺灣蕃は、臺灣東岸に群居す、比律賓土人と共に馬來人種に

屬す。獠猛兇惡也。熱蕃と生蕃とに分つ。前者は歸順せるもの也。後者は隘勇線を進めて討滅しつゝあり。諸蕃社の人々は併せて十萬四千人と計へらる。朝鮮人は日本人と同一系統に屬す、(言語の如き全く漢語と趣を異にし日本と同じく「テニチハ」を有す)。風俗、風慣は歴史的關係によりて支那に似たり。教育は全道に普及せず、古來階級制度厳しく行はれ兩班(常民、奴隸)の三階級に分たれしが、日本と併合するに至り全く廢されて四民平等となれり。日本人は他より移住し來つて此國土を征服したる者にして其種族系統明かならざれ共、兎に角多人種の混血種族なるは争ふ可からず。日本人がアイヌを驅逐して此國土を征服したるは明か也。アイヌ以前更にコロポックルと稱する種類の棲息し居たる事。石器時代遺跡遺物の發見によりて想像さる。

その遺跡、遺物と稱するは、貝塚、土器、石器、土偶、骨角器等にして全國到る處より發見せらる。

【人口】 人口の總數は未だ確實ならず、大正二年末の調査によれば、内地五千二百九十一萬八千人、臺灣三百二十一萬二千五百七十二人、樺太二萬五千四百二十七人、朝鮮を除きて總計五千六百四十四萬九千七百九十九人也。朝鮮は約一千三百萬人位と推算せらる。支那、印度、露西亞、北米合衆國に次ぎて獨逸、英國と伍するの人口也。而して、平均百分の十二の率を以て年々増加しつゝあり、而も海外在留日本人は大正二年末の調査により朝鮮を外邦と見做しても、尙且二十四萬七千餘人、全國人口の二百分の一に過ぎず。稠密の程度は(臺灣、樺太、朝鮮を除く)一方里に付二千百三十四人にして、世界各國の二三番に當

る。其内にて最も稀薄なるは北海道を除けば奥羽地方にして、最も稠密なるは本州中央以西也。

【市町村】 是等の人口は殆く邦内に分布住居し無数に都市村邑宿驛部落を形成す。其政治上の區域を市町村と名付く。町村等の人々は出産死亡の差を以て自然的に増加するのみなれ共、都市の人口は移住によりて町村より遙かに長足の進歩を以て増加す。又其附近の町村に幾多の人口團集して小都市の趣をなせるも少なからず。爲に都市の區域の擴張せる例は、大阪、神戸、横濱、福岡、名古屋等にこれを見る。

【六大都市】 東京は日本帝國の首都にして、政治、外交、軍事、商工業、交通、學術、風俗の中心也。人口二百〇二萬三千三百二十人（大正二年末）、亞細亞最大の都會にして、世

として東京に譲らず、工業の内、金屬精鍊紡績等は著るしく卓絶し、沿海及び清鮮航路の樞要として東京を凌ぐ、市内は四區に分れ道路は溝渠と共に正しく列べり、府市廳、造幣局、師團司令部其他四天王寺以下の寺堂頗る多し。京都は又西京と呼ぶ。人口五十萬八千餘、維新以前迄の帝都の地、今昔日繁榮の俤を見るを得ざれ共、宗教、美術、工藝の中心として仍ほ誇る可きものを失はず。市區端正に基盤の目の如し。府市廳京都帝國大學其他神社佛閣頗る多し。以上三大都會は人口一般に卓絶せるを以て其地方を府と稱す。三大都に次ぐものを横濱、神戸、名古屋の三市とす。横濱市は東京灣に臨み大都會中最も新に開けたるもの也。人口三十九萬六千、良港にして外國貿易の中心なり、内國沿岸航路並に歐米行大航路の發着點也、神戸市は大阪

界大都會の第四位にあり。（其外郭をなせる町村の人口を合算すれば二百五十萬を越ゆ）。現今の東京市は十五區に分たれ市街千四百餘町を包含し、中央に皇居あり、樞密院、内閣各省外國大使公使館、陸軍參謀本部、海軍々令部、帝國議會議事堂、府市廳を初めとして其他の諸官衙、日本銀行等の銀行、商店、帝國博物館及び帝國大學等の諸學校、其他あらゆる施設悉く具備す。地勢上東京平原の西南端に位し、半ばは高臺半ばは隅田川の流域と東京灣に臨める三角洲とより成れる低地に跨り十七方哩を占む。市街軌道の電車、汽車を通ずるもの百餘哩、電話線の長さ總計三萬三千里に及ぶ、市の沿海は底淺くして大船を撃ぐに足らず。市街は比較的新しき低地の外一般に縱横不規則也。大阪は人口百四十萬餘、商工業、金融、交通、風俗、言語等の一中心

灣に臨み人口四十四萬八千餘、主として東洋諸港との貿易に従事す。名古屋は中京とも稱す。濃美平原を負ひて伊勢灣にのぞみ人口三十七萬八千、神戸市と殆んど相等しく、盛なる商工業地也、輸出向工藝品の製作さるるもの多し。東京、京都、大阪、横濱、神戸、名古屋、以上は我國の六大都會と稱す可きものなり。

【其他の都市】 凡そ都市成立の原因には次の諸種あり。（一）政治軍事の中心。（二）舊封建時代藩城の都市。（三）陸上又は海上交通の樞要衝。（四）貨物集散地。（五）商工業の中樞。（六）鑛物産地。（七）神社佛閣所在地即ち信仰地。（八）風景、氣候、温泉、名勝の地。（九）現時若くは舊時街道の要驛。勿論一都市にして數個の要件を兼備せるものも少なからず。次に全國屈指の都市町村を擧ぐれば左の如

し。○を附せるは府縣道廳所在地にして、△印は廳所在地より大なる都市也。○東京市—政治、外交、軍事、學藝、文化、商工業、交通金融等の大中樞。○大阪市—商工業、交通、金融、貿易の中樞。○京都市—舊帝都、美術、工藝、宗教の中心。○横濱市(神奈川)—歐米貿易、航路、交通の要樞。○名古屋(愛知)—濃美平野の大集散地、商工業、交通の要樞、舊城市。○神戸市(兵庫)—東洋貿易、航路、交通の要樞。○長崎市(長崎)—西海航路の要港。○廣島市(廣島)—山陽道の要驛、師團司令部。吳市—瀬戸内海々軍大根據地。○仙臺市—奥羽の舊大城市、東北交通の要驛、師團司令部。○岡山市—山陽道要驛、舊城市。佐世保市(長崎)—西海々軍大根據地。△小樽區(北海道)—北海道の關門、北海航路の要港、貨物集散地。○函館區(北海道)—北海道の關

門、北海航路の一要港。○福岡市(福岡)—九州北部の貨物集散地。○和歌山市(和歌山)—舊大城市、紀伊本道の貨物集散地。近海航路の要衝。○横須賀市(神奈川)—海軍大根據地。○札幌區(北海道)—北海道拓殖の中樞。○徳島市(徳島)—四國の貨物集散地。○鹿兒島市(鹿兒島)—九州南隅の舊城市、琉球方面の交通要衝。○新潟市(新潟)—越後の貨物集散地、日本海の港市。○金澤市(石川)—北陸線の要地にして第九師團司令部。○熊本市(熊本)—九州の大城市、師團司令部。△堺市(大阪府)—大阪平野の財物集散地、舊要衝。△下ノ關市(山口)—山陽、内海、近海の交通要衝。○富山市(富山)—北陸の貨物集散地。△門司市(山口)—九州交通の關門、近海航路の要衝。○静岡市(静岡)—東海道の要驛、舊城市。○福井市(福井)—北陸の貨物集散地、交通要驛。

○甲府市(山梨)—甲斐盆地の中樞、舊城市。○那覇區(沖縄)—琉球方面の交通要港。○青森市(青森)—奥羽鐵道と北海道連絡の要驛。○宇都宮市(栃木)—奥羽街道の要驛。○前橋市(群馬)—關東平野の貨物集散地、舊城市。○松山市(愛媛)—四國の貨物集散地。△豊橋市(愛知)—舊東海道要驛、師團司令部。○大津市(滋賀)—琵琶湖沿岸の要驛。○高松市(香川)—瀬戸内海沿岸貨物集散地。○山形市(山形)—盆地の貨物集散地。○岐阜市(岐阜)—濃美平野の貨物集散地。○津市(三重)—舊東海道要驛。△姫路市(兵庫)—山陽道の要驛。△高崎市(群馬)—關東平野の貨物集散地、要驛。○若松市(福島)—○長野市(長野)—信仰地(善光寺所在)。○高知市(高知)—舊城市。○水戸市(茨城)—舊城市。△宇治山田市(三重)—宗廟所在地。△弘前市(青森)—舊城市、

師團司令部。○秋田市(秋田)—奥州北部の貨物集散地。○松江市(島根)—山陰道貨物集散地。○佐賀市(佐賀)—貨物集散地。○盛岡市(巖手)—舊城市。△久留米市(福岡)—貨物集散地。○米澤市(山形)—山形盆地の貨物集散地。△長岡市(新潟)—鑛物(石油)産地、商業地。△松本市(長野)—舊城市、貨物集散地。△高岡市(富山)—貨物集散地。○奈良市(奈良)—舊帝都地、名所、遺跡地。○鳥取市(鳥取)—山陰道貨物集散地。○福島市(福島)—奥羽街道の要驛。○千葉町(千葉)—東京灣底の貨物集散地。△小倉市(福岡)—炭坑地、師團司令部。△四日市市(三重)—伊勢内海港市。△尾道市(廣島)—瀬戸内海港市。○丸龜市(香川)—信仰地(金比羅神社所在)、師團司令部。○首里區(沖縄)—琉球の舊城市。○臺北(臺灣)—臺灣統治の中樞。△大牟田町(福岡)—

大炭坑(三池)の隣地。○旭川區(北海道)―北海道拓殖要地、師團司令地。○足利町(栃木)―機業地、商業地。△濱松市(靜岡)―舊東海道要驛、舊城市。△桐生町(群馬)―機業地、商業地。○大分市(大分)―貨物集散地。△尾町(栃木)―大鐵山の隣地、(眞の鐵山地は別に銅山町と稱す)。△高田市(新潟)―越後沿岸第十三師團司令地。△若松市(福岡)―炭坑隣地。△八王子町(東京府)―關東平野西部の貨物集散地、交通の要驛。△澁谷町(東京府)―東京市の人口の溢れを受く。○栃木町(栃木)―關東平野北部の貨物集散地。○川越町(埼玉)―關東平野の貨物集散地、舊小城市。△明石町(兵庫)―瀬戸内海の交通要衝、商業地。△伏見町(京都府)―京都盆地の商業地。△岡崎町(愛知)―舊城市。△防府町(三田尻)(山口)―瀬戸内海、山陽道の交通要衝。△上田町

(長野)―舊城市。△酒田町(山形)―最上川河口、日本海の舊港市。△八幡町(福岡)―大製鐵所所在地。△岩見澤町(北海道)―北海道鐵道の要驛。△大垣町(岐阜)―舊城市、舊中山道要驛。△桑名町(三重)―伊勢内海の港市。○山口町(山口)―舊城市。△鶴岡町(山形)―庄内平野の貨物集散地。△白杵町(大分)―九州沿岸航路の港市。△玉島町(岡山)―瀬戸内海の港市。△彦根町(滋賀)―琵琶湖畔の舊城市。△室蘭町(北海道)―北海道鐵道の一終點、港市。△千駄ヶ谷町(東京府)―東京市の人口の溢れを受く。

【朝鮮の都市】 京城は漢江中流の北岸にあり、韓國時代の首府にして八道の中樞也。住民約二十五萬(内二割は日本内地人)多數は商業に従事す。仁川は漢江河口の東北岸にあり、京城の喉頭たり、港灣を濟物浦と云ふ、人口

五萬餘。龍山も亦漢江の要津、京義鐵道の起點也、開城は高麗朝時代の舊都、人參の産地として著名也(以上京畿道)。釜山は日本海の要津、京釜鐵道の起點として朝鮮の關門たり、又日本海漁業の根據地とす。其西に鎮海灣あり馬山浦の港市あり。(以上慶尙南道)。

大邱は京釜鐵道の一要驛、此地方最大の商業地、貨物集散地、人口三萬に達す、慶州は舊新羅時代の舊跡地也。(以上慶尙南道)。

木浦は榮山江の河口に在る開港場にして、光州、羅州何れも榮山江の河筋にあり。(以上全羅南道)。

群山浦は錦江の河口にある貿易港也、全州は百濟の故都。(以上全羅北道)。

公州は錦江の中流に跨り京釜鐵道の大停車場也。成歡、牙山等の宿驛は日清役に名を知らる。(以上忠清北道)。

忠州、清州(以上忠清北道)春川は貨物集散地、鐵原は米の集散地也。

(以上江原道)。

元山港は釜山、仁川に次ぐ良港、日本海沿岸航路の要衝にして人口約二萬。其北に咸興あり。(以上咸鏡南道)。

咸津は貿易港也、鏡城は北朝鮮屈指の都市、會寧、慶源、慶興は豆滿江の下流に沿へる要驛也。(以上咸鏡北道)。

平壤は北朝鮮最大の都市人口三萬餘、日清役の古戰場とす。鎮南浦は大同江下流の良港、兼二浦も大同江に臨む。(以上平安南道)。

義州は鴨綠江の南岸、古來支那との交通の要衝也、其南に新義州あり、京義鐵道の終點、龍巖浦は滿洲の大東溝に對し近來益々繁榮を加ふ。

第八章 交通

【汽車鐵道】 最近に於ける内地朝鮮並に南滿洲にて邦人の經營に係る鐵道全線の總計は六千七百哩に上る。其中四千六百三十哩は國有

となり鐵道院の管轄營業する處となれり。奥州本線—東京より本州東北の中央を貫ける縦谷に沿うて走り青森に達するもの全長四百五十六哩。東京、埼玉、栃木、福島、宮城、巖手、青森の一府六縣を連絡す。宇都宮より日光へ、仙臺より鹽釜へ、尻内より八戸への三支線を有す。常磐線（奥州海岸線）—東京より起る、奥州東海岸に沿うて仙臺に至る、全長二百二十五哩、千葉、茨城、福島、宮城四縣と東京とを連絡す。佐貫より龍ヶ崎へ、水戸より太田への二支線（私營）を有す。奥羽線—福島驛より起り中央火山帯を横斷し、羽前、羽後の山間盆地を迂回して青森に達す。全長三百二哩、福島、山形、秋田、青森の四縣を連絡す。能代及び小坂鑛山に二支線を分つ。（後者は私營）東海道線—東京を起點とし本州の東南海岸を舊東海道に沿うて走り、

全長三百七十哩、東京、神奈川、静岡、愛知、岐阜、滋賀、京都、大阪、兵庫の三府六縣を經由し、東京、大阪、京都、横濱、神戸、名古屋の六大都市を連絡す。本邦中最も樞要なる鐵道也。大船より横須賀へ、三島より大仁（私營）、豊橋より長篠へ（私營）、大府より武豊へ及び彦根より（私營）の支線を有す。中央線—東京より本州の脊梁山脈を縫うて濃美平原に出で名古屋に通ずるものにして、一部分は舊木曾街道に沿ひ、全長二百二十四哩、東京、山梨、長野、岐阜、愛知の一府四縣を經由す。立川より青森へ、國分寺より川越への二支線を有す、小佛、笹子の二大隧道を穿つ。中仙道線、信越線、北越線—東京より本州中部を横斷し、更に越後の海濱に平行して新潟に達する線也。全長二百六十六哩。東京、埼玉、群馬、長野、新潟の一府四縣を

連絡す。高崎より下仁田へ、熊谷より秩父への二支線を分つ。唯米峠の天嶮はアプト式齒狀軌によりて攀つ。北陸線—米原より東海道線と岐れて北陸道を海岸に沿ひ、信越線の直江津と連絡せる線路にして、滋賀、福井、石川、富山新潟の五縣を連絡す。金澤より七尾へ、高岡より伏木への二支線を有す。山陽線—神戸より瀬戸内海に沿うて下ノ關に至る。全長三百二十九哩、兵庫、岡山、広島、山口の四縣を經由す。岡山より津山と宇野と漕井へ、海田市より呉へ、広島より宇品へ、厚狭より大嶺への六支線を岐ち、姫路より山陰道連絡線起る。山陰線—山陰道を日本海に沿うて敷ける線にして京都より松江に至る、境への支線を有す。山陰、山陽連絡線—瀬戸内海沿岸の飾磨より日本海沿岸の豊岡、城崎を連ぬる播但線七十四哩を、大阪より丹後の舞

鶴に達する阪鶴線九十五哩とあり。關西線—名古屋、大阪を連ぬる線、全長百八哩、愛知、三重、奈良、大阪の三縣一府を貫く。柘植より草津へ、木津より大阪へ、龜山より宇治山田への三支線の外京都、奈良盆地の名邑を連絡する短支線を岐つ。房總半島線—東京より房總半島の諸點に達する線也。幹線を總武線と稱し、東京府と千葉縣とを貫き銚子に至る七十二哩、千葉より大原に至る房總線三十五哩を分岐す、佐倉より成田へ（私營）、佐原我孫子へ（私營）の支線を有す。關本州の主要連絡線—奥州本線（郡山より）と北越線とを連絡せんとする岩越線、奥州本線（小山より）と常磐線（水戸へ）とを連絡する水戸線、小山より中仙道線（高崎へ）に連る兩毛線、東京より奥州本線を横切り兩毛線（伊勢崎へ）連絡する東武線（私營）、信越線（篠井より）と中

央線(鹽尻へ)との連絡する篠井線、甲武線(八王子より)と横濱とを連絡する横濱鐵道線(私設)、京都より關西線奈良に結び、更に延びて再び同線の王子に接する奈良線、關西線(王寺)より和歌山に結ぶ紀和線、大阪より和歌山に達する南海線。關都會郊外線―東京に山手線、大阪に城東線、大阪に高野登山線、名古屋に尾西線あり。關北海道縱貫線―函館港より道の中央に達し、夫より東折して千島方面に向ふ線にして全長四百五十七哩、岩見澤より室蘭へ、旭川より名寄への二支線あり、網走線も廳で開通す可く、岩見澤追分附近に數條の炭鐵道あり。關四國鐵道―徳島より吉野川に添へる一短線、高松、丸龜、多度津、琴平附近の一短線、松山附近の一短線(皆私營)。關九州線―門司より福岡、熊本、佐賀、鹿兒島四縣を縦貫して鹿兒島に至る、全長二

百三十八哩、鳥栖より長崎へ、有田より伊萬里へ、早岐より佐世保への三支線を岐つ。外に小倉より宇佐へ通するもの、佐賀より唐津に至るもの、及び若松附近の石炭産地を縫ふもの等あり。關臺灣縱貫線―基隆より、臺灣の西岸を走りに達するもの、全長二百五十七哩。關樺太線―大泊より豊原迄の短線。關朝鮮縱貫線―釜山より京城迄二百七十哩の京釜線、京城より義州迄三百一十一哩の京義線、及び京城より仁川迄の京仁線等あり。關青森、函館間、門司、下ノ關間、岡山、高知間、尾道、多度津間、門司、釜山間には連絡汽船を通す。

【輕便軌道】輕便軌道は電車を主とす。東京市内を通ずる東京電氣鐵道、大阪、神戸間の阪神電氣鐵道、東京、横濱間の京濱電氣鐵道、京都大阪間の京阪電氣鐵道會社大阪市内

の大阪電氣鐵道、京都市内外の京都電氣鐵道等を主とす。

【道路】道路は其管轄と輻とにより國道、縣道、里道の三種に分たる。國道は東京日本橋を元標として起り伊勢神宮、各開港場、各府縣廳、各師團本營、各鎮守府を連絡し、且つ各府縣間、各兵營、鎮守府間を連絡す。朝鮮を除き全國全長二千四百九里に達す。縣道は各縣廳間、師團、兵營間、本廳、支廳間、著名區域及び市邑、海港間を連絡し、全國全長九千〇三十三里、里道は村落間を通ずる不規則なる道路にして、全國の全長九萬四千七百〇四里と計へらる。

【水運】我邦の河川は概れ水量少なく水流急なるを以て、河川航路の擧ぐるに足る可きもの無し、汽船を通じ得るは、隅田川、利根川、信濃川、北上川、淀川等の一部に過ぎず、他

は皆僅に帆船、小舟、筏を通ずるに過ぎず、海上航路としては鐵道院の鐵道連絡船の外に大小の會社並に個人の所有に係る船舶頗る多く、汽船二千三百艘百十六萬噸、帆船五千三百八十艘三十八萬四千噸に達す。(内地北海道)。日本郵船、大阪商船、東洋汽船の三會社最も盛んに水運業に従事す。日本郵船會社は、内地、朝鮮、支那沿岸並に北米、加奈陀、濠洲及び歐羅巴行を主とし、大阪商船會社は、内地、支那、印度、西比利亞沿岸並に北米、タコマ行を主とし、東京汽船會社は北米、桑港及び南米沿岸行を主とす。

【港湾】我邦は海岸線非常に複雑なるを以て港湾頗る多し。されど河口港の見る可きものは一箇所も無し。著しき寄泊港を次に掲ぐ、樺太南半―大泊―眞岡。北海道本島―稚内―網走―根室(以上北東岸)―厚岸―釧路―室蘭

—函館(以上南岸)—小樽—留萌(以上西岸)。
 本州東海岸—青森—大湊—大船渡—氣仙
 沼—萩ノ濱—石巻—鹽釜—小名濱—銚子—北
 濱—横濱—横須賀—三崎(以上東京灣迄)下田
 —江の浦—清水—武豊—熱田(名古屋港とも
 呼ぶ)—四日市—鳥羽—和歌山(以上紀伊半
 島まで)本州西海岸—能代—船川—土崎—酒
 田—新潟—佐渡—夷—直江津—伏木—敦賀—
 舞鶴—境—米子—濱田。瀬戸内海—大阪—神
 戶—玉島—鞆—糸崎—尾道—吳—宇品—三田
 尻(防府)—下ノ關。四國海岸—徳島—高松—
 多度津—高濱—宇和島—高知—須崎。九州海
 岸—門司—若松—別府—佐賀—白杵—佐伯
 —細島—油津—鹿兒島—三角—大牟田—島原
 —口ノ津—長崎—佐世保—伊萬里—唐津—博
 多—福江—嚴原—佐須奈—鹿見—名瀬—那
 覇。臺灣—基隆—淡水—東石港—安平—打狗

東港—昇南—花蓮港—蘇澳。澎湖島—馬公。
 朝鮮—釜山—仁川—馬山浦—木浦—群山浦—
 元山港—城津—鎮南浦—兼二浦。
 【航路標識】官設燈臺百八十九基、公設私設
 併せて十九基、各種の燈竿燈、船導燈、立標
 等ありて之を輔く(朝鮮を除く)之を海岸線一
 萬四千四百六十五哩に割宛つる時は、約七十
 哩に一基となる。世界海運國に比し、甚だ乏
 しきに過ぐ。(第二海岸参照)
 【郵便、電信、電話】朝鮮、樺太、臺灣を除
 きて郵便局の數六千八百六十八箇所、電信局
 及び其取扱所七百九十三箇所、架空電線の全
 長七千四百里、水底線三千八百五十三哩に達
 す、電話線、架空線路二千二百二十五里を超
 ゆ、又、長崎、朝鮮間、長崎、上海間、長
 崎、浦羅斯德間、東京、小笠原島間(小笠原
 島より桑港間は米國會社の線によつて通ず)

等に海底電信通じ、北海道根室の落石崎、下
 總の銚子、紀伊の朝岬、長門の角島、肥前五
 島の大瀬崎、臺灣富貴角の六箇所に無線電信
 局設置せらる。

第九章 産 業

【農業】臺灣、樺太、朝鮮を除きて全耕地五
 百三十萬町歩を有す。其内の米の作付、段
 別三百萬町歩、平年作四千五百萬石也。佛領、
 印度、暹羅、領印度等より年々多大の輸入
 を仰ぐ。朝鮮は現に五百萬石を産し、將來多
 望也。麥は作付段別二百萬町歩、平年作二
 千萬石。米國、加奈太、濠洲より輸入する額
 少なからず。四、繭、生絲の産額頗る多く、生絲
 の産は世界第二位、米、佛、伊等への輸出額
 一億二千萬圓に達す。長野縣を主産地とす。
 茶は輸出額一千三百萬圓(臺灣を除き)静岡

縣、京都府を主産地とす、臺灣は世界有数の
 茶産地にし、烏龍茶の輸出六百萬圓に上る。
 大豆は三百九十萬石、小豆は九十萬石、豌豆
 豆は二十七萬石、何れも北海道を主産地とす。
 關東州、朝鮮、支那等より内地に輸入する額
 少なからず。其他甘藷(沖縄、鹿兒島)馬鈴
 薯(北海道、奥州)大麻(栃木縣、臺灣)葉藍(徳
 島縣)葉煙草(栃木縣)等の産亦少なからず。大
 麻は清國南州等より輸入し、葉煙草は清國等
 に輸出す。

【飼畜業】牛の牧養は廣島縣以下中國地方を
 主位とし、臺灣、朝鮮(北部)等にも少からず、
 朝鮮より盛に牛皮を輸出すれど、内地にては
 煉乳(米英より)牛皮(朝鮮、英、清等より)の
 輸入多し。馬は北海道を首位とし、鹿兒島、
 熊本、巖手等之に次ぐ、政府は馬政局を東京
 に置き、種馬、牧場、種馬育成所等を各地に設

けて其改善蕃殖に力めつゝあり。養豚は臺灣に最も盛也、養雞は千葉縣以下各地方に行はるれども、尙清國より百六十萬圓の輸入あり。緬羊、山羊の飼畜未だ振はず、英、濠、佛、澳、支那、獨等より九百萬圓内外の羊毛の輸入を仰ぎつゝあり。

【林業】内地の森林は約二千二百萬町歩あり、用材の産出は山口縣を最とし、薪材は大分縣を主位とす。之を樹種に見るに、松、杉、扁柏、榿、樅等の收利を最も多しとす。木材、茶箱用板、樺寸、軸木、竹材等の輸出併せて約一千萬圓に達すれど、造船艦用のチーク材以下の輸入また少きにあらず。臺灣は樟樹多く世界唯一の製腦地たり、南樺太、北朝鮮(松、樅)等の林産亦有望也。

【水産業】我邦沿岸は頗る海藻、魚介に富み、殊に北海道沿岸は世界大漁場の一と稱せら

る。漁船の總數四十餘萬艘、遠洋漁業漸く盛ならんとす。水産物は漁獲物と製造物(乾製、鹽製、肥料、魚油)の二に分たる。前者は千葉、静岡、長崎、高知、鹿兒島諸縣を始めとし六千五百萬圓を算し、後者は北海道、長崎縣、静岡縣を首として三千五百萬圓を超ゆ。南樺太、臺灣、朝鮮沿海亦有望也。製鹽は瀬戸内海を主とし、内地の産額十億斤を超ゆるも尙多少の輸入を必要とす。朝鮮、關東州は臺灣と共に鹽業の前途頗る有望也。

【鑛業】金は内地のみの産額三百八十萬圓、鹿兒島縣を主産地とす。臺灣にも少からず、朝鮮の金坑も前途有望とす。銀は新潟縣を主とし、總産額四百五十萬圓。銅は秋田縣を首位として産額約二千三百萬圓、米、英、香港、佛、英領印度等への輸出頗る多く、品質の良きを以て世界に鳴る。鐵は巖手縣の

産殆んど全部を占め、總産額二百十萬圓あるのみ、英、支那、瑞典等より輸入する塊鐵と、英、獨、米、白等より輸入する條鐵、竿鐵、軌條等を計上すれば、二千六百萬圓の巨額に上り、之を繕ふものは、朝鮮の鐵坑と、枝光、室蘭の製鐵とあるのみ。石炭は總産額六千五百萬圓、福岡縣の産其の大半を占む、輸出額二千萬圓、印度以東の市場を壓す。撫順炭礦亦前途有望也。石油は新潟縣の産殆んど全部を占め、需用の三分の一を充たすに過ぎず。米國及び蘭領印度等より輸入す。硫黃は北海道より多量に産出し、米、濠、典等へ輸出す。

【工業】綿絲、紡績業は我國工業界の巨擘にして大阪、兵庫、岡山を首とし總産額四千三百萬圓、支那等へ輸出する事三千二百萬圓に及ぶ、原料は英領印度、米、清、埃及等より一億一千萬圓の輸入を仰ぐ。綿織物の産額は一

億一千萬圓、大阪(白木綿)を主とし、愛知(白木綿)和歌山(縮フランネル)之に次ぎ、内地より朝鮮及び支那等に輸出する事一千八百萬圓也。絹織物は總産額約九千五百萬圓、歐米に輸出する額三千萬圓にのぼる。群馬(太織、絹)京都(紋織物、縮緬)福井(羽二重)山梨(甲斐絹)等を主産地とす。其他絹綿交織物の産額約三千萬圓、主に内國用に供せらるれども支那等への輸出亦少からず。兩毛地方を主産地とす。麻織物は滋賀、沖繩等より出づ、産額多からず。砂糖、内地に於ては沖繩、鹿兒島、香川等の産額九千萬斤に達するあるのみ、蘭領印度より一千三百萬圓の粗糖の輸入を要すれ共臺灣よりの産額九百萬圓に上り、早晚、輸入外糖を杜絶せんとし更に清國等へ輸出するに至らんとしつゝあり。釀造業に於て、酒は釀造高四百六十萬石、兵庫(灘、伊

丹)福岡等を主産地とす、輸出額少からず、醬油は千葉(野田銚子)兵庫(龍野)等を主産地とし産額二百餘萬石、麥酒、葡萄酒の醸造も漸く盛ならんとす。窯業に於て、陶磁器は愛知を主産地とし、産額千三百萬圓、米、英、香港等に五百萬圓の輸出あれど、米國等の市場に於ては動もすれば獨逸の模造品に壓倒せられんとしつゝあり。煉瓦、瓦、セメント、硝子等の製造も亦漸く發達し、漸次輸出するに至り前途好望と稱せらる。漆器業は、和歌山縣を首位とし總産額五百六十萬圓、英、米、佛、獨等への輸出總額約九十萬圓とす。木蠟は福岡、福島等より出で、我が國の特産物として米、香港、英等への輸出額百三十萬圓也。蔴蓆業に於ては、疊表は大分縣、莫産は廣島縣を最とす。而して輸已向莞廷は岡山縣を最とし、米、加奈太、漆、英等への輸出

四百六十萬圓を超ゆ。眞田業亦盛にして、岡山、山口等を主産地とし、英、米等への輸出額六百萬圓に上る。製紙業は、和紙は山口、高知を主とし、洋紙は静岡、(富士製紙會社)兵庫等を主とす。洋紙は尙多大の輸入を仰がざるを得ず。燐寸業は兵庫、大阪を主とし、總産額一千萬圓を過ぎ、清、香港、新嘉坡、英領印度、蘭領印度等に盛に輸出せられ、ひとり東洋の市場を壓す。軸木は北海道より産し、亦輸入少からず。其他製革業、人造肥料業等漸く盛ならんとし、殊に造船業の如きは長足の進歩驚く可きものありとす。

【商業、貿易業】各地方に散在せる大都、小市は各其附近の中心市業をなす。各市場に於て最も多く取引せらるゝは米穀にして、麥、茶、酒、綿絲、綿織物、生絲、絹織物之に次ぐ。外國との貿易は年次其額を増加しつゝ

あり。輸出品に加工せざるもの多く、加工品も手指の勞を俟つもの多く、奢侈品多く、外商及び外船によりて取引の替まるゝもの多く、年々輸入超過を招きつゝある等の事項は、最も注意せざる可からずとす。重要輸出品の(千萬圓以上のもの)は、生絲、綿絲、羽二重、銅、石炭、綿布、茶等にして重要輸入品は棉花、鐵類、米、砂糖、豆糟、機械、綿布、羊毛、石油等也。臺灣を除きて三十六箇所の貿易港中貿易額最も多きは横濱にして、神戸、大阪、門司、下關、長崎等順次に次ぐ。輸出重要地を米、支那、佛、英等とし、輸入重要地を英、米、英領印度、清、獨等とす。

第十章 政治外交

【國體、政體、統治、機關】萬世一系皇統連綿、世界無比の國體にして、東洋最先の立憲

政體國也。貴衆兩院よりなる帝國議會と、國務大臣と樞密顧問との爲せる政府と、大審院七控訴院及び北海道に三箇各府縣及び樺太廳に各一箇づゝの地方裁判所及び其下に設けられたる區裁判所等の機關(臺灣、朝鮮、關東州は特別の司令制度設けらる)により、統治せらる。地方行政機關としては北海道廳、警視廳、府縣廳、郡役所、臺灣總督府、樺太廳、朝鮮總督府、關東都督府等あり。

【教育、宗教】小學校は其數二萬に近く學齡兒童の不就學者は僅に百分の三あるのみ。中學校の生徒は十一萬を超え高等女學校の生徒は四萬に餘る、高等教育は四箇の大學、八箇の高等學校、六箇の醫學專門學校あり。四箇の高等師範學校と北海道及び各府縣の師範學校とは共に教員を養成し、陸海軍に陸軍大學校海軍大學校、陸軍士官學校、海陸兵學校等あり

り、其他五箇の高等商業學校、六箇の高等工業學校以下、實業教育の機關亦漸く盛也。其他大學より小學に至るまで私立のもの亦頗る多しとす。●宗教は國有の神道の外、佛教、耶蘇教並び行はる。

【軍備】 ●我が國には陸軍と海軍とあり、大元帥陛下之を統率し給ひ、元帥府、軍事參議院、參謀本部、軍司令部等の設あり、我軍の精銳世界に名高し。●陸軍は内地に十九箇師團、朝鮮に二箇師團あり其他對馬に警備隊、臺灣に守備を置き支那には駐屯軍を置く又全國諸處に要塞あり其數十三箇所なり。●海軍は全國の海岸面を五海軍區に分ち各海軍區に鎮守府を名鎮守府に軍港を設け處によりては要港を置く戰艦、巡洋戰艦、巡洋艦等の諸艦艇は凡そ六十九萬噸あり。

【外交】 ●我が國と條約を結びし交際國は廿四

あり、是等の條約國とは概れ公使を交換し、殊に世界の強國と呼べる、英、佛、獨、露、埃洪、伊、及び米の七國とは互に大使を駐劄せしめ英國とは攻主同盟を締結せり。

【財政】 ●日清、日露の兩戰役を経我が歳出入は著しく膨脹して歳出は七億圓内外に及び大藏、陸海軍、逓信の四省の所管に屬するもの殊に多し歳出に對する歳入は酒造税、地租、關稅、所得稅、營業稅等の租稅、官業收入等より得。●國債は約二十億圓ありて其中十五億圓は外債なり、●拓植地の財政は臺灣を除き未だ獨立自營の域に達せざるも事業の發展につれ漸次補充金も減少するの傾きあり。

附 說

第一章 滿 洲

【概說】 ●滿洲の面積は六萬三千六百萬方里、長

白嶺と興安嶺との間に遼河、松花江の流域をなせる大平原を其中心とせり。●滿洲は支那の東北部にある盛京、吉林、黑龍江の三省の總稱なり。●氣候は大陸性で寒暑の差は酷しく冬季は凍傷に仆れ或は酒、醬油の凍るにひきかへ夏季は百二十度を越すことあり雨は少きも夏季の雨期に入れば道路泥濘殆んど膝を没す故に夏は耕作に従ひ冬は運搬に従事す。●産業は北部は牧畜を主とし又林業の見込みあり中部以南は農業盛大にして豆、麥、高粱、玉蜀黍等の産出多し。●南滿洲鐵道及び安奉鐵道は我邦の經營する處撫順、煙臺、本溪等炭山探掘權も亦我が有也。

【都市】 ●滿洲の都會は奉天を始めとし遼陽、鐵嶺何れも戰蹟ならざるはなし就中奉天は鐵道十字交又をなし滿洲政治商業の中心にして又南滿洲第一の大都會なり。●其南の遼陽は

滿洲第二の都會にして又北に鐵嶺あり農産物の集散地として知らる遼河の河口營口は南滿水運の明戸にして安奉鐵道の終點安東は大連と共に滿洲陸上交通の二大門戸なり。●北滿洲には長春、ハルピン、吉林あり就中ハルピンは東清鐵道の要驛にして露國の經營に係る市街なり。

第二章 關 東 州

【概說】 ●支那盛京省の半島即ち遼東半島の南端に位す面積二百二十方里、州の中央に金州灣、大連灣の彎入あり大連は南海岸にあり旅順は其盡端にあり。●旅順は大艦の出入には便ならざるも遼東、山東、南半島交通の要路に衝り我海軍根據地にして關東都督府を此所に置き都督を任じて、行政と軍務とを統べしめ更に其下に旅順大連に二民政署を置きて各管

内の政務を行はしむ、人口五十萬其大部分は支那人にして我國人は五萬人に過ぎず。鐵道は我南滿洲鐵道會社の經營せる線路ありて旅順及び大連より起り東北に進み滿洲の南部を貫けり。大連は露國の關東州を租借するに起り今や一萬餘噸の汽船の出入自在なり市街の道路は放射狀にして實に整然たり。

【租借地の前途】 關東州の租借は露國の權利を受けたるものにして先年更に二十五年我國に於て租借の權利を繼續することとせり。然らば二十五年後これを如何にすべきかは我國人として考慮を要する問題なり、然るに租借といふ事は古より國際關係としては先例のなきことにして先づ列強國が支那に試みたるに始れり、要するに相手の主權を害はざる範圍に於て其大地を占領するに至當とせり、然るに一旦租借せし以上は砲臺も築き築港も設け鐵

道をも敷設する等多額の資本を投ずるを以て期限の最終に直ちに返へすといふは實に困難ならん殊に租借條約の末尾の一項に滿期後の處分は其の終りの年兩國協議の上決定すと記しあるのみなり、租借地を永遠に租借國の領有に歸せしめんには固より國力の伴ふべきものなるを以て我が國民たるもの國力の充實を圖り祖先の屍を晒したる土地を失はぬ様覺悟せざるべからず。(終)

外國地理

第一編 總論

【地球】 地球は海と陸とに分る、海は陸地の三倍ありて、其大部分は南半球にあり。各地風土の差甚しく、又其四圍の事情を異にするを以て各地の住民に人種別を生じ、又國家を生じたり、國家の有する土地を邦土と稱す。【國家】 國家は優等種族の建設する所にして、各相對峙して勢力を張り、他の蠻野の土地を併せて保護國とし勢力範圍とし、地球上のあらゆる土地を占有羈絆す。國家には強弱の差別ありて、一等國、二等國、三等國の稱あれど互に相劣らず、武備を盛にして相争ふ。勢力の均衡と共に平和は辛うじて保たれつゝある也。主權者が子孫又は任意の者に位を讓

るを帝國又は王國と呼び、主權者を皇帝又は王と云ふ。主權者を人民中より選舉して定むるを共和國と云ひ、其主權者を大統領と云ふ。

【地方別】 地球上の陸地は、分ちて亞細亞、歐羅巴、阿弗利加並に南北亞米利加の五大陸或は五大洲とす、其他南洋諸島、濠太利亞等の大小島嶼あり、海洋には太平洋、大西洋、印度洋、南極洋、北極洋、地中海等の稱あり。邦土には帝國、王國、共和國の外に合衆國聯邦等あり、是等の邦土の領土、植民地、保護國其外中立地と稱する地域あり。全く不毛の地あり、地理明かならざる秘密國亦少なからず。

第二編 亞細亞洲

【面積及び境界】 東半球の北東部を占め、北は北極洋東は太平洋南は印度洋西は紅海地中海黒海カウカサス山脈裏海ウラル河ウラル山

脈にて阿弗利加及び歐羅巴に接す。(面積二百九十萬方里)地球全陸地の三分の一を占む、
 内海(東岸)ペーリングア海—オホーツク海—日本海—黄海—東海—支那海。(南岸)アラビア海。(西岸)紅海—地中海—黒海。島嶼(北極洋中)ニウベリア諸島。(太平洋中)日本諸島比律賓諸島—ボルネオ島—セレベス島—スマタラ島(印度洋中)アンダマン諸島—ニコバル諸島—セイロン島—ラカザバ諸島—マルザバ諸島(地中海中)キプロス島。四半島—カムチアツカ半島—朝鮮半島—印度支那半島(附マライ半島)アカン半島—アラビア半島—小亞細亞半島。岬—チエリウスキン岬—東岬—ロパトカ岬—カンボジア岬—ロマニア岬—コモリン岬—ババ岬。灣—オプ湾—渤海灣—東京灣—シアン湾—ベンガル灣—ベ

ルシア灣。海峡。ペーリングア海峡—對島海峡—マラツカ海峡—オルムズ海峡—ダーダネル海峡—ボスボロス海峡。
 地勢。北部低原、中央山嶽、南部高臺地、東部火山地域の四大區分となすを得。中央山嶽はバシール高原を中堅とし、これより山脈四出す。天山、アルタイ、ヤプロノイ、スタノポイ諸山脈は北東に出で北部低原の南方を限る。崑崙、興安嶺二山脈は其南を東に走り餘波支那の東北境より朝鮮日本迄及ぶ。ヒンヅクツシユ、エルブルズ二山脈は西に走り、ヒマラヤ山脈は南東に走り、南部高臺地域の北境をなす。日本諸島等以下の東部火山地域は、一脈の火山系によりて貫かる。
 河流及湖水。河流の北岸に注ぐものオプ河—エニセイ河—レナ河。東岸に注ぐもの。黒龍江—黃河—楊子江—メコン河の南岸に注ぐ

もの—サルウィン河—イラワザ河—ブラマプトラ河—ガンガ河—インドス河—チガリス河—エウフラト河。湖水、裏海—アラル海—バルハヤ湖—バイカル湖—洞庭湖—死海。
 氣候及び天産物。氣候は熱、温、寒三帯に跨り、土地の高低一樣ならざる所以によりて大差あり。北部は概ね嚴寒、東部は海洋の影響によりて温和多雨、中部は純然たる大陸的氣候にして雨少く、南部は炎熱多雨、西部は炎熱雨に乏し。(東南部の海岸地方の夏季は頗る多雨也、モンセーンと稱す。日本の梅雨はこれが餘波也。)植物は農産物には米、玉蜀黍、麥類、棉、茶、桑、藍、砂糖、珈琲等あり、樹木にては解、落葉松は此部に、椰子、檀香木、チーク竹、棕櫚等は南部に多し。動物の分布は中央の砂漠と大山脈とによりて南北に分たれ、北部には駱駝、野馬、馴鹿、白熊、貂、

狐、狼、海獸の類多く、南部は、其西部に獅、象、犀等あり。東部には虎、豹等あり、又鐵物も其種類に富み金剛石は印度より黄金は西比利亞ホルネチより、銅、石炭は日本より、錫は馬來地方より出づ。
 人口、人種、宗教。人口約八億四千萬世界全人類の過半に達す。其大部分は黄色人種即ち蒙古人にして、北方のウラルアルタイ種、南方の支那、印度民族、東方の日本民族の三種に分たる。西部には歐羅巴系のカウカサス種多く、東南隅より馬來半島にかけて馬來種多し。宗教は、佛教、儒教、回教、耶蘇教、波羅門教等行はる。
 區劃。地理研究上便宜の爲め次の如く區劃す。日本—日本帝國現領土(日本群島樺太南半並に朝鮮半島)支那—支那並に之に隣屬せる他國の小領土。露領亞細亞—西比利

亞其附屬島露領中央亞細亞並にカウカサス地方。印度支那、暹羅王國、佛領印度、支那（佛國屬領地と保護地）英領印度支那（緬甸、海峽植民地、英國保護酋長國聯邦）。印度—英領印度錫蘭並に土人酋長小國。イラン地方—ペルシヤ王國、ベルザスタン（英領）アフガニスタン（英國保護）。亞刺比亞半島—土耳其領英領土人酋長國。亞細亞土耳其—土耳其領土並に英領諸島。馬來諸島—蘭領、米領、英領、葡領の島々あり。

第一章 支那

【位置、境域、地方別】 亞細亞の中部より東部海岸に亘る。面積七十一萬方里、人口四億。露領西比利亞、中央亞細亞印度及び印度支那、朝鮮に境し、黃海東海支那海に臨む。海岸線は單調也、遼東、山東の二半島の抱く渤海

灣と、東京灣とあるのみ。政治上分ちて、支那本部（北清と南清とに分つ）、滿洲（東三省）蒙古、新疆省（伊犁）、西藏、青海等とす。香港、九龍、澳門、威海衛、膠州灣、青島、關東州等は他國屬領地也。

【地勢及び山系水系】 西部、中部は中央山脈に屬す、東部近海地方は平野多く地味肥沃也、パミール高原より出づる崑崙山系は支那本部の中央を東に貫き、二派に分れ南するものは秦嶺（北嶺）となり、北するものは祈連山脈、賀蘭山脈、陰山山脈となりて、興安嶺山脈に連る、興安嶺山脈は東北に向ひ西比利亞に達す、其北に天山南路の盆地を挟みて天山山脈あり、更に其北に天山北路の盆地を挟みてアルタイ山脈あり露西亞領との境を走りて蒙古高原を挾む。又東南海岸に近き所に南嶺ありて、西南より東北に向ひ、日本群島の脊梁と

なる、崑崙山系の南にはヒマラヤ山系東に走りて世界最高の西藏高原をなす。水系の主なるものは黄河と楊子江也。共に崑崙山系より發す、黄河は水勢急にして氾濫の害多し。楊子江は亞細亞第一の長流、水勢緩にして交通の便多く、其沿岸は沃野多く、人口最も稠密。珠江は南部の交通を利する事多く、遼河、松花江は北部の交通を助くる事少なからず。イリ河、タリム河等は内地河の大なるもの也。湖水は青海（鹹湖）洞庭湖、翻陽湖（淡湖）等を主とす。

【氣候産物】 南方は炎熱多雨。北方は大陸的氣候にて寒暑の差激甚。中央より東北にかけては雨量少く、天山、蒙古地方には砂漠多し。農業は南清地方に最も盛に、米、棉花、茶、甘蔗の産出多し。北方は麥、高粱、豆等主として栽培さる。養蠶は一般に盛也。雨量少き

地方は牧畜専ら行はる。礦物は豊富なる可けれど調査に至らず、鐵鑛、石炭等は良質のもの多く存在す。

【産業貿易】 棉花、豆類、茶等は最も盛に輸出せらる。加工品としては絹糸、絹織物及び美術工藝品の若干あるのみ。一般に工業不振也。我國に棉花、豆、豆粕、粗糖、鶏卵を輸出し、我國より紡績、絲、燐寸、銅。水産物等を輸入す。支那との貿易關係の最も深きは英國也、印度北米合衆國、露西亞、獨逸之に次ぐ。

【國民の文化】 支那人の大部分は漢族也。其他滿洲族（ツングース族）蒙古族、西藏族、苗族、土著古族等あり。滿洲族の外文化の程度頗る低し。支那は古代文明の先進國なりしが、國家の制度宜しきを得ざりし爲、著しく近代の進運に遅れ、頃日漸く覺醒するに至れ

り。清朝を倒したる革命運動はこの覺醒の結果に外ならず、**宗**教は儒教最く廣く行はる。佛敎亦之と伯仲の勢あり、喇嘛敎は蒙古西藏に、回々敎は西部地方に行はれ、基督教は一般に普及せられんとしつゝあり。**四**支那人は國家的觀念、公共的精神に乏しけれど、個人としては堅忍よくつとめ世界の商界に一大勢力を有せり。

【交通】南部は黄河及び運河等ありて、水上の交通古來より開け、南船北馬の稱ありき。近來鐵道の敷設稍普きに至りたれど、自國の經營によるものは殆んど無く、其主なるものは京漢鐵道(北京—漢口)粵漢鐵道の一部(上海—漢口、未だ漢口に至らず)京奉鐵道(北京—天津—奉天)に向ふ。其滿洲に於ける部分を**關**外線と云ふ。南滿洲鐵道並に安奉線(日本**の**經營する處)東清鐵道(露西亞の經營する

處)及び山東半島、廣東灣附近に其他の租借主獨逸の經營せる短線あり。川漢線、隸愛線等は計畫中。**航**海事業は全く發達せず、多く英、佛、獨、米等の手に委せり、日本郵船會社、大阪商船會社、日清汽船會社此間にあつてまた優勢也。**郵**便、電信も亦頗る不完全也。

【政治】開國以來三千年の君主政體は清朝の覆滅と共に、共和政體に改まらんとしつゝあれど革命の業容易ならず、新政府の樹立未だ確實ならず政治状態は唯混沌として萬民適歸する所を知らず。**從**來の制に従へば、地方政治は本部を十八省に分ち一省又は二三省に一總督を置き民治及び軍事を處理せしめ總督の下に各省に巡撫を置き省務を司らしむ。滿洲は將軍、西藏は駐藏大臣をして管轄せしめ、蒙古及び青海は理藩院をしてこれを治しむ。

【地方誌、支那本部】

支那本部は、これを分ちて直隸、山東、山西、河南、陝西、甘肅、江蘇、浙江、安徽、江西、湖北、湖南、四川、貴州、福建、廣東、廣西、雲南の十八省とす。**都**、港、北京(人口百六十萬、舊清朝の帝都にして北清の中心也。)—天津(人口七十五萬、北京の門口をなす貿易港也。)—山海關—張家口—保定府。(以上直隸省)濟南府(人口約二十萬)濰縣(人口二十五萬)及び清州—芝罘(山東半島北岸の貿易港)—威海衛(英國の租借地)—膠洲灣(獨逸の租借地)(以上山東省)—太原(人口二十五萬)(以上山西省)開封—河南(古の洛陽)(以上河南省)西安(古の長安)—咸陽—漢中—潼關(黄河の屈折點にあり、軍事上商業上の要區)(以上陝西省)蘭州—涼州—甘州—肅州(以上甘肅省)蘇州(人口五十萬、貿易港)—上海(人口六十五萬、支那第一の貿易港

生糸茶を輸出し阿片、綿布を輸入す。)—吳淞(貿易港)鎮江(貿易港)江寧(人口二十七萬)南京と稱す、貿易港(以上江蘇省)杭州府(人口三十萬、貿易港)—寧波(人口二十六萬、貿易港)—温州(以上浙江省)、安慶(貿易港)—蕪湖(貿易港)(以上安徽省)九江(貿易港)—南昌(鄱陽湖の南岸にあり)(以上江西省)武昌(人口二十五萬、近傍に大冶鐵山あり)—漢口(人口八十七萬、漢江と揚子江との會合點に位す、支那内部商業の中心、京漢鐵道の終點)—漢陽(綿布、製鐵、製茶等の工業地)—宜昌(以上湖北省)—兵州(貿易港、洞庭湖の北岸にあり)—長沙(人口二十三萬、貿易港)(以上湖南省)成都(人口六十萬、絹布の産出地)—重慶(人口六十萬、開港場)(以上四川省)貴陽(以上貴州省)雲南—大理—蒙自(佛領印度支那の境上に接す、重要地點也。)(以上雲南省、本省

には銅鐵、鉛鐵、大理石等の鑽石に富み、英佛の夙に垂涎する處也。桂林—梧州(貿易港)—龍州(廣西省)福州(人口六十二萬、貿易港)—廈門(我臺灣との貿易盛也)(以上福建省)廣州(又廣東と稱す、人口九十萬、珠江の下流にあり、南部支那貿易の中心地。絹布、生絲、砂糖、茶を輸出す)—香港(英領、貿易港)—三水(貿易港)—汕頭(貿易港)—瓊州(海南島の北岸にある貿易港)—北海(貿易港)(以上廣東省)。

【滿洲】 日本地理附説にゆづる。

【蒙古】 土地不毛、人口寡少。交通は不便にして駱駝、騾馬を用ふ。中央に戈壁の沙漠あり、以南を内蒙古以北を外蒙古とす。外蒙古の東部に庫倫あり、其北に賣買城あり、賣買城は露領キアクタと相接し、磚茶を輸出し毛布を輸入す。

灣と背合せをなし、渤海灣の咽喉を扼す。

第二章 露領亞細亞

【露領亞細亞の區分】 露領亞細亞は亞細亞の五分の二を占む。之を西比利亞、露領中央亞細亞、カウカサス地方の三部に分つ。

【西比利亞】 面積約八十一萬方里、人口約五百七十萬。北氷洋沿岸にはニューシベリア群島並にウランゲル諸島横る、海岸出入多けれども半歳氷の爲に閉さる。ペーリング海峡を扼さる東岬以南に、勘察加半島に圍まれたるオホーツ海あり、ペートル大帝灣、ボセツト灣あり。南境及び東部沿岸には、アルタイ、ヤプロノイ、スタノボイ諸山脈連亘すれど北西部は一大低原をなす。オビ、エニセイ、レナの三大河は北流し、黒龍江は東流し、何れも舟楫の便多し、西南部には大小幾多の湖沼

【新疆省】 天山山脈によりて、天山北路及び天山南路の二部に分たる。北路にカレユガル、ヤルカンド、ホータン等の宿驛あり、迪化府(ウルムチ)は北路にあり。

【青海省】 寒冷不毛の地、住民遊牧を事とす。大嶮湖、青海を有す。

【西藏】 世界の秘密國也。喇嘛教行はれ、法主政權を執る。前藏(東部)後藏(西部)の二部に分れ前藏の南方に拉薩あり、首府とす。

【他國の領土並に租借地】 香港(英領)—廣東海外の一島、九龍(英國の租借地)と相對して繁榮なる貿易港也。人口二十六萬、英國東洋艦隊の根據地。澳門(葡領)—東洋に於ける西洋領土の最も古きもの、阿片貿易の中心。

膠洲灣(日の占領地)—山東半島外側の一小灣、獨逸はなほ附近の鑛山發掘權並に鐵道敷設權を得たり。威海衛(英の租借地)—膠洲

あり。東南部にはバイカルの大淡水湖あり。

氣候は純然大陸的氣候也、フェルヨヤンスクは世界三極寒の一に算せらる。南境の山嶽帯よりは金銀を産し其次なる曠野帯よりは麥類を、其次なる森林帯よりは材木を、其次の凍土帯は全く不毛也。西比利亞鐵道はウラル山脈を越えチエリフビンスクを経てバイカル湖畔を迂回し、ネルナンスクの手前なるガイタロホより分岐せる東清鐵道を経て沿岸州に出で浦鹽斯德に達す。其途中ニコリスクより北、ハプロフスクに達するウスリー線あり。住民はキルギス族、ツングース族を主としフキン人、トルコ人、蒙古人も雜居す。政治上、西部西比利亞、東部西比利亞、ステプス地方、アムール地方四部に區別さる。浦鹽斯德はペートル大帝灣の良港、露國東洋艦隊の根據地。ニコライスクは黒龍江河口にあり、

漁業の中心也。アレキサンドルフスクー樺太北半の首邑。ハ、ロフスク、ブラコエチエンスクは何れも黒龍江畔にあり、商業交通の要衝地也。ストレチエンスクは現在西比利亞鐵道幹線の東終點にして近くネルチンスクあり、イルクツクはバイカル湖畔にあり、東部西比利亞の首府キヤクタは蒙古の賣買域と相向ひ貿易盛に行はる。チエリヤビンスクは西比利亞鐵道の西端終點。ナムスクは西部西比利亞の首府、トムスクは西比利亞第一の都會にして此地方一體は農業盛也。

【露領中央亞細亞】 概して沙漠若くは不毛の地也。裏海の外にアラル湖、バルハシユ湖等の鹹湖あり、アムダリヤ、シルダリヤの二流はアラル湖に、イリ河はバルハレユ湖に入る。不毛の草野は駱駝、羊等の放牧行はるとのみなれど此等の河の沿岸丈は農業盛也。

住民はキルギス人、土耳其人、波斯人等也。【サマルカンド】は貨物集散地、タシユケントは首府。【カウガス地方】 カウガス山系の南北を占む、南は内カウガス、北は外カウガスと稱す。氣候地味孰も可、農業開く。【チフリス】は其首府、パークは裏海沿岸にあり石油の産地として知らる。

第三章 支那及び印度

【印度支那】 印度支那は「奥の印度」と呼ぶ、南支那海とベンガル灣との中間に突出せる半島にしてヒマラヤ山系の支脈數條これを縦貫し、メコン河、メナン河、サルキル河、イラワチ河等並行して南流す。炎熱多雨。河流の沿岸は肥沃の平野にして米を始めとし煙草、玉蜀黍、甘蔗、棉花等の産額多く森林に

はチーク材多く、ゴム樹亦盛に栽培せらる。【人種】は雜種多く、支那人、馬來人、印度人等雜居す。【地理學】上の如く分たる、佛領印度支那暹羅王國、英領印度支那。

【佛領印度支那】 東京植民地、交趾支那植民地、安南カンボヂア、ラチス保護地等より成り、總督府は東京植民地の河内にあり、鐵道によりて海防に通ず、海防は江河の河口なる貿易港也、順化は安南の舊王城也。フノンペンはカンボヂアの首都也。西貢は交趾支那の首都にしてメコン河口に近き商港也。

【暹羅王國】 メナン、メコン兩大河の間にある專制國なれど、國勢更に振はず、米、チーク材、馬來半島地方の錫鐵等を主なる産物とす。ニバンコツクは其首府、人口三十萬、メナン河の下流にあり、河口にパトナム港あり、鐵道を以て連絡さる。

【英領印度支那】 馬來半島に於ける馬來聯邦、海峽植民地、並に印度帝國中の一部分たる緬甸を含む。海峽植民地—新嘉坡、マラツカ、ペナンの三部より成る。新嘉坡は馬來半島南端の小島にして赤道直下にあり、印度洋の中樞にして、東洋南洋の接續港也。英國東洋艦隊の根據地、人口二十二萬。マラツカは現時ペナンの爲に繁榮を奪はる。ペナンは海峽植民地の最北端に位する小島也。【馬來聯邦】 馬來半島の土人の首長國にして、ペラ、セラランゴール、ネグリセンラン、パハンの四國に分たる。英國、保護の下にあり。【緬甸】 イラワチ川の灌域にあり。地勢山嶽森林に富む上緬甸と下緬甸とに分たる。マンガレーはイラワチ中流にあり、舊王國の首府、蘭貢は河口にあり、米の輸出港也。【印度】 面積二十五萬方里、人口約二億九千

萬。海岸線概ね單純にして三角形の半島をなし、其尖端をコモリン岬となし、セイロン島其前に横る。北方にヒマラヤ大山脈連亘して高峻なる山地をなし、南方に傾斜して大平原となし、其南方半島部はデツカン高原となる。河流の主なる者には、印度河、ガンジス河、ブラマプトラ河、イラワヂ河、サルウイレ河等なり。氣候は北方山地は冷涼、平原地は炎熱多雨、高原は溫和少雨、産物は米、阿片、藍、小麥、茶、棉、珈琲、煙草、砂糖、黃麻等とす。住民はヒンヅ種ドラービタ種にして、波羅門教、回教等盛に行はる。英國領土即ち眞の英領印度と土人州との二つに別れ、前者は英國々王を代表する總督の治下にあり。四カルカツタはガンガ河の三角洲にあり、總督府の所在地にして商業頗る盛也。人口百三十萬。ベナレス、デリーは舊都、ラ

ホール、ペシアワールは印度河流域の要衝、孟買は半島部西岸にあり棉花輸出港として有名也。マドラス港は西岸にあり。ヒマラヤ山南の山地にネパル並にブータンの小獨立國あり。又半島の海岸には、葡佛二國の領土數箇宛あるも擧ぐるに足らず。錫蘭島は英本國直轄に屬し、コロンの要港を有す。

第四章 西南亞細亞

【イラン高原】印度半島より西波斯灣に沿ひ北露領中央亞細亞と裏面とに界せらる一大高原にしてエルプルス山脈之を横走す。氣候飽迄も大陸的にして、雨量少く、人烟稀少也。住民はイラン族と稱し歐羅巴系統に屬す。パルチスタン、アフガニスタン、波斯の三部に分たる。【パルチスタン】印度帝國の保護地也。【アフガニスタン】パルチスタンの北にあ

り、英露の係争地也。首長をアミールと云ひ、首府カブール(人口十四萬)の外カンダバル、ヘラツト等の小都會あり。四波斯はイラシ高原の大半を占む。煙草、棉、生絲、羊毛、穀物等を産出す。テヘラン(首府)イスパハン(舊都)タブーリス(人口十七萬、商業地)等あり。英露の均衡せる勢力の間に僅に保存せる微弱なる國家也。

【亞細亞土耳其】アナトリア(小亞細亞及びアルメニアの二部となる)レリア、メソポシヤの三部に分たれ、地方によりて頗る風土を異にす。アナトリア最も北に寄れる部分也。黒海及び地中海に沿へる地方は氣候溫和にして農産物多し。アンゴラ羊の牧養最も盛也。スミルナは人口三萬、重要な港市とす。メソポタミアユーフラート、チグリス兩大河の流域にして地味頗る豊沃、太古バヒロン

王國の勃興せし蹟也、バグダツトは貨物の大集散地にして人口十萬に達す。【シリア】地中海に沿へる地帯、南部をパレスタインと云ふ、シヨルダン河は死海に注ぐ、産業は主として農業と牧畜也、麥、羊毛、皮革等の輸出少なからず、ガマスクは人口十五萬此地方の大都會也、エルサレムは基督の聖蹟也。【地中海沿岸の島嶼】アナトリアの地中海沿岸には大小多數の島嶼散布す。キプロス島は英領、クリート島サモス島は土耳其領なり。其他ロドス、チナス等の島々あり。【アラビア半島】世界第一の大半島也、西は紅海南は印度洋東は波斯灣によりて限られ北はシリアに接す。面積百二十六萬方里、人口約六百萬。内部は高原にして、ネツと稱する沃地とネフエドと稱する沙漠地とより成り周圍はテハマと呼ぶ岩石地を成す。氣候は一

般に大陸性にして、コ、ア、珈琲、ゴム、馬(アラビア馬)羊等を産す。人種はアラビア族にして遊牧を業とし回教を奉ず。四箇の酋長國に分る、西海一帯の地は土耳其領に屬し、南洋のアデンは英領、東部のオーマンは英國の保護地なり、アデン港は英國海軍の根據地、メツカ府は國教祖ムハメットの生地也。

第五章 馬來諸島

【馬來諸島】印度洋と太平洋との中間に散在す。純然たる熱帶的氣候にして、米、煙草、甘蔗、チーク材、ゴム、椰子、珈琲等の培養に適す。動物物の分布はパリ、ロンボドク二小島間の海峡によりて明かに區劃せらる。此區劃線をローレス氏線と云ふ。人種は馬來人種とメラネシア人種との二様に分たる。獨立の國家と稱す可きもの無く悉く歐羅巴人の

爲に支配せらる。

【比律賓群島(米領)】パシー海峡を隔てて我臺灣と對す、呂宋、ミンナダナ以下の諸島より成る。首府マニラは呂宋島にあり、人口三十萬米國東洋艦隊の根據地也。麻、煙草、砂糖、印度藍、コブラ等を主産物とす。

【瓜哇(蘭領)】大スンダ群島(スマトラ、瓜哇、ボルネオ、セレベスを含む)小スンダ群島モルツカ諸島は概ね蘭領にして、就中瓜哇は中堅とす、地味肥沃砂糖以下の農産物頗る多し、首府バタビアは人口十七萬、附近に鐵道の便あり。

【スマトラ及びボルネオ其他(蘭、英領)】スマトラ島は蘭領の大島、面積十六萬五千方里マラツカ海峡を隔てて新嘉坡と對す、煙草以下の農作物、石炭、石油等の鑛産物多し。ボルネオの北部は英領也。セレベスは蘭領、

首都をマカザールとす、ニルツコ群島は其東にあり、香料島の名あり、小スンダ諸島は皆一線上に連る。パリ、ロンボツクの小島は此中にあり。

第三編 大洋洲

【大洋洲】これを濠洲諸島(濠洲大陸と新西蘭タスマニア)メラネシア(ニューギニア及び其附近の諸島)シクロネシア、ポリネシアの四部に分つ。

第一章 濠洲諸島

【濠洲大陸】面積四十九萬方里。海岸線は屈曲少なく、北岸はヨーク半島、アーネムスランドの間にカーペンタリア灣を挟み、南岸は、パズレー岬とカタスロフ岬との間にグレート、オーストラリアン、ベイ(濠洲大灣)とを

抱く。地勢東西二部に分たれ、西半は平坦乾燥未開の部分多く、東半は濠洲アルプス連亘し、多濕にして動植物に富む、モレー河之を貫流す、ユーカリ樹の如きカレガルー、カモノハン、エミウの如き特有の動植物少なからず。住民はオーストラドマ族の一系統を形成り、農牧を業とす。聯邦政治にして、英本國の代表者たる總督の管下にあり。羊の産額は世界一也、小麥、甘蔗も亦盛に培養せらる。金鉛も多量に産出す。五分ちてニユーサウス、ウエールズ、ビクトリア、クエーンズランド、サウスオーストラリア、ウエースカーンオーストラリア、タスマニア(屬島)の六部なりとす、シドニーはニュー、サウス、ウエールズにあり、人口五十萬、要港也。メルボルンはビクトリアの首府人口五十萬、要港にして亦南半球第一の都會也。プリズベン

はクキーンスランドの首府也。クキーンスランドの東北岸に大珊瑚堤あり、北岸に木曜島あり眞珠採取地として名高し。

【新西蘭】 濠洲大陸の南東にあり、二大島と數多の屬島とより成る。氣候溫和にして健康に適す。首府をウエリントンと云ひ、オークランドは樞要の貿易港也。

【メラネシア】 最大島をニューギニアとす、英、蘭、獨三國の分領する處。甘蔗、椰子、甘蔗等を産す、野蠻なるバプア種住居す。

フキレー群島は英領也、米國と南洋諸島との交通の要點に當る。【ニューカレドニア群島】 佛領也、金、銅、鐵、ニツケル等の礦物に富む。【ニューヘブリデス諸島】 英佛兩國の保護下にあり、ソロモン群島は英獨兩國に分屬す。

【シクロネシア】 マリアナ群島は我硫黃島に近

く、カロリン群島、マーシャル群島(珊瑚島)と共に獨領也。エリース、ギルバート二群島(珊瑚島)は英領也。外に米領ガム島あり。

【ポリネシア】 瓜哇群島は數個の火山島より成る。米領。首府ホノル、はオアフ島にあり人口五萬を超ゆ、太平洋横斷航路の寄航地、海底電線の中継場として重要な地也。【サモア群島】 英、米、獨三國の分領する處、トンガ(フレンドリー)群島は英國の保護地、ツサティ群島は佛國の保護地なり。

第四編 阿弗利加洲

【面積及び境界】 東大陸の西南部を占む。北は地中海東は紅海印度洋、南は南大洋西は大西洋。面積百九十九萬方里。海岸線比較的短し。【岬】 ボン岬—アラシコ岬—セウタ岬(以上北方)—ベルテ岬—バルマス岬(以上西方)

—グードホープ岬—アグリアス岬(以上南方)

—コリエテス—グアルダフイ(以上東方)。

【島嶼】 マテイラ島—カナリア諸島—ベルデ岬諸島—アセンション島—セントヘレナ島(以上大西洋)—マダガスカル島—モーリシアス島—ザンシザル島(以上印度洋)。

【地勢一般に高原性也】 山脈の主なるものは周圍の海岸にあり、内地は却つて低平也。北西部のアトラス山脈、西部のコン山脈カメロン山脈、南部のドラケンベルグ山脈、東部のアピシニア山脈、キリマヌアアロ山脈等あり、キリマヌアアロ山脈最も高峻。

【河流及び湖沼】 【ニール河】 北流して地中海に注ぎ、ニシエル河、コンゴ河は西流して大平洋に注ぎ、ザンベジ河は東流して印度洋に注ぐ。【東部アフリカ】 に、ビネトリア湖、タレガニーカ湖、マヤサ湖等ありて、何れも大

也。

【氣候及び天産物】 一般に炎熱にして大陸的氣候也、北部に無雨地方ありてサハラ沙漠を現出し、南部にもカラハリ沙漠あり。赤道地方は樹木鬱茂し沙漠地方程には暑熱激しからず。【北部地方】 には果實を多く産し、中部地方には森林あり。動物には獅子、象、河馬、駱駝、シラフ、斑馬、駝鳥等あり、礦物にては南部の金、金剛石を最も主なるものとす。

【人口、人種、宗教】 人口は約一億五千萬内外と推算せらる。土著の人種はサハラ沙漠を境として自ら南北に二分さる。北方には印度波斯、阿刺比亞人と共に白人系統に屬するセム族ハム族住居し、南方には黑人種住居す。黑人種にはパンツ、ホツテントツト、フシユ

マン等の數種あり、何れも野蠻を極む、宗教は極端なる迷信にして怪物奇獸を崇拜するが

如きもの也。而して現在阿弗利加を支配するものは歐米の諸國にして就中英佛の勢力範圍を最も廣しとす、土人の獨立國としては、摩洛哥、クレシニア、リベリアの三國あるのみ。

【ナイル地方】 ナイル河は全長三千三百七十哩、本流の長さは世界第一也。上流々域は森林蒼鬱たる埃及、蘇丹、中流々域は上埃及の沙漠地方、下流流域は地味膏腴なる下埃及のデルタ地方也。埃及、蘇丹は英佛兩國の勢力範圍にて英國優勢也、砂金の産あり、英國にワレヨダより南端喜望峯まで縦貫鐵道布設を畫しつゝあり。右來埃及と呼べるは下埃及と上埃及の一部分也、デルタ地方は棉花、煙草を初とし穀物、甘蔗、藍等農産物の産多し、首府カイロは阿引利加第一の大都會にして人口六十萬、歴山港は往昔埃及文明の中心たりし地。人口三十二萬。埃及は英國の保

護國也。四スエズ運河は歐洲と東洋と南洋とを連絡する最捷徑也。南門は蘇士港、北門にポートサイド港あり。

【東部地方】 アビシニア高原上に位する酋長國也。金を産出す。エソトレアー紅海に臨む海岸の一區劃にして伊領也。同じ海岸にオホクと稱する佛領あり、シブチルの良港を有す。ソマリランド、ソーマリ族の據れる地、アダンに向へる英領の部分と、印度洋に臨める伊領の部分とに分る。其近海に英領ソコトラ島あり。此等は何れも交通上樞要の地也。英領東阿弗利加—海岸の他を東阿保護國と稱し内地をウガンダ保護地と稱す。亞弗利加が縦貫鐵道の要衝とす。ザンシバル島—英國の保護地、地味肥沃香料等を産す。其他、東岸地方には、獨逸領東阿弗利加、葡萄牙東阿弗利加等あり、後者とモザシアク海峽を隔

て、マダカスカル島横はる。

【北海岸地方】 摩洛哥—パーパリ族の占據せる地、獨立王國にしてウエズを首都とす。アトラス山脈を隔て、サハラ大沙漠あり。摩洛哥の形勝の地にして、獨佛兩國の係争地也。アルセリア—佛國植民地、テルと稱する沃地あり耕作に適す。諸種の礦物に富み、キルク、アルフハ等の産多し。同名の首都を有す。チュラスは佛國の保護國にして、トリポリは土耳其の屬領也。トリポリの首都トリポリは隊商の出發點也。

【西部地方】 サハラ—日本の十五倍の面積を有する大沙漠也。オレアスを便として隊商これを横斷す。大部分は其南部の蘇丹及びセネガル地方と共に佛國の勢力範圍也。ギネア—ギネア灣に沿ひ、上下兩部に分たれ、産物に因みて象牙海岸、黄金海岸、奴隸海岸、

胡椒海岸等の名あり、英、佛、獨、西、葡諸國の分領する處也。リベリア—土人の共和國也、首府をモンロウキアと稱す。

【西南阿弗利加】 佛領コンゴ—コンゴ河流域の未開地。白耳義領コンゴ—公果自由國の後身、コンゴ—河流域の高原地にして、森林多く、椰子、紫檀、チーク、マホガニー、ゴム、珈琲、香料等の産多く、銅鐵の産亦少からず、ボマを首府とす。葡萄牙領西南阿弗利加—アンゴラとも云ふ。ロアンダの要港を有し、鐵道を有す。獨逸領西南亞弗利加—北半をアマラ地、南半をイマクラ地と稱す。礦物の産あり、若干の鐵道を有す。

【南阿弗利加】 南阿の英領は次の諸部より成る、南阿聯邦（喜望峯州—ナタール州—トランスバール州—オレンツ自由國州）と、ニアザランド保護地と、バストランド直轄植民地

と、バチユアナランド保護地と、ヨーロッパと、メキシコ直轄植民地と、南阿聯邦のトラレスバール州及びオレシ自由國州は、英國に征服せられし南阿共和國及びオレンザ河自由國の舊地也。金、金剛石を始めとし、銅、鐵、石炭等の鑛物多く、牧畜盛にして羊毛、肉獸等の輸出夥しく穀物、綿、煙草、珈琲其他の農産物少なからず、就中南阿をして盛ならしめしは金剛石と金にして、金剛石は喜望峰州のキンバレーを主産地とす、キンバレー市は人口三萬四千。金はトランスバール州を主産地とし、その中心ヨハネスブルグは人口十五萬六千、同州の首府プレトリアは人口三萬六千、喜望峰州クープタウンは人口十六萬、航路の要衝に當り鐵道の中心也。

【阿弗利加屬島】 マダガスカル島—土地豊饒、ゴム、香料、良材、染料、植物、藥用植

物等を産し、煙草、棉花、珈琲、甘蔗、丁字、麻等の農産物の他鑛産物亦少からず、佛國の保護地也。レユニオン島はホルボレとも呼び、佛領也。マウリシウス島は英國直轄植民地也。カナリー群島は西領、阿弗利加西岸航路の要衝也。ケープパード島は葡領、アツセンション島は英領、セントヘレナ島は英國直轄植民地にして、ナポレオン流竄の地として知らる。

第五編 歐羅巴洲

【面積及び境界】 地勢上亞細亞大陸より西に延びたる一大半島也、亞細亞と一括して、ユーラシアと名づく、面積六十四萬方里、海岸線極めて複雑也。半島。クリム半島—バルカン半島—イタリア半島—イベリア半島（以上南方）—プルターニウ半島（以上西方）—ユト

ランド半島、フィンランド半島、スカンヂナヴィア半島（以上北方）。内海。裏海（アゾア海を含む）—マルモラ海（ダーネル、ボスポラスの二海峡に扼せらる）—地中海（エーゲ海、アドリア海、ダラント灣、リオン灣等を含む）、シアラル海峡によりて大西洋と通ず（以上南方） 北海—バルト海—白海—カラ海（以上北方）。 島嶼。イオニア諸島—マタルタ島—シチリア島—サルツニア島—エルバ島—コルシカ島—シノルカ島（以上地中海）—イスラント（以上大西洋）スピツベルゲン島—フランツヨセフスランド島（以上北極洋）。

【地勢】 アルプス山脈中央部より少しく南に偏して東西に連なり、亞細亞のカフカス、タウルト兩山脈に連り、伊太利半島の脊骨を造れるアペナイン山脈となり、阿弗利加北岸に渡りてアトラス山脈を成し、更にイベリア半

島に返りて、シルラネバダ並にピレニース山脈となる。東境にウラルの低山脈ありて、亞細亞の北部低原と續き、スカンヂナヴィヤ山脈は同名の半島の脊梁をなす。バルカン半島には、カルパチア山脈連り地中海北岸には一帯の火山脈連る。此等の諸山系を除いては地勢一般に平坦也。

【河流及び湖沼】 ボルガ河は南流して裏海に注ぎ、ダニユープ河は東流して黒海に注ぎ、ライン河は北流して北海に注ぐ。西部には、ロ—ン、セ—ヌ、ロ—アル等の諸河あり。何れも水流緩徐にして舟楫の便多し。湖沼。露西亞平原の西部にあるものを最とす。

【氣候及び天産物】 氣候は之を三大區域に別ち得。西北部の北極洋及び太平洋岸地方は大西洋暖流（赤道直下の亞米利加沿岸より起り西北に走りて北氷洋に入る。灣流即ちガル

フストリムと稱す)の影響を受けて、夏は涼しく冬は比較的暖かにして雨量濕氣多し。地中海沿岸阿弗利加に對する地方—冬は暖かに雨量多けれど夏は暑くして乾燥す。四東部亞細亞に接續する地方—寒暑の差甚だしく雨量少なし。五中央より西北にかけて植物よく繁茂すれど、地中海沿岸は樹木少く、柑橘類オリブなどの生育に適す、東北東南は曠原の趣を呈す。動物は亞細亞のヒマラヤ以北と相似、北方には、熊、狼、狐、リンクス、山猫、鹿、山羊、カモシカ等住み、獅、虎等の猛獸類は其跡を絶てり。

【人口、人種、宗教】人口約四億、大部分は白人種にして、スラブ族(露西亞領に住む)ラテン族(西南部諸邦に住む)ゲルマン族又はチウトン族(中歐の北隅に住む)ケルト族(英國の西隅に住む)希臘族(バルカン半島に住む)

の五族に分たれ、ゲルマン族最も優勢也。宗教は耶蘇教也、舊教(ラテン族)新教(ゲルマン族)希臘舊教(希臘族スラブ族)等の諸派行はる。

第一章 露西亞

【面積地勢】面積約三十四萬方里、北極洋にはカラ海、白海の兩灣入あり、バルト海にはボスニア、フィンランド、リガの三灣あり。黒海にはクリム半島突出しアゾフ海を抱く。廣潤なる平原にて、東境ウラル山脈の外、一バルダイ岡あるのみ。ペチヨラ河、ゾーナ河、ドニエステ河、ドニエブル河、ドン河、ボル河、ウラル河等の河流縱横に流る。ラドガ湖オネガ湖等の大湖を有す。

【氣候產物】要するに大陸的氣候にして北極の地は凍土帯(タントラ)を成す。夫より南は

大森林帯にして良材多く、夫より南は黒土帯にして地味肥沃、小麥、玉蜀黍等の産多し、其より南は葡萄帯にして葡萄を産す。ウラル山脈より白金、黄金、銅、鐵、石炭等の礦物を産す。

【人口、人種、宗教、政治】人口一億一千万スラブ族の外、フィン族、韃靼族等の黃人種棲む。立憲君主制。希臘舊教。

【地方誌】ペテルグラード人口百八十七萬、首府。クロンスタット—バルト艦隊根據地。リガ—本國第三の貿易港。モスクバー—人口百四十七萬、舊都。オデッサ—黒海沿岸の大商港。ワルソウ—波蘭の首都。キエフ—(宗教文藝の盛なる地)セバストポール—軍港。

第二章 瑞典那威兩國王

【面積地勢】面積四萬九千方里、西海岸は巉巖

絶壁、峽江を有し、東海岸は低く出入に乏し、脊梁山脈西偏し、東海岸及び東南海岸に稍曠潤の地あり。

【氣候產物】西海岸は溫暖雨量多し、東海岸は寒冷バルト海は冬季氷結す。木材、礦物、魚類を主產物とす。

【人口、人種、宗教、政治】人口七百五十萬、ゲルマン族、新教。立憲王國、久しく聯合王國たりしが、千九百五年に分離す。

【地方誌】ストックホルム—瑞典の首府(以上瑞典)クリスチヤニヤ—那威の首府、ベルゲン—鯡の漁業地。ハンメルフェスト—歐洲最北の都市。

第三章 丁 抹

【面積、地勢】面積二千六千方里。西、北海に臨み北にスカゲラル海峡、東にカタガット

海峽を挟む。山嶽なく大河なし。シエルラ
ンド、フイエントラランド、ノフブルステル
等の島嶼を有す。

【氣候、産物及び住民】 概ね氣候溫和、農業
牧畜盛にして麥、牛酪等の産多し。ゲルマ
ン種、人口約二百四十萬、立憲王國、新教。

【地方誌】 コペンハーゲン―人口約四十七萬、
シエルランド島の東岸にあり。首府。屬地―フ
エル群島とアイスランドとを有す。アイスラ
ンドは北極に近く、面積四万里、火山島とし
て有名也。

第四章 獨逸

【面積、地勢】 面積約三萬五千方里、北海の
沿岸は概ね砂丘、バルト海沿岸には、砂礫澤
湖發達す。河口良港をなす。南部は山脈高
原多く、北部は平原を成す。ライン河、ウエ

―セル河、エルベ河は北流して北海に注ぎ、
オーデル河、ウイスツラ河は北流してバルト
海に注ぐ。ドナウ河は南流して埃地利、匈牙利
利に入る。此等の諸河はキール運河と共に水
利の便多し。

【氣候、産物】 ライン河域は溫和、中部及び
南部は大陸的也。森林は全面積の三分の一
に達す、煙草、葡萄、甜菜糖、馬鈴薯、麥、
ビール等の産出少からず、石炭、銀、銅、鉛、
鐵等の鑛産亦豊富にして工業頗る盛也。

【人種、人口、政治(宗教)】 大部分はゲルマン
種。人口約五千七百萬、新教、舊教、並び行は
る。二十六部より成る立憲聯邦帝國にして、
プロシア王、獨逸皇帝となりて主權を執る。

【地方誌】 プロシア、バロリア、サクソニア、
ウエルテンベルヒの四國等と、六大公國、三自
由都市及び帝領土ルザス、ロート、リンゲンと

に區劃せらる。伯林―プロシアの首府にし
て獨逸帝國の首府、人口百九十萬、商工業及
び交通の中心。プレスラウ―鐵工業及び羊毛
市場、ケルン―工業場、エッセン―鐵、石炭を
産す、マゲアブルグ―砂糖製造の中心地。ケー
ニエスマルヒ、ダンチヒ、ステツチン―何れも

北方海岸の要港。リウベツク、ブレーメン、ハ
ンブルグ―三自由都市。ハンブルグは人口七
十萬、國內第一の貿易港。キール―軍港。ドレ
スデン―サクソニア王國の首府。ライプチヒ
―市場。圖書出版に名高し。ミュンヘン―人口
五十萬、バロリア王國首府、ビールの産地スツ
フトガルト―ウエルテンベルヒ王國の首府。

第五章 和蘭

【面積、地勢】 面積二千一百方里。北西部に
ソイアルゼーノ大灣あり、全土低原にして、

殊に西部の大部分は地面水面よりも低く、堤
防に依て海水の浸人を防ぐライ河、マース河
シエルト河之を貫流し運河の便亦開く。

【氣候、産物、住民】 空氣濕潤霧深く冬季は
寒氣強し。農業牧畜盛に牛酪、乾酪の産額
夥し。工業又盛也。人口五百四十三萬、ゲ
ルマニ族、新教、舊教並び行はる、立憲王國。

【地方誌】 ハーグ―首府、萬國平和會議開會
地。アムステルダム―人口五十五萬、金剛石細
工を以て名高し、ロツテルダム―重要なる貿
易港。屬地―東西兩半球に亘りて頗る廣し。

第六章 白耳義

【面積、地勢】 面積千九百方里、港灣殆んど
無し。地勢は南東より北西に緩斜し、マー
ス、シエルト二河之を貫流す。

【氣候、産物、住民】 氣候概して溫和、農業